

---

# とある転生の上書保存（オーバーライト）

天城

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

とある転生の上書保存<sup>オーバーライト</sup>

### 【Nコード】

N8374L

### 【作者名】

天城

### 【あらすじ】

テンプレートで形式美な流れの後、少年は新たな人生を歩むべく、とある世界へと転生する。

そんな本来居る筈の無い、イレギュラーな登場人物が歩む《とある魔術の禁書目録ノとある科学の超電磁砲》。

### 注意書き

この小説には《オリ主》《チート》《御都合主義》などの成分が含

まねております。閲覧の際には、注意してください。

## 一（前書き）

という訳で改訂版スタートになります。  
改訂と言いつつ、ほぼ新造だが大丈夫か？

「……本日を以て、原石<sup>グラインド</sup>研磨計画の無期限凍結が決定された」

広々とした会議室。

そこに置かれた会議机を囲むように座る白衣姿の数十人の人間達にとつて、その一言は彼らを奈落の底まで叩き落すのに十分過ぎる威力を持っていた。

無期限凍結という言葉には、まだ再開の機会があるようにも思える。

しかし、その実態は限りなく中途での強制終了に近い。

あらゆる分野で科学の最先端をひた走ることの街で、当初に掲げた成果を得られず無期限凍結された研究や実験は数多く存在する。

そして、それらが後々“解凍”された例はほぼ無いのだ。

「か、貝積<sup>かいづみ</sup>さん！」

ガタツ、と一人の中年の男が立ち上がる。

かなりの勢いであったため、座っていたキヤスター付きの椅子が一瞬引つ繰り返りかけた。

「上は何が不満だと言うのですか！ 我々の研究は超能力者<sup>レベル5</sup>に大能力者<sup>レベル4</sup>を生み出している！ 絶対能力者<sup>レベル6</sup>まで後一步なんですよ！」

男が言っていることは事実だ。

この研究が始まった切っ掛けともなった極東……いや、世界最大級と評された“二つ”の原石は、今や超能力者<sup>レベル5</sup>と大能力者<sup>レベル4</sup>にまで上り詰めている。

尤も片方は繊細かつ複雑で特異な存在であり、碌に手を加えるこ

とも適わなず、いつの間にか強度判定で超能力者相当になっていただけだ。

だが、対外的に喧伝する成果としては間違いないと上々である。

さらにもう片方も特異ではあるが、先方とは違い少しずつだが着実にデータを齎<sup>もたら</sup>してくれる存在だ。

これからの伸び代を考えると、これも有望と言えるだろう。であるのに何故、このタイミングで凍結されるのか。男にはそれが理解ができなかった。

「話は最後まで聞いて欲しい」

そんな男を制するように先程、計画が凍結される旨を告げた老人、貝積<sup>かいつみつとく</sup>継敏<sup>しん</sup>が言う。

この街を運営する統括理事会の一員にして、原石研磨計画の最高責任者の言葉を聞き、立ち上がったいた男は椅子に 不承不承と いった面持ちで、だが 座り直す。

男が座ったことを確認し、それから居並ぶ白衣の人間達を一通り見回した貝積は改めて口を開いた。

「この度、統括理事会肝煎りの実験が始まることになった。そして、これに資材や資金、研究者の集中を図ることが同時に決定された」

「資材と資金と……研究者の集中？」

「まさか……」

「ああ、そうだ。君達はそちらの研究に合流するよう勧めの通達が来ている」

ざわざわと場が響めく。

統括理事会の肝煎りの実験。それに伴う資材と資金の集中。実験中止の理由がこれだけであつたなら、恐らく彼らは熱り立つただろう。

しかしながら、同時に語られた研究者の集中という部分に、彼らの関心は惹きつけられた。

この街を牛耳る統括理事会が肝煎りで行なう実験への合流。それは即ち、彼らの来歴に箔がつくことを意味している。

原石研磨計画に参画していた研究者、という経歴も箔としては十分なものではある。

だが、統括理事会肝煎りの実験を前にすれば、その輝きが霞むことは否めないだろう。

彼らは研究者であつたが、同時に相応の功名心も持っていた。

科学の最先端を追い求め続けるこの街で、ただただ研究に没頭するだけでは多くの場合、這い上がることはできない。

功名の好機を逃さず掴んでこそ、この街ではより高みに歩を進めることができるのだ。

「もちろん、これはあくまでも勧誘だ。断つてくれても構わない。だが、興味がある者はあそこに書類があるから、これを持って行きたまえ。最終判断をするのは君達自身だ」

貝積が部屋の一角に置かれた書類が入っているらしい封書の山を指差す。

それと同時に室内の関心がそちらに流れたのが感じられたが、貝積は構わずに最後まで言葉を続ける。

「とりあえず君達も考える時間が欲しいだろう。今日は一旦、解散するとしよう」

形式的にそう締め括った後、貝積は悟られぬように小さく溜め息を吐いた。

考える時間など、果たして要るのだろうか。

我先にと封書の山に群がる白衣の人間達を尻目に、貝積は部屋から外へと出る。

書類に群がらることなく、彼に続くように部屋を後にしたのは一人の研究者と貝積子飼いの部下達だけであつた。

原石研磨計画は当初からこういう形で発足したものでは無い。

とある研究機関が主導し、招致した原石の酷使を含む無秩序な実験を実施しようとした矢先、それを好しとしない統括理事会員の貝積によつて、半ば強引に取りまとめられたのが始まりである。

そのため、滑り出しは良かったとは言えず、前進となる計画から続けて参加した研究者達と貝積が連れ込んだ子飼いの研究者達の摩擦も存在していた。

摩擦が決定的なものにならずに済んだのは、貝積自身の手腕と彼が持つ統括理事会員というこの街においては圧倒的な強権。

そして、唯一前身の計画からの研究者の中で彼に賛同した一人の主任研究者が居たからに過ぎない。

どれか一つでも欠けていれば、この計画が“無期限凍結というソフトウェアランディング”を迎えたかは怪しいだろう。

「……で、貝積さんはこれからどうするお積もりで？」

研究所の廊下を歩く貝積に、彼に続くように部屋を出てきた白衣の研究者が話しかけてきた。

黒縁眼鏡を掛けた顔立ちは二〇代後半に見えるが、髪はその歳では不相応に一本残らず白髪という奇妙な青年だ。

しかし、その胸にあるネームプレートには主任研究者を意味する



二つの青い横線が引かれている。

彼こそが原石研磨計画の前身であった計画から続けて参加した研究者達の内、貝積に賛同した稀有な人物その人である。

「どつという意味だね？」

「貝積さんのことですから、きっと私費で研究を続けるつもりでしょう。違いますか？」

「……そうだと云つたら、君はどうするのだね。君ほどの研究者なら、新規に始まる実験でも引つ張り凧なはずだ」

「ずばり言い当てられ、貝積は一瞬だけ言葉に詰まるがすぐに持ち直す。」

「統括理事会の肝煎りともなれば、一族の一人や二人居てもおかしくありません。私は一族の鼻摘み……というよりも、居なかつたことにされている人間です。彼らと顔を合わせるのは、お互いの精神衛生上良いことではないでしょう」

貝積の言葉に自らを一族の鼻摘み者と称する銀縁眼鏡で白髪の青年。  
年。

しかし、目の前の青年こそが世間一般的にまだ真面なことを貝積は知っていた。

あくまでも彼の属する一族の価値観に則ると、青年が鼻摘み者でしか無く、それ故に居なかつたことにしたいに過ぎないだけなのだ。

「そういう訳ですので、私としては回避できる苦行を選択する気はありませんね。望みとしては、このまま貝積さんにお付き合ひしつつ、彼らを見守りたいと思っておりますが……」

まあ、無理なら大人しく大学に引っこ込みますけどね、と青年は付け加える。

「いや、君が付き合ってくれるなら、私としては有り難い限りだよ。教授」

「交渉成立ということですね」

それじゃあ、引越しに備えて荷物でもまとめてこようかな、と青年は呟き、曲がり角で貝積と分かれて歩き去った。

青年の後姿を見送った貝積は、青年が歩き去った方向とは別の方向に廊下を歩き始める。

そして、さらに曲がり角を何度か曲がり、エレベーターで数階移動した辺りで目的としていた場所に到着した。

ゴシック体の文字で図書室と綴られた表札が、扉の上に掲げられている。

もちろん貝積は本を読みに来た訳ではない。

ここに居るであろう、二人の人物に用事があるのだ。

中の二人の邪魔にならぬよう、貝積はその扉を静かに開けた。

図書室という表札の掛けられた部屋の中。

凶器にできそうな厚さの本や見ただけで頭が痛くなりそうな謎の文字が背表紙に書かれた本が詰まった本棚が幾つも並んでいた。

さらにそれだけではない。

本棚の近くに置かれた大きな机に教科書と問題集を広げ、勉強に励む二人の少年の姿があった。

どちらも年齢は一〇代半ば程。高校受験を控えた中学生と考えれば自然だろうか。

「ぐぐぐ……分からねえ」

「ほら、どうした？ 根性があれば何でもできるんじゃないか？」

「い、いや、根性さえあれば勉強ができなくたって高校受験で競り勝てる！」

「いやいや、それは高校受験戦争と全国の本当に根性ある高校受験生達を舐めた発現だぞ、ミスター根性。何なら明日からミスター根性無しって呼ぼうか？」

「だアアアツ！ 分かった！ やってやる！ オレはやってやるぞ！」

そう叫ぶるのは必勝と書かれた鉢巻を頭に締め、十六条旭日旗のプリントシャツを着た少年だ。

一度は机に沈みそうになった少年だが、根性無しの汚名を返上すべく、親の敵と言わんばかりの視線を問題集に向ける。

だが、分からないものは分からないことに変わりなく、次はその視線を教科書に向けて、参考となる部分を必死で探す。

「その問題は一八二頁に公式が載ってるよ。……そうそう、それそれ。それを当て嵌めると良いはずだ」

そして、もう一人。必勝鉢巻の少年に横から助け舟を出すのは、迷彩柄のシャツを着た一見すると何処にでも居そうなくごく普通の少年である。

こちら問題集を相手にしているようだが、必勝鉢巻の少年に比べればまだ余裕がありそうだ。

「……ん？」

迷彩シャツの少年が、何かを感じ取ったようにふと入り口の扉の方を見る。

彼が扉に目を向けてから数秒後、その扉が静かに開かれ、白衣の老人が入ってきた。

貝積継敏である。

「邪魔をしてしまったかな？」

貝積がこちらを見ている少年に気がついたのか、ばつが悪そうな表情になる。

「大丈夫ですよ。えーと、測定の時間ですか？」

少年がそれを否定し、貝積が自分達を呼びに来た　　と想像していた　　理由を推測し、口にした。

そもそも高校受験を控えているように見える少年達が、こんな研究所の図書室で勉強をしているのには訳がある。

彼らは受験生であったが、同時に原石研磨計画における重要な存在、つまり原石と呼ばれる者達なのだ。

残念ながら、この街で研究対象となっている人間の自由は限りな

く少ない。

そのため、本当であれば彼らも実験や測定漬けにされ、高校受験に向けた勉強などする暇は無いはずなのである。

そうであるはずなのに勉強する機会を得ているのは、偏ひんに原石ひんである彼ら個人の生活を尊重し、各種実験や測定の比重を減らした貝積の好意に他ならない。

尤も比重が減らされただけで実験や測定が無くなった訳ではないため、このように貝積や研究者の誰かが呼びに来た場合は、それらを行なう必要があった。

故に迷彩シャツの少年は、いつものように実験を始めるために呼びに来たのだらうと判断したのだ。

「いや、今回は違うんだ。ちょっと君達に話がある」

だが、その少年の言葉を貝積は否定する。

「え？ ……って、おい、軍ぐん覇ぱ。貝積さんが来てるんだぞ。その問題は後にしろって」

「待て。待ってくれ、扶ふ桑そう。こいつだけ、こいつだけは倒させてくれ」

「そこは後で教えてやるっつの！ なんか大事そうな話みたいだから、今はこつちだ！」

我われに関する話なのに我関せずと問題集と格闘する必勝鉢巻ひつせつの少年、削板そぎいた軍覇ぐんぱの暴拳ぼうけんに気がついた迷彩シャツの少年、山城やまし扶桑ふそうは削板の首を無理矢理、貝積の方に曲げる。

曲げられた削板としては堪ったものではなく、うげえ、と奇妙な悲鳴を上げている。

その光景に苦笑いしつつ、貝積は一度咳払いをしてから、口を開く。

「本日を以て、原石研磨計画は無期限凍結されることが決定した」

貝積が発した本日二度目のその言葉は、二人の少年にそれぞれ驚きを持って迎えられることとなった。

研究所に併設された宿舎。

そこにある自室に帰ってきた山城扶桑は、着替えることもなくベツドにごろりと横になった。

「……」

蛍光灯に照らされた見慣れた白い天井をぼんやりと見上げる。

この街に来てから三年間見続けている天井だ。

「もう三年か……」

誰にでもなくぼつりと眩き、過去を思い返してみる。

山城がこの街を訪れたのは、今から三年前のことである。

三歳の時に“意識”と共に開花すると知らされていた異能の力。

その異能の力を見咎められ、原石研磨計画の前身となった計画で

招致されたのが切っ掛けだ。

こちらの世界においての両親と早々に死に別れた　　当時は意識が覚醒する前であったため、山城自身の両親に関する記憶は残念ながらほとんど残っていない　　山城は、その時まで東北地方にある孤児院で日々を過ごしていた。

この世界ではこの街で記憶術や暗記術という名目で行われる脳の開発以外で、異能の力が自然に開花した人間は原石と呼ばれている。仮に街での開発によって作り出される異能の者達を人工のダイヤモンドと例えるなら、原石と呼ばれる彼らはまさに原石。云わば、天然のダイヤモンドのような存在なのだ。

彼らの力を基準に当て嵌めた場合の強度は様々だが、とにかく稀少な存在であり、世界に五〇人ちょっとしか存在していない。

さらに山城と削板はその中でも規格外。

先程のダイヤモンドに例えるなら、一九〇五年に南アフリカの鉱山で発見された史上最大のダイヤモンド原石、カリナンに匹敵する存在と言える。

故に興味を持つな、という方がどうかしているだろう。

稀少の中のさらなる稀少である山城は、こうして興味を持たれ、招致という形でやって来たのだ。

これは“外”から“物語の舞台”へ進む方法を模索していた山城にとっては、願ってもいないことだった。

孤児院に居た身寄り無き彼が、この街に来る方法は限られている。開花した能力を使いこなせていたのなら、また話は違ったのかもしれない。

しかし、生憎能力そのものは開花したものの、その使用や制御までは身につかなかった。

そしてさらに残念なことに、能力の使用法や制御法を学ばせてく

れる場所は、進む方法を模索していた狭き門戸の先であった。  
そこでさあどうしようか、と悩んでいたところへ向こうから門戸  
が開かれたという訳である。

「三年……かなり濃かったな」

外部と比べて二〇年は進んでいる先進科学によるカルチャーギャ  
ップ。

幸運にも開かれた門戸の先で待っていた笑顔で人体解剖し兼ねな  
い非合法で素敵な実験計画。

何とか独力である程度、扱えるようになっていた能力でいろいろ  
と誤魔化し、生き延びる毎日。

その後、まさかの原作キャラの介入で良心的な水準線まで引き戻  
された実験計画とそこでのナンバーセブンとの邂逅。

世界の洗礼を三年間に圧縮して改めて叩き込まれたような感じで  
あった。

これだけでもちょっとした小説が一冊書けるであろう。

さらに前世での理不尽な死の後の流れまで記せば、きつとナウな  
ヤングに馬鹿ウケするに違いない。

「でも、これでもスタートラインはまだなんだよなあ」

ぬはー、まだ序章なんですか、と深い溜め息を吐く山城。

果たして自身の心身は持つのだろうか。

尤もそれはやってみないことには分からないことではあるのだが。

そこでふと我に返り、山城は枕元のデジタル式目覚まし時計を見  
る。

表示板のデジタル数字が示す時刻は、良い子は既に寝る時間帯で  
あった。



山城が良い子かは別として、原石研磨計画が終了したため、明日からはいつもと違う形で忙しくなるはずだ。

ならば、今はさっさと寝て、明日への英気を養うべきだろう。

「うし、今日はもう風呂入って寝るか」

ベッドから起き上がり、山城は下着と寝巻き、タオルを手にバスルームへと向かう。

後に科学と魔術が交差し、物語が始まる街の一角。

この世界のイレギュラーたる転生者、山城扶桑やましろう ふうそうは、科学と魔術が交わる交差点へと着実に足を進めていた。

「二度目の高校受験か……胸が熱くなるな」

山城扶桑は書き終えた願書をざっと見返しながら言った。

サイドブレーキの掛け忘れで立体駐車場から滑り落ちてきた無人の自動車の下敷きという残念な意味で貴重な最期を遂げた後、紆余曲折を経てこの世界で新たな人生を歩み始めた転生者の少年は、通算二度目の高校受験を間近に控えていた。

石橋を叩き壊し、その時点で造り出せる最良の橋を自ら渡すような性格の山城は、二度目の受験に対しても万全の態勢を整えた上で臨んでいる。

二度目だからと余裕をかました挙句、落ちてしまっただけは笑えない。いや、失笑は出るかもしれないが、どちらにせよ精神的及び社会的によろしくないことには変わりはない。

それを認識した上で受験態勢を組み上げた山城に、今のところ手抜かりは無かった。

「軍覇は推薦入試通つたらしいし、俺もすっかりやらないと」

三ヶ月程前まで山城とノートを並べて共に勉強をしていた友人、削板軍覇。

勉強嫌いで山城の発破が無ければ動かなかった削板だが、白い学ランを制服とする高校があると知るや否や自主的に猛勉強を開始し、既に山城より一足先に推薦入試にて希望した進学先への合格を果たしていた。

ちなみに三ヶ月前に原石研磨計画の無期限凍結が決定された際、二人はそれまで在籍していた研究所付属の教育施設から、彼らの後見人となった貝積継敏の部下の一人が運営している中学校相当の教

育施設に籍を移しているの、推薦入試も問題なく使用できる。  
ただし山城の場合は狙っている高校の入試制度その他を勘案し、  
一般入試を選択していたのだが。

「……これで準備完了、つと。ちよつくら願書出してくるか」

書類一式を用意していた封筒に入れ終え、衣紋掛けから防寒着を  
手に取る。

天気“予言”によれば、今日は木枯らし一号が吹くらしい。防寒  
対策はしっかりとしなければならぬだろう。

そう考えながら、黒いリーフアージャケットを着て、迷彩柄のマ  
フラーを巻けば冬季完全武装フルブレストの出来上がりである。

そして、冬季完全武装仕様となった山城は願書を出してくるべく  
玄関の扉に手を掛け、肌寒い外へと歩み出ていった。

東京都西部の未開拓地域を中心に一気に切り開き、一都三県に跨  
がるように造られた正円形の都市が存在する。

“進んだ科学によって未知を征服する”という理念に基づき、外  
部と比べて二〇年は進んでいると言われる最先端の科学技術の運用  
研究する先進科学都市。

凡そ二三〇万人という人口を擁し、その八割近くが学生で構成さ  
れる都市型完全独立教育機関。

この世の法則をねじ曲げる異能の者、超能力者を生み出す一大研  
究開発機構。

そんな様々な通称を持つその街だが、“学園都市”という呼び方が最も有名だろう。

「はい。今日の巡回はこれでお仕舞い」

その学園都市のほぼ中心部に位置する第七学区の街角。

人々が間近に迫った冬の訪れを感じながら行き交う表通りに、二人の風紀委員ジャツジメンの姿があった。

一人はブレザーにチェックのプリーツスカートを身に着けた、肩口まで伸ばした黒髪と眼鏡が特徴の女子高校生。

そして、もう一人はパーカーに短パン、縞柄のニーソックスという服装で、茶髪をリボンで二つに束ねた小学生くらいの少女だ。

「何か気になったことや聞きたいことはある？」

PDA  
このり  
みい小型情報端末に巡回報告を打ち込みながら、眼鏡の女子高校生、固法美偉は背後の後輩に問いかける。

「……で、では、少しお聞きしたいのですが」

「なに？」

固法に問い掛けられた後輩は少し躊躇いがちに口を開いた。

「風紀委員になって一年にもなりますのに、何でわたくしに任せられるのは裏方や雑用、先輩同伴の巡回パトロールばかりなんですか？」

ジト目がちに後輩、白井黒子シロイクロコは、抱いていた疑問を吐露した。

有志の教職員で構成される警備員アンチスキルと呼ばれる組織と双壁をなす学園都市の治安維持機構、風紀委員。

黒子が一員となり、風紀委員第一七七支部に配属されたのもう一年も前の話だ。

確かに任されている裏方や雑用も重要な仕事ではある。

……ではあるのだが、学園都市の平和を守るために風紀委員を志願した彼女にとって、仕事がそればかりと言うのは実にむず痒いことであったのだ。

「成績優秀な自分が半人前扱いされるのが不満？」

黒子の様子を見て、固法は微笑みながらそう問い掛けた。

「そ、そういう訳ではありませんけど……やはり、わたくしが小学生だからかと……」

固法の問い掛けに黒子は拗ねるように答えながら、顔を伏せる。

その伏せられた頭に固法は優しく左手を置く。

「年齢だけが問題じゃないわ。あなたの場合、なまじポテンシャル素質が高い分、全てを一人で解決しようとするきらいがあるからね」

優しく諭すように固法は言葉を続ける。

「もう少し、周りの人間を頼るようにならないと危なっかしいのよ」

とは言つが、やはり今一納得がいかないらしい黒子はむう、と小さく唸る。

そんな少々意地っ張りな後輩の頭を固法は左手でよしよしと撫でた。

「そんな顔しないの。たくさん頑張ったご褒美に何か甘いもの奢ってあげる」

(……やっぱり子供扱いされてますの)

黒子は胸中で不服を抱きつつ、お金を下ろしてくるからと近くの郵便局に向かった固法の背中を追いかけた。

時間帯的にそうなのか、二人が入った郵便局の利用者の姿は疎らであった。

自動現金預払機ATMの列に向かう固法を見送った黒子は、利用者達の邪魔にならないように少し離れた位置で固法を待つことにした。

しかし、待っている間に特にすることも無いため、黒子は所在無げに局内を見回す。

今日は市内に木枯らし一号が吹き、冷え込むと学園都市が誇る天気予言は告げていたため、防寒着姿の人々が多い。

黒子は自身の服装と彼らの服装とを見比べつつ、自分ももう少し何か着てくるべきだったか、と内心思う。

「あ、白井さん！」

特にやることも無いため、何気なく郵便局内を見回していた黒子へ聞き覚えのある声がかけられた。

「偶然ですねー」

「ういはる初春？ 何故あなたが第七学区に？」

振り返った黒子にはたばたと駆け寄ってきたのは、花の髪飾りが特徴の風紀委員志願生、ういはるかざり初春飾利であった。

少し前に行われた風紀委員志願生向けの秋季訓練。

そこで上司である固法の指示で参加していた黒子と風紀委員志願生である初春は出会っていた。

以降、何かと連絡を取ることが多かった二人だが、今日この場で遭遇したのは完全な偶然だ。

「もうすぐ中学生になるし、学校や寮の下見に来たんです」

「……中学生？ どなたがですか？」

初春の言葉を聞き、黒子は思わず首を傾げる。

「へ？ 私に決まってるじゃないですかー」

一瞬だけ黒子と同じように首を傾げた後、やだなー、と笑いながら初春は答える。

「へ、へー」

（……お、同い年でしたの？）

てっきり初春が自身より二、三歳年下とばかり思っていた黒子。

子供扱いされるのを嫌がる自分が無意識に他人を子供扱いしていたという後ろめたさを悟られぬよう、彼女は声を盛大に裏返させながらも相槌を打った。

しかしながら黒子の勘違いも致し方無いと言える。初春飾利は容姿を含めて、確かに何処となく幼いのだ。

尤も彼女達の年齢を考えれば、単に初春が幼いのか、それとも黒子が大人びすぎているのかは難しい問題である。

「ところで白井さんはもう何処の中学に行くか決まっただんですか？」

それから世間話に話題が移った。

初春が黒子が通うことになっている名門お嬢様学校である常盤台中学に憧憬を抱いたり、黒子はその幻想をぶち殺したり、同校に通う噂の超能力者<sup>レベル5</sup>、超電磁砲<sup>レベルガン</sup>を高慢ちきでいけ好かない性悪女と称したり。

尤も後半に辛辣さを振るった黒子の毒舌に、初春は若干気圧され気味ではあったが。

「そういえば、あなたは郵便局に何を……」

そう言いながら、固法はまだだろうか、と何気なく視線を巡らせた黒子は“それ”に気がついた。

「どうしました？」

「ちょっと失礼」

黒子の様子の変化を感じたらしい初春が問い掛けるが、黒子は一言断るとその場を離れた。

彼女が向かう先は険しい視線である方向を見続ける固法の傍だ。



「どうなさいました？」

小声で固法に話しかける。

それに気がついた固法は、静かに、と指を口に当てながら同じく小声で、

「あの男、さつきから職員的位置と視線ばかり気にしてる」

と、郵便局の受付の近くに立つ肩にスポーツバッグをかけたニツト帽の男を指で示した。

黒子はその男をよく観察すると、確かに固法の言うようにやや強張った表情で目線を忙しなく周囲に巡らせている。

すると、固法は黒子に話しかけるように屈むと、他人の持ち物を無断で透視するのは気が引けるけど、と呟き、挙動不審な男の方をじっと見た。

彼女の能力。それはあらゆるものを透かし見る透視能力クレアポイアンスと呼ばれるものである。

これを使えば、鞆の中身などを相手に気取られることなく検あつためることが可能だ。風紀委員向きの能力の一つだと言えるだろう。

(妙な物は持ってないようね……)

男が肩に掛けているスポーツバッグとズボンのポケットの中を順みに透視して、次に上着のポケットに目を移す。

男の右手が上着の右ポケットに突っ込まれており、その手の先には何か握られていた。

「！……右ポケットに拳銃」

「強盗ですよ!？」

固法の口から漏れ出た台詞に小さく驚きの声を上げる黒子。

この予想はほぼ間違いないだろう。拳銃所持で郵便局を訪れる理由などそれ以外に果たして見当たるだろうか。

いや、見当たらなくはないかもしれないが、いずれの場合も不穏なものに変わりはない。

「局員に伝えてくるわ。あなたは万が一に備え、利用客の誘導準備を……」

「逮捕しませんの!？」

その言葉に黒子は思わず抗議する。

「馬鹿なこと考えちゃ駄目よ。犯人の確保は警備員に任せなさい」

だが、固法は抗議を厳しい声で制すると、局員に知らせるために郵便局へのカウンターへと向かう。

そして先輩である固法がそういう判断を下した以上、黒子が動くことはできない。

ただ黙って固法を見送るしかないのだ。

(そんな消極的な……!)

黒子が齒痒く思ったその時、パァンツ!という乾いた銃声が局内に響き渡った。

「あれ？ 確かこつちだったよな……」

残る葉も少ない街路樹の袂を山城扶桑は目的地の郵便局を求めて歩いていた。

少し前の交差点にあった街路図で郵便局の位置を確かめたため、方向は間違っていないはずである。

山城は一度立ち止まり、きよろきよろと周囲に視線を巡らせる。すると、視界の端に探していた第七学区第三支所と書かれた郵便局の看板を見出した。

「ああ、あつたあつた」

山城はそう言いながら、足をそちらへと向ける。

「ん？」

しかし、その手前まで来た時に山城は一つの違和感に気がついた。彼が入ろうとした郵便局の前にできた不自然な人だかり。

困惑気味の雰囲気を醸し出すその人垣に山城は首を傾げるが、ここからでは何が原因なのかを窺い知ることはできない。

とはいえ、このままでは郵便局の中に入れない。

山城は止むを得ず理由を探るべく、人垣を掻き分けて人垣の前面へと抜け出る。

そして、山城は人々が困惑している原因を理解した。

閉まっているのだ。郵便局のシャッターが一つ残らず全て。

休業日と言わんばかりに下ろされたシャツターを前に

(……あれ？ 何かこれ、何処かで見たような……)

休業日と言わんばかりに下ろされたシャツターを眺めながら、山城はふと既視感を感じた。

彼がこの郵便局を訪れたのは初めてのことであるし、ましてやその前に人垣ができている光景など知る由もない。

そうであるはずなのに、この光景を何処かで見たことがある。

一体何処であつたか、と山城が記憶の引き出しに手を掛けようとした瞬間、“それ”は起きた。

「うわっ！」

郵便局の正面まで人垣を掻き分けて出て来ていた山城の目の前に一人の少女が唐突に現れたのだ。

その突然の出来事に山城は驚き、思わず仰け反る。

「え？ ……外？」

一方で山城の眼前に突然現れた花飾りの少女も山城とはまた別の理由で驚いていた。

それを表すかのように茫然とした調子で呟き、訳が分からないといった面持ちで周囲を見回した後、理解した。

「白井さん！ 中に居るんですか！？ どうして私だけ！」

慌てて閉じられた郵便局のシャッターに初春は駆け寄り、ガシヤガシヤと叩きながら中へと呼びかける。

中に居るであろう、彼女を逃がしてくれた友人に向かって。

そして、その一連の光景を山城は固まったまま眺めていた。固まったままの山城の頭の中では、開けようとしていた記憶の引き出しが勝手に片っ端から開き、中身が撒き散らされていく。

(……ああ、そうか)

撒き散らされた記憶の引き出しの中身と目の前の光景は、山城の中で完全に合致した。

全て知っている。

眼前の初対面のはずの少女も、その口から出た名前も、全て知っている。

何故なら山城は一部始終を見たことがあるのだから。

「お、お願いします!」

山城はそこで我に返った。

「助けてください! 中に強盗が! 風紀委員が襲われて……!」

花飾りの少女、初春飾利が目には涙を溜めながら、彼のリーファージャケットの裾を掴んで、そう懇願してきたのだ。

初春の口から出た台詞は掠れた涙声であり、後半はもはや言葉にすらなっていない。

「分かった」

「……え?」

だが、山城には初春の気持ちがいっかりと伝わった。

初春の気持ちを落ち着けるよう、山城は彼女の頭に優しく手を置く。

「俺が必ず助ける。だから今は落ち着いて」

不安そうにこちらを見上げる初春に山城はそう言い、視線をシャッターが閉じた郵便局へと向ける。

一見すると意味が無い行動にも思えるが、彼にとってはそうではない。

(対象物はシャッター。視覚情報に対象の透過率を一〇〇パーセントと上書き)

山城は思考する。

自身の持つ異能の力を、通常の現実と異なる“パーソナルリアリティ自分だけの現実”を顕現すべく高度で複雑な演算処理を高速で処理していく。

すると、不意に彼の視界からシャッターが消えた。

尤も実際にシャッターが消滅した訳ではない。山城の視覚に限定した透過処理を施したのだ。

擬似的な透視能力と考えれば分かりやすいだろう。

これにより、彼はシャッターの向こう側を窺い知ることが可能となる。

そこではダウンジャケットを着た男がポケットから鉄球を取り出し、小学生くらいの少女に歩み寄っていた。

大丈夫だ。まだ間に合う。

(俺の座標情報を上書き。場所はここから一五メートル前方……保存！)

次の瞬間、山城扶桑は初春飾利の前から、彼女の頭に乗っていた手の感触ごと姿を消した。

満身創痍の状態で郵便局の床に倒れ伏す白井黒子は、己の迂闊さを呪っていた。

強盗が複数犯の可能性を考慮せず、独断専行した結果、初春飾利を強盗の片割れの人質に取られ、自身を庇った固法美偉が負傷してしまったのだ。

功を焦って仕損じる。これでは一人前どころか半人前以下ではないか。

しかし、最後の力で初春を空間移動テレポートで外に逃がせたのは行幸だっただろう。

他に人質に取られそうな利用客達は皆、隙を見計らって郵便局の奥に逃げ込んでいる。

もうこれで誰かが新しく人質に取られる可能性は低い。

ならば、後は警備員到着までの間、犯人の男の注意を自分自身に引きつけ、時間を稼げば良い。

「お前が何を考えているか、当ててやろうか？」

そんな黒子の考えを見透かすように、ダウンジャケットの男はポケットに手を入れ、何かを取り出す。

出てきたのは、直径三センチ程の大きさの鉄球。

それを黒子に見せつけるように、男は掌てのひらの上でお手玉もてあその如く遊ぶ。

「警報が鳴って随分経つ。そろそろ警備員も来る。人質を取られなようにコイツを足止めできれば、こちらの勝ち……凶星きんせいだろ？」

グッ、と思わず言葉を詰まらせる黒子。



悔しい事だが、どうやらお見通しだったらしい。

「だがな。ここから出られないと決まった訳じゃあないんだぜ？」

黒子の思惑を言い当てた男はニヤリと口の端を歪めながら、玩んでいた鉄球を握り込む。

そして次の瞬間、手首のスナップを利かせ、閉じた防犯シャッター目掛けて鉄球を勢い良く放った。

普通であれば、地球上で投射された物体は、重力の干渉による放物線運動からは逃れられない。

だが、男が投げた鉄球はその法則を物ともせず、中空を下降する事無く、一直線に突き進む。

イコールスピード  
絶対等速。それが男の持つ能力の名だ。

進む速度こそ遅いものの、彼が投げた物体は如何なる外力をも無視する絶対的な等速直線運動を行なう。

それは男が能力を切るか、投げた物体が壊れない限り続けられ、例え主力戦車の複合装甲板であろうともそれを阻む事はできない。

ましてや今回、男が放った物体は鉄球。対する目標は防犯仕様で多少は頑丈とはいえ、シャッター一枚。

どちらに強度の分があるかは、考えるまでも無いだろう。

……しかし、宙を進む鉄球がまずは前菜とばかりに、シャッターとの間に立ち塞がる窓ガラスに触れようとした時、

「……………あ？」

何の前触れも無く、忽然とその姿を消した。

眼前で起きた出来事が理解できず、男は目を見開いて硬直する。

この男の反応が、鉄球の消失が彼の埒外である事を物語っていた。

「探し物はこれか？」

「！」

カツン、コロコロ。

金属が床にぶつかり、転がる音が静かな郵便局の中に響く。その音に弾かれたかのように、男が慌てて背後を振り返る。

そこに居たのは、一人の少年。名は山城扶桑。やましる ふそう

黒いリーファージャケットを身に纏い、迷彩柄のマフラーで口元を隠した山城扶桑が、男の後ろにいつの間にか佇んでいたのだ。

そして、山城の足元には男の見慣れた鉄球が一つ転がっている。間違いなく男が先程放ったはずの鉄球であった。

知らず知らずのうちに後退りをしながら、男は得体の知れない少年を睨みつける。

郵便局強盗の片割れである男の役目は、局内の利用客や従業員を把握し、妙な真似をする者が居れば阻止に動く事であった。

しかし、少なくとも男が把握していた利用客や従業員の中に、こんな少年は居なかつたはずだ。

であるはずなのに、山城はそこに居る。まるで降って湧いたかのように現れたかのように。

だが、片膝をつきながらも気丈に男と相對していた黒子は目撃した。

男の背後に突然、山城が現れた瞬間を。

( ……空間移動？ わたくしと同じ、空間移動能力者ですの？ )

もしそうであるなら、相当高位の能力者だろう。

彼女自身、まだ強能力者とはいえ、空間移動能力者だ。

自分達の強度が、どのような基準に基づいて決められているかはもちろん知っていた。

その基準に沿えば、自らを転移させられる空間移動能力者は大能力者以上となる。

つまり、あの少年は少なく見積もっても大能力者という訳だ。

( でも、何故こんなところに…… )

一瞬、駆けつけた警備員が同業の風紀委員かとも思ったが、少年が装備や腕章を身に着けている様子は無い。

「お、お前！ 一体何処から出てきやがった！」

「別に何処からだっていいだろ。それを知ってどうするんだ？」

未だに狼狽したままの男の問いを切って捨てながら、山城は男に一步近づく。

その行動は既に先程までの余裕を失っていた男にとっての引き金となった。

「それ以上近づくんじゃねえ！」

男はそう叫ぶや否や、ダウンジャケットのポケットから複数の鉄球を取り出し、山城に向けて一斉に放つ。

散弾銃から撃ち出された散弾の如く、鉄球が空間を埋め尽くす。動きこそ鈍いとはいえ、それら飛翔する鉄球は軟らかな人体を容

易く貫ける存在。

十二分に山城の脅威となり得るはずであった。

「……形状情報を上書き、そして保存」

しかし、山城が小さく呟いた次の瞬間、変化は訪れる。

鉄球が突然、鉄板へと成り代わったのだ。

見えないプレス機が一瞬で仕上げてくれました、とばかりな薄く平らな鉄板に。

これには男のみならず、黒子も驚く。

空間移動能力者と思っていた少年が、トランスフォーム形状変化を行使したのである。

バーンナルリアリティ自分だけの現実を土台にした脳の演算で形を成す超能力だが、それを複数種扱う、デュアルスキル所謂多重能力は脳が持つ演算処理能力の限界から不可能だと言われている。

そうであるのに、少年は二種類の系統が明らかに異なる能力が使用された。

理論上、あり得ないはずの出来事が目の前で起こり、驚くなという方が無理な話だろう。

だが、そんな彼らの驚愕に構う様子も無く、山城は跳躍し、空中に展開された鉄板に飛び乗る。

彼はそのまま何処そのアスレチックステージに挑む髭の配管工の如き軽快さで浮かぶ“鉄板の足場”を次々に踏み渡り、男への距離を一気に詰めていく。

この光景に狼狽ろうたいしていた男も正気に引き戻された。

そして、自身の能力が逆に利用されていると気がつき、即座に能力を解除する。

能力が切られた事で鉄板は一気に失速。進む先を床に変え、ガシヤガシヤンツ！と派手な音と共に落下する。

しかし、落ちたのは鉄板ばかりで、そこに山城の姿は無い。

「何処行きやがった!？」

「上だよ」

降ってきた返答に男は律儀に上を見上げてしまった。

これは致命的であったと言えよう。

何故なら次の瞬間には、山城渾身の右踵が男の顔面を意識こと打ち抜いたのだから。

局員や利用客達が上げる歓声が耳に届く中、白井黒子は未だに驚きから抜けきれていなかった。

彼女の目の前では、迷彩柄マフラーの少年が最後の踵落として刃折れ、矢尽きたならぬ歯折れ、意識尽きてしまった男をぐるぐると簀巻きにしている。

明らかに複数の能力を使ったこの少年は、一体何者なのだろうか。いや、それ以前に警備員でもなければ風紀委員でもないのに、どうして危険を冒してまで自身の窮地を助けてくれたのか。

黒子の中で幾つもの疑問が湧いては消えていく。

「あれだけ縛っておけば大丈夫だろ……えーと、大丈夫か？」

そこで黒子は我に返る。

強盗を簞巻き蓑虫にシヨブチエンジさせ終えた山城が、いつの間にか黒子の傍らまで来ていたのだ。

「だ、大丈夫ですの……痛っ！」

慌てて立ち上がるうとした黒子だが、途端に身体に激痛が走り、思わず顔を顰めた。

彼女は顔や手足のみならず、身体の至る所に強盗から殴打や蹴りを浴びている。

ここまでされて、痛まないはずが無い。

「いやいや、どう見ても大丈夫じゃないだろ。ちょっと動かないでくれ」

少年はそう言いながら、黒子の両肩を掴む。

肩を掴まれた理由が分からない黒子は、山城に訝しげな視線を向けようとしますが、

「……へっ？」

直後に身体中の痛みを綺麗に拭い去られ、素っ頓狂な声を発した。

「これで大丈夫なはずだ」

黒子の両肩から手を離し、山城は立ち上がる。

それに合わせて黒子も立ち上がってみるが、先程感じた激痛が全

て嘘のように消えていた。

試しに殴られた顔を触ってみるが、痛みは感じず、それどころか流していた涙や鼻血の跡すら無い。

狐に包まれたような気分でウエストポーチから手鏡　幸い割れていなかった　を取り出し、改めて確認してみるが彼女の顔には腫れや傷は一切見当たらなかった。

信じられない、といった面持ちで黒子は手鏡を閉じ、何処かへと歩いていった少年の姿を目で追う。

すると、山城は気絶している固法の側にしゃがみ、黒子にしたように彼女の身体へと触れていた。

不思議な事に山城がそうしている間に、固法の背中に黒子を庇った際に突き刺さった警備ロボの破片が次々に消えていく。

やがて服に空いていた穴も瞬く間に塞がり、固法に目立った傷は見当たらなくなった。

「こつちもこれで一丁あがり、っと……ん？　どうした？」

そこで山城はこちらを見ている黒子に気がつき、何事かと問い掛ける。

「……わたくしと固法先輩を治療していただき、ありがとうございます  
ます」

自然とその台詞が黒子の口から出てきた。

「ああ、いいよ。気にしないでくれ。勝手に首突っ込んだだけだし」

「いえ、元はと言えば、わたくしの独断専行が原因です。責任は

わたくしにあります」

黒子は失態を思い返し、憂苦を帯びた表情で言う。

事実、自身が不用意に行動したのが事の切っ掛けである。

あの時、もう少し場を把握して、思慮ある行動も取っていればまた違っていたはずだ。

例え叱責されようと、馬鹿にされようと文句は言えない。

「ふむ……で、その独断専行の結果、何を学んだんだ？」

「え？」

「一生に一度も間違いを犯さない人間なんていないだろ。大事なのは間違った時や失敗した時にそこから何を学ぶかじゃないのか」

諭すような口調で少年は言葉を続ける。

「悔いる事も必要だ。だけど、悔いるだけじゃ駄目だ。人間は悔いから学べる。今回の失敗から、これからは改める部分とこれからも貫く部分をしっかりと見極めれば問題無いと思うぞ」

不思議と抵抗無く、少年の諭告が心に刻まれていく。

確かに彼の言うとおり、だと黒子は思う。

今日から何かを学ばねばならないだろう。

何かを学び、進んでこそ、一人前の風紀委員に近づけるのではないだろうか。

学ばなければ、それこそただの半人前でしかない。



「……その助言、感謝致しますわ」

「それは何より」

山城がそう言いながら、口の端に笑みを浮かべる。

そして、胸の内にあつた憂いを晴らされた黒子も、つられるように笑みを浮かべた。

それを待っていたかのように外から複数のサイレンの音が聴こえてくる。

徐々に近づいてくるそれは、恐らく連絡を受けた警備員の車両だろう。

「さて、警備員も来たみたいだし、俺はこれで」

強盗は二人共既に制圧され、怪我人の治療も済んでいるため、山城がするべき事はもう無い。

ならば、後はさっさと立ち去ってしまうが吉だ。

そう判断した山城は黒子に背を向けて、座標情報の上書きで立ち去ろうとする。

「……！ ま、待つて欲しいんですの！」

しかし、それを察した黒子の身体は考える前に動いていた。

少年の首元から下がる迷彩柄のマフラー。その端を掴み、逃がさぬように引っ張る。

「ぐえっ」

当然、引っ張られたマフラーは閉まり、首が絞まった少年が蛙が

潰れたような悲鳴を上げた。

「な、何をする！」

「手荒な真似をした事は謝罪しますわ……ですが、貴方は重要参考人！ 立ち去られては困ります！」

黒子は風紀委員として、至極真つ当な言い分を述べる。  
強盗犯を捕まえたのは他ならぬこの少年。

故にしっかりと事情聴取を受けてもらう必要があるのだ。

「ちよ、離せ！」

「駄目ですよ！」

彼女の意思が固いと見るや、山城は振り解こうともがき始める。  
だが、さらに近寄られてジャケットを掴まれてはさらに面倒になると、距離を保ったまま振り解こうとしているため、思うように行かない。

その間にも警備員の到着に気がついた利用客達が、外に出ようとシャッターの側に集まり始めている。

局員の手にしろ、到着した警備員の手にしろ、シャッターがもうすぐ誰かの手で開けられる事は明白だ。

今、必要以上に目立ちたくない山城にとって、目撃者が増える事は許容し兼ねる。

「くっ……強行手段！」

やむを得ず、山城は最後の手段を行使した。

刹那、山城の姿が郵便局の中から消える。黒子が掴んでいた迷彩

色のマフラーだけを残して。

世に言う蜥蜴の尻尾切りである。

「きゃっ！」

尻尾切りという形で持ち主に見捨てられ、空間上に置き去りになったマフラーに黒子を支える力は無かった。

結果として、黒子はマフラーごと後ろに尻餅をつくように倒れ込んでしまう。

「おい、大丈夫か！」

その直後、シャッターが警備員の手によって開かれ、郵便局内に日の光が射し込んできた。

日も傾き、窓の外の景色もオレンジ色に染まりつつある頃。現場となった郵便局での現場検証は続いていた。

「監視カメラにはそれらしい少年は映ってませんね」

「だが目撃者は多数いるし、監視カメラにも能力行使や強盗が簞巻きにされる様子“だけ”は映ってるんだが……光学系か発電系の能力者か？」

警備員達が監視カメラの映像を前に、一様に首を傾げる。

と言うのも、画面に映っているのは、強盗の姿“だけ”なのだ。

鉄球が鉄板に変わったり、男が簀巻きにされる様は映されているのだが、妙な事にそれを行なった肝心要の人物……迷彩柄マフラーの少年が一切映っていないのである。

傍から見れば、ポルターガイストや透明人間の類に襲われている図にしか見えない。

少年の身元割り出しをしようにも、当時の局内はシャッターが降りていたために薄暗く、得られた目撃情報も人相までは曖昧であった。

ならば、カメラの映像をと思ったが、こちらはこのように全く映っていない。

こればかりはお手上げである。

「……本当に破片刺さったの？」

「そのはずなんですけど……」

その画面を見て唸る警備員達から少し離れた郵便局の一角では、固法美偉が女性の警備員と共にこれまた同じように首を傾げていた。強盗の能力で爆発し、飛び散った警備ロボの破片から黒子を庇い、気絶したところまでは覚えていてる。

しかし、目覚めてみると身体には掠り傷一つ見当たらない。

彼女が倒れていた周囲には鋭い破片が散乱していただけに、狐に包まれたような気分である。

「あの子や目撃者の言うには、その少年が治療してくれたらしいんです」

「こんな傷一つ無く……一体何者なの？」

「気絶していて少年を見ていない私には……」

「まあ、でしょうね……でも、傷が無かっただけよしとしなさい」

それもそうか、と固法は自身を納得させ、脱いでいた上着を羽織る。

この上着も奇妙な事に穴どころか汚れの一つも無い。むしろ新品と言われても納得できるような状態であった。

一体全体、何の能力をどうしたら、こうなるのだろうか。

そんな再燃した疑問に固法が苛まれている一方、白井黒子は抱いていた疑問の答えを得ていた。

「初春が助けを求めたんですか？」

「はい。でも、あの人、本当に助けてくれたんですね」

同じ長椅子に座る初春飾利は黒子の問いに答えながら、彼女の足をまじまじと見る。

先程までは怪我が本当に無いのかを調べていたが、少年の治療は完璧だったらしく、特に問題は見当たらなかったらしい。

「凄いですよね。本当に助けてくれるなんて」

「ええ……何処のどなたかは存じませんが……」

黒子は脇に置いたウエストポーチをちらりと見る。

そこには何処の誰か分からない、あの少年の元に繋がるかもしれない唯一の証拠物件……迷彩柄のマフラーが畳まれて入れられていた。

本来は警備員に提出しなければならぬ品だが、彼女は何故か咄嗟に隠してしまったのだ。

見つければ何故そんな事をしたのかを間違いなく問われるだろうが、本人もどうして自身がこんな事をしたのか分からずに居た。

「白井さん」

危うく悶々と理由を考え込みそうになった黒子は、初春の言葉で現実に引き戻される。

そして、ウエストポーチから隣に座る初春に視線を移すと、彼女は真剣な顔を黒子に向けていた。

「私、約束します。己の信念に従い、正しいと思った行動をとるべし。私も自分の信じた正義は決して曲げません。……今回はあの男の人に助けられただけでしたけど」

にこりと初春は微笑む。

……一瞬、その笑みが誰かと被ったように黒子には感じられた。

「その約束……わたくしにもさせてくださいな」

「え？」

「今回、わたくしもいろいろと学ぶ機会がありましたの。何でも一人でできると思ってましたけど、それはとんだ思い違い」

まずは一歩進もう。

彼が言っていた、間違いから学ぶという事から。  
故に彼女は誓う。結果的にその一步の切っ掛けを引き寄せてくれ  
た少女に向かつて。

「ですから、これからは二人で一緒に一人前になってくださいませ  
？」

初春の向かい、手を差し出す黒子。

「……はい！」

差し出されたその手を、初春は手に取ることで答えた。

その日の夜。

黒子は寮の自室で、何とか書き上げた始末書を前に安堵の溜め息  
を吐いていた。

一人前の風紀委員への第一歩として、先輩である固法から突貫で  
書き方を教わり、明日まで提出するように言い渡されたものだ。

結果はどうであれ、独断専行には始末書。

これは彼女も理解したため、甘んじて受け入れた。

「うっ……やっと終わりましたの」

兎にも角にも、完成である。

机に向けていた身体を大きく伸ばした後、黒子は書き上げた書類を纏めて傍らの鞆に仕舞う。

明日一番に支部に立ち寄って提出しなければならぬので、うっかり出しっ放しにして忘れる訳には行かない。

と、その際、鞆の傍らに置かれたとある代物が目に入る。

「……結局、持って帰ってきてしまいましたわ」

綺麗に置まれたそれを手に取り、小さく溜め息を吐く。

結局、最後まで提出できなかった迷彩柄のマフラー。

本当に何故持ってきてしまったのだろうか。

答えを求めるように、試しにマフラーを広げてみる。

迷彩という柄こそ変わっているが、それ以外は何処にでもありそうな普通のマフラーだ。

唯一の証拠とはいえ、これから持ち主を探るのは至難の業だろう。

「あれ？」

しかし、マフラーを見回していた黒子はある事に気がつく。

マフラーに取り付けられた英字の製品タグ。そこに油性ペンで名前が書かれていたのだ。

「……山城、扶桑？」

タグに書かれた名前を、黒子は読み上げる。

十中八九、マフラーの持ち主……つまりはあの少年の名前だろう。



「あの殿方……いつか必ず見つけ出して、これを返却して見せますわ」

読み上げた名前を胸に刻み、マフラーをぎゅっと握り締め、少女は一人決意した。

第一話 とある二人の交通事故（トラフィックアクシデント）（前書き）

未だにさくさく指が進む不思議。

そんなわけで、第一話をお楽しみください。

2010/8/8 19:35 一部修正

## 第一話 とある二人の交通事故（トラフィックアクシデント）

学生達にとつて、新たな学年、学校での始まりを告げる四月。

かみじょうとしま  
上条当麻は今日から通うことになっている高校の学生寮のベッドの上で目を覚ました。

枕元の目覚まし時計を見ると、時刻はまだ午前六時である。

「まだこんな時間か」

上条は身体を起こし、軽く伸びをする。

まだもう一眠りできる時間だが、たまには早起きもいいたろう。そう思い、上条はベッドから出た。

「いやー、たまの早起きもいいもんだ」

と言つても、まだ完全に眠気が抜け切っていないのか、その動きは緩慢である。

しかし、部屋の一角で充電していた携帯を手に取り、画面に映し出された時間を見て、眠気に占領されていた脳は一気に覚醒することとなる。

AM08:12。

ギギギ、という擬音が聞こえてきそうな調子で、上条は画面から枕元の目覚まし時計に目を移す。

枕元に置かれたその目覚まし時計は、とても“静か”だ。

“針の音すらない”。

……目覚まし時計の電池切れは、時にとても残酷な出来事を生み出す。

「不幸だあああああああああ！」

とある高校の学生寮に絶叫が響き渡った。

\* \* \*

「不幸だあああああああああ！」

とある高校の学生寮の隣に佇むもう一つの学生寮。

そこで少年は隣の寮から聞こえてきた絶叫で目覚めた。

「朝から一体なんだ……？」

そう言いながら、少年は枕元で充電していた携帯電話を開き、映し出された時間を見て絶句した。

慌てて同じく枕元で本来鳴るはずのデジタル式目覚まし時計に目を移す。

だが、そこに映っているべきデジタル数字は“無い”。

……目覚まし時計の電池切れは、時にとても残酷な出来事を生み出す。

「なん……だと……？」

少年、山城扶桑やましろう ふうそうは、突きつけられた現実に辛うじて反応した。

\* \* \*

そこからの山城の動きは音を超えこそしなかったが、とても速かった。

超高速で顔を洗い、壁にかかっていた制服に慌てて着替え、鞆を掴み、山城は学生寮を飛び出す。

この間、わずかに三分。

始業時刻までは残すこと十五分。

まさか高校の初日から遅刻するわけにはいかない。

「俺はやれば出来る子おお！」

カンカンカン、と金属音も高らかに階段を駆け下りる。

道路に出てしまえば、後は能力を使って移動ができる。

山城はそればかりを考え、周りへの注意は疎かになっていた。

「ちょ……そげぶっ！」

「……え？ たわばっ！」

故に道路に駆け出た山城と同じく焦りから注意散漫のまま、道路を駆けていた上条が出会い頭に華麗な激突をしたことは言うまでも無い。

そして、路上で痛みにとうち回る学生二人。

先に復活したのは、比較的打たれ強い上条であった。

「ぐおお……って、だ、大丈夫か？」

「な、何とか……」

上条当麻は地面に転がったままの相手を慌てて助け起こす。自身とは違う黒いブレザーらしき制服を着た少年。

襟には縦横十五ミリ程度の銀色の金属板を鷲の意匠にくり貫いた校章。

その特徴的な校章は、かなり有名なものであった。

「鷲峰学院？」

「？ ああ、そうだよ」

上条の問いを山城は肯定する。

鷲峰学院。

上条当麻の通う高校と同じく第七学区に存在する学校だ。

元々は単なる中堅校であったが、特に数年前に中等部に“変わった”能力者が入学して以来、急速に勢力を伸ばしており、学園都市五指入りも近いと噂されている。

そんな有名校の生徒と不注意で 自分だけの不注意と思っている ぶつかってしまった上条が取った行動は一つ。

「……ごめんなさい！」

高速で魂の土下座を繰り出した。

「ちよ、おま、何も土下座しなくても」

一方、土下座された山城はというと、困惑気味に土下座を試みる

上条を止めようとする。

山城からしてみれば、自分の不注意も原因の一端であるからだ。だが、ここで山城はあることに気がつき、その行為を止めてしまおう。

目の前で土下座を試みようとしてる相手が誰であるかを理解したのだ。

「本当に申し訳ない！不肖、上条当麻、一生の不覚です！」

そんな山城の心境など露知らず、上条はひたすら謝り続ける。

「あー、いや、本当に気にしてないから。俺も悪いし、土下座は止めてくれ」

何とか再起動に成功した山城は、土下座している上条を立たせた。そして、とりあえず立った二人は制服に付いたゴミや埃を払う。

幸い、汚れだけであり、何処かが敗れているとかそういう被害は無かった。

「お互い急いでたんだろうし、仕方が無いよ。うん」

埃を払い終えた山城は再度気にするな、と上条に言う。

「いやーははは……目覚ましが止まってまして、起きたらこんな時刻で……」

その上条の言葉の直後、ビシツ、という擬音が聞こえた気がした。凍りついた表情のまま、二人は顔を見合わせる。

そして、山城が身に着けていたデジアナ式腕時計を上条にも見えるようにしながら、恐る恐る時間を確認する。

AM08:23。

「遅刻だあああああああああー！」「」

二人の学生は弾かれるようにそれぞれの方向に走り出した。

\* \* \*

「……危なかった。能力を使えばいいと思い出して本当によかった」

始業ギリギリで教室にある自分の席に滑り込んだ山城扶桑は、机にぐっつりとのびていた。

教卓の上では担任教師が、高校生活一日目の今日行なわれる<sup>システム</sup>身体検査の日程を説明している。

(それにしても、いきなり上条<sup>カミツヨ</sup>さんに接触するとはな…)

山城は十数分前の出来事を思い出す。

入居先に指定された学生寮が、隣の建物だということは把握していたが、まさかあんな形でいきなり出会うことになるうとは。

(まあ、でも接点作れたから結果オーライなのかもしれんね)

キーンコーンカーンコーン。



一時間目の始まりを告げる予鈴が鳴り、級友達が次々に教室から出て行く。

黒板に書かれた各能力の測定場所に向かうのだろう。

「山城」

それに続いて立ち上がるうとした山城を担任教師が呼び止めた。

「何ですか？」

「お前は特殊だから、こつちを回ってくれ」

そう言うと、担任教師は紙片を山城に手渡す。

山城はそれを受け取り、目を通し、すぐにげんなりした表情となる。

「これって…全部じゃないですか」

「こればかりは仕方が無いだろう。諦めてくれ」

「…了解です」

その紙片には測定場所　つまり全種類の測定場所　を回る順

番が記されていた。

鷲峰学院の教師陣は、様々な観点から山城が超能力者<sup>レベル5</sup>に到達することを望んでいる。

そのため、極めて特殊な能力を持つ山城に片っ端から測定を受けさせ、一つでも超能力者<sup>レベル5</sup>に引掛からないか調べるつもりのようなのだ。

山城はまた加減するのに骨が折れそうだと小さく独りごちた。

「それでは、行ってきます」

山城はふらふらと教室から出て、一番初めに回るように指定されている視覚系能力の測定場所である東棟へと向かっていった。

「それにしても…」

山城を見送る形となった担任教師は手元の学生情報を見る。

「あの長点上機にも誘われていたのに、何故アイツはうちに留まっただらうな？」

山城扶桑。鷺峰学院高等部一年五組。

身長、一七四センチメートル。体重、六十一キログラム。

能力《上書保存》<sup>オーバーライト</sup>。中等部三年一月時点で大能力者<sup>レベル4</sup>相当。

出身は宮城県仙台市。鷺峰学院高等部には中等部より特待生枠にて進学。

担任教師が手にしていた学生情報には、そのように記されていた。

\* \* \*

鷺峰学院高等部の第一グラウンドに作られた測定場所。

そこには砲丸投げを行なうような目盛りが地面に描かれている。

テレキネシスト<sup>テレキネシスト</sup>テレポーター<sup>テレポーター</sup>念動能力者や空間移動能力者用の能力測定を行なう場所で、五十

キログラムの重りを何処まで移動または転移させられるかを調べる。

その測定場所に山城は立っていた。

「それでは、始めてください」

少し離れた位置にいた記録担当の教師が、測定器の電源を入れながら山城に促す。

「分かりました」

返事をした山城は傍らの台に置かれた重りに触れる。  
触れずに転移させることも山城には可能だが、大能力者<sup>レベル4</sup>を“演じる”には触れることは不可欠だ。

(距離はそうだな……八十二メートル、中心線からの誤差は……十センチあればいいだろ)

山城は一秒にも満たない間で演算を行ない、重りに移動したという情報を上書き保存する。

すると、次の瞬間には山城の触れていた重りの姿は消え、グラウンドに描かれた目盛り上に姿を現した。

『只今の記録、距離八十二メートル、中心線からの誤差は十一センチ。精密動作性A。総合評価レベル4』

測定器が記録を読み上げる。

それを聞いた教師は心なしやや肩を落としながら、それから記録を表に書き留めた。

「まあ、これくらいかな」

一方、山城扶桑は特に気にする様子もなく、身体を大きく伸ばす。誤差は全く無いのだから。

オーバーライト  
上書保存。

世界に存在するあらゆる物、事象、現象に情報や起こりうる可能性を任意で上書きし、保存できる能力。

これを持つてすれば、手触り抜群な柔らかいスポンジをチタン複合装甲並みに硬い物質と情報を上書きしたりすることも可能だ。

さらには自分の手から火が出る可能性や自分が空間移動できる可能性を上書きすれば、擬似的な発火能力者や空間移動能力者になることすらできる。

世界を組み換え、それを事実とできるのだ。

多重能力などという生易しいものではない。

事実上の万能能力。

それが世界最大級の原石、山城扶桑であった。

「って、もうこんな時間か。先生、お先に失礼します」

一日中かけて各測定場所を回った結果、既に日も傾きつつある。

今日の夕飯は何にしようか、そんなことを考えながら、山城は家路につくために鞆を掴んで、測定場所のグラウンドを後にした。

能力を使えば楽に帰れるのだが、山城は歩きを選択した。

ビル風で回る風力発電用風車を横目に道沿いを歩いていく。

既に三年以上住んでいる学園都市だが、この光景は不思議と飽きが来ない。

（転生してしばらくは大変だったけど、何とか学園都市に来て良かった）

山城は歩きながら、学園都市に来るまでの十数年を思い返す。

転生した際、彼は孤児であった。

最初は置き去りになってしまったのか、と密かに戦おのいたものだが、場所は学園都市からは遠く離れた東北地方であった。

だが、その孤児の自分を育ててくれた東北地方にある孤児院にはとても感謝しており、山城は大能力者レベル4として、学園都市から得ることが出来る補助金のうち、幾らかをそちらに送金している。

（まあ、転生していきなり介入、なんて中身の無いことにはならなくて良かったかもしれないな）

何だかんだで山城はこちらでしっかり第二の人生を歩んでいる。原作への介入に対する山城の心構えも既に別なものになっていた。即ち、この“とある世界”で生きる一人の人間として、原作に介入していくつもりであった。

60

物思いに浸っていた山城の前で信号が赤に変わる。

山城は立ち止まり、何気なく空を見上げる。

朱色に染まった空には学園都市自慢の広告飛行船が悠々と飛んでいた。

「おーい！」

そんな山城に背後から声がかげられた。

空から視線を振り返りながら、背後に移す。

そこには手を振りながら、こちらに近寄ってきたのは、山城が朝に接触事故を引き起こした相手の少年、上条当麻の姿があった。

「朝は本当にごめんな」

上条はそう言いながら、また頭を下げてる。

「いやいや、こちらこそ」

そして、反射的に山城も頭を下げ返す。

現にこちらが悪いし、何より謝られてばかりと言つのも恐縮してしまうのだ。

「そういえば、そっちは結局間に合った？」

「あー…それは何とか。この脚力には感謝ですね。はい」

山城の問いに上条は答える。

「どうやら学校には間に合ったようだ。」

「ちなみにそっちは大丈夫だったのか？」

「走つてく途中で能力を使えばいいことを思い出してね。無事に滑り込んだよ」

「それなら良かった」

俺とぶつかったせいで遅刻されたら、幾ら謝罪しても足りないからなあ、と上条は続ける。

それを聞いて、やっぱり良い性格　もちろん良い意味で　している、と山城は内心思った。

「……あ、そういえば自己紹介まだしてなかったよな。俺は上条当麻<sup>かみじょうと</sup>。高一だ」

「ん、ああ、そういえばまだだな。俺は山城扶桑<sup>やましろ ふうそう</sup>。同じく高一」

上条が自己紹介をしてきたので、山城も自己紹介で返した。

「こうして会ったのもきつと何かの縁だよな。なあ、良ければ友達にならないか？」

「上条と？ 俺は全然構わないよ」

自己紹介に続いた上条の意外な申し出に、山城は即座に飛び付く。拒否する理由が全く見当たらない。むしろ、こちらから頼みたいくらいであったからだ。

「ありがとう！ これからよろしくな」

上条は屈託の無い笑みを浮かべ、握手を求めてきた。

「じつちこそ、よろしくな！」

山城はそれに答え、右手を差し出し、握手を交わす。

そして、握手をし終えたところで、信号が青に変わった。

「そうだ。何なら一緒に何処かで夕飯食べていかないか？」

「いい案だな、そうしよう。なら、近くに良さそうな店はあったかな……」

そんな会話をしながら、二人は肩を並べて、信号を渡っていった。  
……これが《幻想殺し》<sup>イマジンブレイカー</sup> 上条当麻と《上書保存》<sup>オーバーライト</sup> 山城扶桑の友人

関係の始まりであった。



**第一話 とある二人の交通事故（トラフィックアクシデント）（後書き）**

感想・評価・意見は随時お待ちしております。

**第二話 とある遭遇の超電磁砲（レールガン）（前書き）**

先にこっちのネタが固まってしまいました。次はあっちを書こう。

それでは、第二話をお楽しみください。

2010/7/24 22:00 一部加筆修正

## 第二話 とある遭遇の超電磁砲（レールガン）

謎の季節性心身虚脱症候群が蔓延し始める五月。

山城扶桑やましろ ふそくは、夕方の第七学区をぼんやりと歩いていた。

先の病に罹患りかんしているわけではない。

単刀直入に言うと、彼は暇であった。

と言うのも、やる事が無いのである。

宿題も学校で済ませて 能力は使わず自力。ここ重要 いる

し、購読しているミリタリー雑誌の発売日は明日。

暇潰し用の携帯ゲームも先日クリアしてしまい、目ぼしい新作が現れるまで待機中である。

「当麻まじひがいれば、それだけで暇潰せるんだがなあ」

山城は一人ボヤク。

四月に上条当麻かみじょう とうまに出会い、友人関係になって以降、一緒に人助けをしたり、不良に追い掛け回されたりと彼と一緒に居るだけで波乱万丈の生活を送っていた。

つまり彼と一緒にいることが最大の暇つぶしになるのだが、その上条当麻はというと、本日はやり終えた課題をコケて水溜りに落とすと言う不幸な出来事の結果、居残りをさせられているらしい。

原作で不幸少年の片鱗は知っていたが、実際に近くで見るともはや同情の念しか湧かない。

「さて、どうするかな」

実際のところ、その気になれば何でもできる。

山城は転生する際に人知を超えた神知のスパコンこと《世界管理ワールドマネージャー》

装置』の一部の使用権限を得ている。

主世界とそれに連なる平行世界を複数管理できる《世界管理装置》の総合演算能力は筆舌にし難い。

そして、その演算能力を少しでも上書保存オーバーライトに還元するとどうなるか。

…軽く同調データリンクさせて、上書保存オーバーライトを行っただけでも世界規模…否、宇宙規模の改変すら可能となる。

原作で世界を終わらせる能力と言われた天体制御アストロインハンドのような上書き保存も片手間で行使できてしまう。

清しいまでのチート。それが山城扶桑という存在なのだ。

もつとも『暇なので世界改変します』と実行する精神を、この世界で一人の人間として十数年生きてきた山城が持ち合わせていない点は世界にとって幸いだろう。

「……夕飯の材料買って、パソコンでもするか」

いろいろと思考した結果、山城は無難な暇潰し方法を選択し、近場のスーパーへと足を向けた。

\* \* \*

「ん？」

そのスーパーからの帰り道、山城はある光景を目撃した。

山城が食材が詰まった袋を片手に歩いていた歩道から車道を挟ん

で反対側。

如何にも不良といった雰囲気を放つ数人の男達が、女子生徒らしき少女　正確には制服の一部とスカートしか見えなかったがを路地裏に引つ張り込んだのだ。

どう判断しても、良い状況ではないだろう。

「あー…」

ジャケット アンチスキル  
風紀委員や警備員を呼んでも間に合いそうにない。

知らぬ間に上条から完全に人助け癖を感染うつされていた山城は、次の瞬間には能力を使い、自分が車道を挟んで反対側の歩道に移動した、と書き保存をしていた。

だが、この判断が後々に大きく影響することにまだ山城は気がついていなかった。

そして、その第七学区のとある路地裏では、数人の男が女子生徒を囲んでいた。

傍目見れば、それは武装無能力者に囲まれた、か弱い少女の凶としか見えない。

「騒がねえなら、痛いようにはしねえからよお。お譲ちゃん」

男は翳した手の平に火の玉を作って見せながら、卑しい笑みを浮かべる。

恐らく強能力者級の発火能力者だろう。レベル3 パイロキネシスト

(強能力者級レベル3がスキルアウトなんてやってるのね…まあ、手を出されたら正当防衛成立ってことで)

一方、ベージュのブレザーにチェック柄の紺色スカートを纏った

茶色い短髪の女子生徒はその火を見ても特に大きな反応をせず、そんなことを考えていた。

「やっぱりよろしくない状況だったか…」

その時、通りに面した方向から声が聞こえてきた。

「何だ、テメエは？」

それを聞いて、発火能力者の男や仲間数人がそちらへと向かう。最終的に女子生徒の前に金属バットを持った男を一人だけ残し、残りは皆、声の主の元へと集結する。

「単なる通行人Aだ。ただ、よろしくない現場を見てしまったから確認に来た」

声の主である山城扶桑は、自分の前に集まった五人程の不良の男達を前に毅然と立っていた。

もつとも、長葱が生えて見えるスーパーの袋片手の姿では全く格好良くないのだが。

「通行人ならそのまま通り過ぎとけよ。それとも何か？ 痛い目に遭いたいのか？」

そんな山城に発火能力者の男が火の玉をちらつかせる。

「どつちがだ？」

山城は長葱をスーパーの袋から引き抜きながら、言葉を返す。

だが、男達はそれを見て、思わず苦笑いをした。

見た目はただの長葱なのだ。その反応はある意味、当然である。

（長葱に硬質だという情報を上書き保存）

「そんな葱構えて格好つけてんじゃ ……」

ヒュン……バゴツ！

ガラガラッ。

「……は？」

だが、次の瞬間には男達は啞然とした。

山城が情報を上書き保存した長葱を勢いよく横にあるコンクリートの壁に叩きつけると、コンクリートの壁が抉れたのだ。

まるで硬い金属の棒で殴り付けたかのように。

「首 パッチソード」

懐かしい名称を口にしながら、山城は傷一つ無い硬質長葱を男達に向ける。

男達はそれに一瞬狼狽えたが、すぐに気を取り直し、発火能力者の男を先頭に挑みかかってきた。

「何かの能力者みてえだが、あんまりナメんじゃねーぞ！」

発火能力者の男が火の玉を放る。

山城に向かって一直線に飛んで行く火の玉。

（火の玉が実体化したと上書き）

だが、その火の玉を山城は大きく振りかぶった硬質長葱で打ち返した。  
その際のバッテリーポーズは、甲子園を狙える綺麗なものであったが、ここでは割愛する。

(火の玉の情報を元に戻し、保存)

「何っ！ ……うわっ！」

そして、打ち返された火の玉は、発火能力者の男の腕に命中し、服を炎上させてしまう。

火の手を消そうと必死に地面に転がる発火能力者の男。

その男に慌てて回りの仲間達が群がり、何とかその火を消し止めた。

「火の玉を打ち返した！？ 何なんだアイツは！」

「おい！消えたぞ！」

「上だよ」

みぎかかて  
右踵リターンズ。

男達が火を消し止めているのに夢中になってる間に、情報を上書き保存して一人の頭上に移動した山城は、そのまま思い切り踵落としを叩き込む。

もちろん、叩き込まれた男は即座に昏倒し、地面に沈む。

そして、地面に降り立った山城は混乱から立ち直れていない男達の腹に順番に硬質長葱を叩き込み、無力化していく。

僅かに十数秒。



その時間が流れた後、立っているのは山城だけであった。

「さて、残りは……え？」

硬質長葱を普通の長葱に戻しながら、女子生徒と側に立つ金属バットの男の方を向こうとした山城は、

「……アンタ、何者？」

身体中を真っ黒焦げとなり、妙な煙を燻らせながら地面に倒れ伏している男と、

「何よ、そのデタラメな能力」

パチパチと放電している学園都市第三位の超能力者<sup>レベル5</sup>、《超電磁砲<sup>レベルガン</sup>》御坂美琴<sup>みさか みこと</sup>の姿を目撃することになる。

(美琴<sup>レベルガン</sup>だとおおおおおおおお！?)

山城は心の中で絶叫した。

路地裏に連れ込まれた瞬間は制服の一部とスカートしか見えていなかったため、一体誰かは判断できなかった。

また、戦闘中も金属バットの男の影になっていたため、誰かは分からなかった。

そして、ようやく誰か判明したかと思えば、よりもよって……である。

「質問に答えなさい。アンタは何者？ 能力は？」

山城が思わぬ遭遇に一步後退つたのが良くなかったのか、美琴は

ツカツカと歩み寄ってくる。

ここで下手に逃げようものなら、次の瞬間には美琴は山城をロククオンした誘導弾ミサイルと化すだろう。

原作が何よりそれを証明している。

「……た、単なる通行人だよ」

「ただの通行人にしては、随分と派手に暴れたみたいだけど？」

山城は上手く誤魔化そうとするが、美琴はそれを許さない。

この役目は上条さんカミジマーのものではないのか？と山城は思うが、現実には実に非情だ。

美琴には“負けぬ”能力を持つ山城だが、原作で上条当麻を相手に行なわれた美琴が勝つまで続けられる“あの”追いかけてこは勘弁願いたいのが本心である。

「そりゃ、止めに入ったからな」

「ふーん……で、一体、何の能力者なのよ？」

「……」

「答えないのなら……」

そう言った美琴の身体をパチパチツと青白い電光が彩る。

「……能力名は上書保存オーバーライト、大能力者だよレベル4」

電光を放つ美琴を見て、下手な隠し立ては平穏な学生生活追いかけてこの終焉を招くと山城は判断し、質問に答えた。

そして、それを聞いた美琴は電光を放つのを止めたが、今度は値踏みするように山城を見据える。

「何か聞いたことが無い能力なんだけど」

「ああ、俺はちょっと特殊で……」

特殊。

そう口走った直後、山城は自分が下手を打ったことを悟る。

「……アンタ、ちょっと私と勝負しなさい」

その言葉を聞いて、美琴の瞳がキラリと光ったのだ。

自分の迂闊さを山城は深く呪った。

「断る、と言ったら？」

「力尽くでも」

「ですよー……」

某戦闘民族も真つ青な超好戦的電撃姫を前に、山城は逃げるタイミングを伺う。

こうなった以上、三十六計逃げるに如かず。

そして、そのタイミングは以外な形で転がり込んできた。

「風紀委員です！ 通報がありましたが大丈夫ですか！？」

山城の背後に誰かの通報を受けたらしい風紀委員が現れたのだ。

「まあ、そついうわけで！」

そちらに一瞬、美琴が気が取られたのを察した山城は、路地裏から近くの高層ビルの屋上に移動した、と情報を上書き保存し、路地裏から姿を消した。

また、学園都市の監視衛星システムなどに悟られないようにするための欺瞞も同時に上書き保存する。

上条当麻に付き合っていた関係で、ジャックメント面倒事から逃走するための手順は半ば条件反射化していた。

それは今回もしっかりと機能し、一瞬でのあらゆる面からの逃走を可能にしたのだ。

「あ！ ちょっと 안타！」

「あなた、大丈夫？ 今逃げた人が犯人ですか？」

「……いえ、アイツは助けてくれたみたいです」

「そうなんですか？ まあ、それなら分かりました。とりあえず事情を……」

……惜しむらくはその逃走手順が対 風紀委員及び警備員用であったことだろう。

それ以外にも通用するとは限らないのである。

(……面倒事を残して逃げるなんて……アイツ、今度会ったら覚えておきなさいよ！)

この日を境にして、山城扶桑の平穏な学生生活は終わりを告げることになる。

同日、学園都市第三位の超能力者<sup>レベル5</sup>、《超電磁砲<sup>レールガン</sup>》御坂美琴のタイ  
ゲットシーカーが山城扶桑に固定されてしまったのだから。

第二話 とある遭遇の超電磁砲（レールガン）（後書き）

感想・評価・意見は随時お待ちしております。

**第三話（前） とある戦闘の超電磁砲（レールガン）（前書き）**

……おかしいな。何故、こっちが先に仕上がったんだろう。

それにいつの間にかPV30000、ユニーク40000超えして  
るなんて、世の中不思議だらけです。

それでは、第三話（前）をお楽しみください。

2010/8/8 20:00 一部修正

### 第三話（前） とある戦闘の超電磁砲（レールガン）

「……」

場末という言葉はこの場所のために用意されているのではないか、  
と思う雰囲気放つ映画館から山城扶桑やましろうふそうは出てきた。

そして、映画館の脇で手にしている映画パンフレットに視線を落とす。

（何故見たし）

《香港赤龍電影カンパニー》。

とある世界においては、知る人ぞ知るC級映画マイスターと名高い映画会社だ。

曰く、毎回ハリウッドに通用する映画を目指すが、踏み出す一歩目からして間違っている会社らしい。

だが、山城は原作で《アイテム》所属のとある少女が、この会社を絶賛　もちろんC級マイスターとしてだが　していたのを知っている。

たまの休日にパソコンを弄っていたところ、偶然見つけてしまったこの会社の新作映画情報は、B級映画しか知らない山城の興味を大いに誘った。

絶賛されるからには、相応の理由がある。物は試しだ。

そんな思いで学校が早く終わる本日、C級映画観賞という見えて  
いる地雷……もとい、新たな趣味の扉に山城は手をかけ…

（何故見たし……）



… その扉の堅牢さを前に膝を折った。

山城はパンフレットをグシャツと握り締める。

だが、悔やんだところで山城に千二百円のチケット代や二時間十分の時間は返つてはこない。

流石は香港赤龍電影カンパニー、今回も超期待を裏切らないですね、と満足げに呟きながら横を通り過ぎる十二歳ほどの少女には気がつかないまま、山城はひたすら己の浅はかさを悔いた。

\* \* \*

梅雨入りの時期といえる六月。

襟元に金糸で鷲峰学院校章の刺繍が入った灰色のワイシャツに黒いネクタイ、黒のスラックスという出で立ちの山城は、一人ふらふらと第七学区を歩いていった。

学園都市の天気“予言”によれば、梅雨入りはもう少し先であり、本日は丸一日晴れるらしい。

だが、山城の顔色は晴れず、曇天の様相を呈していた。

まるで一足早く、局地的に梅雨入りしたかのようである。

(何故見たし……)

つまり、彼はまだ引き摺っていた。

尾を引く話の微妙さ。

目と耳に残る微妙な俳優とその台詞。

悪い意味で予想の斜め上をひた走る謎の演出。

《香港赤龍電影カンパニー》は世界のC級映画マニアの期待にしっかりと応えていた。

……だが、そこまで深い領域に達していない山城は、この苦行で想像以上に精神を蝕まれてしまったのである。

(同じ消費にしても、千二百円をドブに直接捨てる方が時間がかからず建設的だな……)

雨雲も真つ青のどんより具合を醸し出す山城。

「あ、扶桑じゃないか」

「ん……ああ、当麻か」

しかし、そんな山城を地獄の底から引き摺り上げる人物がいた。前から現れた友人、上条当麻である。どうやら学校帰りのようだ。

「どうしたんだ？ 浮かない顔して」

「……人は何故、過ちを犯すのかを考えてた」

「……まあ、深くは聞かねえよ」

山城の様子に何かを感じたのか、上条はそれ以上の追求をせず、その隣に並んだ。

こういふ気遣いは素直にありがたいと山城は思った。

時刻は既に完全下校時刻に近い。  
朱色あけいろに染まりつつある街を二人の少年は、掛け合いを演じながら  
並んで歩く。

「… そんなわけで、上条さんは今日も一日変わらず不幸でしたと  
いう次第です」

「俺も今日は凄く不幸な目にあつたな。当麻、お前さ。俺に感染うつし  
ただろ」

「またまたご冗談を……ん？」

山城の隣を歩いていた上条が足を止める。  
どうやら何かに気がついたらしい。

「何か面白いものでもあつたのか？」

「いや……ほら、あそこ見てみるよ」

上条にそう言われ、山城は上条が指差す方向を見る。

二人が立つ位置から少し進んだ歩道の一角。

柄が良くない男達による人ばかりとそれを避けて歩く学生達の姿  
が見えた。

「女の子が絡まれてるみたいだ」

上条がそう続ける。

山城の位置からは確認できないが、上条の位置からはそこまで確  
認できるらしい。

「その女の子が実はあの集まりのボスとかじゃなくて？」

「普通の茶色い短髪の子だったの。ボスとかそういうのは無さそうだな」

茶色い短髪の女の子。

……待て待て、と凄く嫌な予感が山城の全身を駆け巡る。

山城は咄嗟に原作知識を引っ張り出した。

原作である、とある魔術の禁書目録開始は七月の夏休み手前からである。

その際の上条当麻と“あの少女”のやり取りから予測するに、上条と少女の接触はそこから約一ヶ月前だ。

そして、今は六月半ば。

「何か見過ごせないな。ちょっと助けってくるわ」

つまり、どついうことかと言つと。

「ちょ……上条さん！ストオーツプ！」

山城は人だかりに向かつていった上条に駆け寄り、ぐわしつ、と  
その肩を掴む。

そして、鬼気迫る表情で上条を止めた。

「お、おい。どうした、山城？」

その山城の様子に上条は軽く気圧され……否、ドン引きする。

しかし、今の山城の様子はそれをするに十分値した。

青い顔で冷や汗をだらだらと流れているのに目だけは血走ってい

る、たとえば片鱗がお分かりいただけだろうか。

「駄目だ……アレだけは駄目なんだ……ビリビリが……十億ボルトが……」

もつともあれ以来、何度も接敵遭遇エンカウントし、精神的に摩耗している山城からしてみれば、この反応も致し方無い。

だが、この山城の行動はやや遅かったと言えよう。

人だかりに近付いた上条を止めに行った山城は、必然的に人だかりに近付いてしまった。

また、こちらから確認できる距離であるなら、その逆もまた然り。

「見つけたわよ、アンタ」

その聞き慣れてしまったその声に、油の切れたブリキの玩具オモチャのような動きで山城は首を動かす。

そして、目が合った。

ズガシャアン！

直後、人だかりから迸る凄まじい電撃。

これにより人だかりを形成していた不良達が、仲良くミディアムレアとなって崩れ落ちる。

その死屍累々の不良達に構う様子も無く、踏み越えるようにこちらへと向かってくる御坂美琴みさか みことの姿に、山城の顔はついに青色から土気色となった。

「……こ、これは一体全体どういことせうか？」

「……」

事態を飲み込めぬ上条が恐る恐る疑問を口にする。  
そして、そんな上条に顔を土気色をした山城が視線を戻す。

「……当麻」

未だ上条の肩にかかっていた山城の手に力が籠る。  
数秒後、意を決したように山城は ……

「後は頼んだ」

… という言葉を残し、能力をフルに使った最大戦速での逃走を開始した。

「ちよっ！ どういうことだ！ 山城！」

上条は慌てて振り返るが、既にそこには山城の姿はない。  
山城扶桑。逃げ足の速さは間違いなく天下一品に近付きつつある。

「ちよつと 안타」

後に残されてしまった上条は未だに事態をよく飲み込めていなかったが、

「アイツが何処に逃げたか、教えてくれない？」

無理矢理飲まされることになった。

\* \* \*

とある河川敷。

そこに架けられた鉄橋の袂たもとに山城扶桑は息を潜めていた。時刻は既に夜であったが、山城はまだ家に帰っていないかった。いい加減、美琴が諦めて帰った頃に帰宅する腹積もりなのだ。

「当麻は犠牲になったのだ」

逃走途中に自販機から購入した椰子の実サイダーを啜りながら、山城は一人呟く。

そもそもこの役目は自身の役目ではない、原作の流れに戻すべきだ、と山城は都合良く理論武装を固めていた。

それ故に上条当麻デコイをあの場合に置いて逃げてきたのだ。あわよくば御坂美琴ミサイルがそちらに吸い寄せられてくれれば万々歳、というわけである。

「なるほど。友人を置いて逃げて、自分は暢気にブレイクタイムですかあ」

だが、現実とは上手く行かないものだ。

「何故いるし」

山城が眺めていた川面に映る夜景から、声の主…御坂美琴に視線を移す。

本日は二度目であるため、今度は青色や土気色といったカラフルな顔色にはならなかった。

「ちょっと善意の情報提供を求めたのよ。逃げ込んだり、隠れていそうな場所の、ね」

「売りやがったな、当麻……」

自身の行いは棚に上げ、山城は親友の裏切りに呪詛を口にした。だが、山城にはまだまだ手札がある。

煙幕、ダミー、転移などなど。

要するにこれらを駆使し、また美琴から逃走すればいいのだ。

「あ、ちなみにもう逃げても無駄よ。最悪、家の方に押し掛けるから」

しかし、次の瞬間には全ての手札が山城の手からもぎ取られ、纏めてシュレッダーにかけられた。

「……何が望みなんだ」

「私と勝負しなさい！」

ビシッと人差し指を山城に突きつける美琴。

それを見て、バトルジャンキー戦闘狂という単語が山城の頭を過る。

「……わーった。分かったよ。ちょっと準備するから待て」

もう一戦交えて満足させる他無い、という結論に山城は至った。

だが、同時に学園都市に悟られると面倒なことになる、とも考え、山城はその場で演算を開始する。

バトルフィールド時間にして数秒。戦闘場所の準備は完了した。



「この辺りの光と音波の屈折を弄った。いくら暴れても、周りには一切察知されない」

山城が連絡のつもりで何気なく言ったその言葉で、美琴はかなり驚いた。

それもそのはずである。

広範囲の光と音波の屈折を弄る。それはさらりと言える内容ではない。

かなり高度な演算が要求されるはずなのだ。

「ん、どうした？」

山城は驚きのあまり反応が無い美琴に問いかける。

「！……な、なんでもないわよ」

一瞬だけ湧いた不安を払い除けるように美琴は言った。

何を不安がる必要がある、自分はこの時を待ち望んでいたのだ、とばかりに。

「いつでもいいぞ」

橋の下から河川敷に歩み出てきた山城が、スッと姿勢を正す。

「言われなくても、私はずっとこの時を……」

美琴の身体を激しい電光が駆け巡る。

その電光は美琴の右手付近に集まると、大きな雷の槍と化した。

「… 待ってたんだからっ！」

美琴は山城目掛けて、その雷撃槍を思い切り投擲する。

普通の人間に対しては、オーバーキル過剰攻撃に等しい一撃。

だが、まだ僅かに残っていた不安が、美琴にこの槍を第一撃として選ばせていた。

「いきなり大技かよっ！」

対する山城は、美琴が雷撃槍を放とうとしている光景に焦ったが、すぐに能力行使のために演算を行なう。

「えっ？」

そして、山城目掛けて飛んでいた雷撃槍は、その目の前で右と左の二つに裂け、右方は少し飛翔してから空中で放電し切って消滅し、左方は土手に突き刺さり、激しい轟音と土煙を発した。

美琴はその様子を啞然と見ることはできない。

「いやいや、あれは下手したら死ぬだろ！」

山城は抉れた土手を横目見て、思わず抗議の声を発するが、我に返った美琴はそれに構わず、今度は複数の電撃波を飛ばす。

しかし、これも明後日の方向に反れたり、山城自身の空間移動で躲される。

「一体、どうなってんのよ？」

「？ …… ああ、こうなってんだよ」

そう山城が言った直後、周りの地面から何か　細かい粒状のが吹き上がり、山城の周囲に集まっていく。

そして、その細かい粒は山城の目の前の空間で半透明のくの字型ラッセルの除雪板を形成した。

「ちよつと情報上書き保存して、その辺の導体と絶縁体の粒で作ったんだよ。電撃がぶち当たっても、絶縁体で阻まれ、導体に従って明後日に飛んでくようにな」

解除、と言うと、それらの粒は地面へと戻っていく。

誘電力場を作る手もあったが、演算の手間の関係から、一からではなく、周りにあるものを山城は流用したのだ。

「……なるほどね」

何が可能で何ができないのか。

山城の能力特性は、どうも今一つ掴みかねる。

だが、これでは少なくとも正面からの電撃は効かないだろう、と美琴は考えた。

(それなら……)

パリツと放電する右手を美琴は横に翳す。

すると、先ほどの山城のように今度は周りの地面から、黒く細かい粒が吹き上がり、右手付近に集まっていく。

やがて、その黒い粒は剣の形を成した。

「ええー……」

“見たことがある”その低く唸る黒い剣に、山城の顔を嫌な汗が

流れる。

「…一応お聞きしますが、それは？」

「砂鉄よ」

ですよねー！と内心絶叫する山城。

噂の砂鉄剣のご登場である。

「それを高速で振動させてチェーンソーみたいにしてるから、触れるとちよーっと血が出たりするかもねっ！」

その台詞の途中から、美琴は走り出し、山城との間合いを一気に詰める。

そして、山城の居る空間を砂鉄剣で薙ぎ払った。

「お前は俺を殺す気がアツ！」

その凶刃を転移することで間一髪逃れていた山城は、今度は実際に絶叫した。

山城の気持ちも分からないではない。

あんな代物で薙ぎ払われた日には、首と胴体、もしくは上半身と下半身が泣き別れることになる。

普通の感性を持っていれば、間違いなく御免被るだろう。

「躲したんだからいいでしょー！」

いや、そのりくつはおかしい。

「逃げんなー！」

「ざけんな！」

砂鉄剣を振り回す美琴と逃げ回る山城。

この状況を打開するためか、美琴が次の手を打つ。

「ちょこまかと逃げ回ったって、コイツには……」

美琴が砂鉄剣を大きく振るう。

対する山城は転移で逃げる。

先ほどから繰り広げられている光景だが、ここからが違った。振るわれた砂鉄剣。その黒い刃が鞭のように伸びたのだ。

「……こんなこともできるんだからっ！」

そうして伸びた刃は、少し離れた位置に転移した山城に迫る。

さしもの山城でも再転移まではラグが生じる。

美琴はその隙を突いたのだ。

「うわっ！」

幸い、山城はこの一撃をハリウッド顔負けのスタントアクションじみた飛び込み前転で回避した。

だが、これで転移戦法が打破されたことは確実だろう。

冷や汗を垂らしながら、山城は美琴をジト目で睨む。

「俺をそんなに亡き者にしたいのか……」

「アンタが逃げ回るからでしょう」

「生憎、素直に真つ二つにされるような命をかけたマゾヒストにはなりたくないんで、ね！」

会話中にも迫ってくる美琴。

そして、振るわれる砂鉄剣。

山城はそれを避けるために転移……しなかった。

「!？」

砂鉄剣が何かとかち合った感触を美琴は感じた。

なんだろう、と美琴はその感触の正体を確認するべく、砂鉄剣に視線を落とす。

……そこでは美琴の砂鉄剣と山城が握る淡白く光る“何か”が、激しい鏝迫り合いを演じていた。

第三話(前) とある戦場の超電磁砲(レールガン)(後書き)

感想・評価・意見は随時お待ちしております。

### 第三話（後）（前書き）

本日は定期を忘れて思わず不幸だ、と口走ってしまいました。

とある改札前で立ち往生して不幸だ、と言っていた人がいたならば、それは多分私です。

それでは、第三話（後）をお楽しみください。

2010/9/20 21:50 一部修正



### 第三話（後）

（砂鉄剣と正面から……！？）

御坂美琴はその光景に驚いていた。

避けられるならともかく、まさか砂鉄剣と正面から鏢迫り合いを演じれる武器を。

そして、何より鏢迫り合いを選択する相手を美琴は今まで知り得なかったからだ。

さらに驚きはそれだけではない。

淡白い“何か”と接する砂鉄剣の刃の部分。

そこが真っ赤に溶け落ち始めたのだ。

思わず後ろに飛び退き、美琴は山城と距離を取る。

その飛び退いた衝撃で溶解した砂鉄剣の一部が地面に滴り、ジュワツと音をたてた。

「……レーザー？」

「大体合ってる。どうやらコイツならかち合えるみたいだな」

淡白く光を発する日本刀のような形をした“それ”を山城扶桑は構えなおす。

その正体は、山城が情報を上書き保存して構成した光量子と熱エネルギーの超々高密度集合体だ。

某銀河系の自由と正義の守護者達が使う“例のアレ”の日本刀の形をしたバージョンと説明すれば分かりやすいだろうか。

美琴の砂鉄剣は、その構成物質である砂鉄が超高熱の光量子で溶

かされたのである。

「そういうわけで、そろそろこっちからも……行かせてもらおうぞ！」

そう言った直後、山城が美琴に向かい、光量子刀を構えながら駆け寄る。

美琴は逃げていた山城が攻勢に回ったことに驚きつつも、砂鉄剣で防御を行った。

光量子刀と砂鉄剣が激しくぶつかり合う。

しかし、やはり砂鉄剣の方が若干不利らしく、砂鉄が次々に熱で溶け、地面に滴り落ちてしまう。

それでも美琴は構わず、溶け落ちた分を辺りの砂鉄で補い直した刃を振るい返し、山城もそれに応戦する。

夜の河川敷で斬り合い、打ち合い、払い合う黒と白の刃。

その戦いを彩るのは、溶け滴り落ちる砂鉄の赤。

それはいつまでも続きそうな幻想的な戦いであったが、終わりは近付きつつあった。

「くっ！」

周辺の砂鉄の枯渇に伴い、形勢不利を悟った美琴が後ろに飛んで、山城と距離を取ったのだ。

「初めてよ。私と互角以上に戦った能力者は……」

「そいつは光栄なことだ」

「正直なところ、もう電池切れが近いのよね。……決めさせてもらおうわ」

そう言いながら、美琴は砂鉄剣を解く。  
砂鉄が風に舞い、河川敷の空を黒に彩りながら消えていく。

「……超必殺技のご登場というわけか」

対する山城も光子量子刀を解いた。

日本刀の形になっていた光の粒がその形を崩し、夜の河川敷に溶けるように消える。

「へー。知ってるの?」

「レールガン……正式名称は電磁<sup>EM</sup>投射砲。砲弾を電磁誘導で超加速させて撃ち出す兵器、だろ?」

「詳しいのね」

「お前の異名だし、何より俺はミリタリーマニアだからな」

河川敷でお互い動かぬまま、視線だけが静かに交錯する。

「なら、実物見てみる?」

「……毎度思うんだが、俺がそれで死んだらどうするんだ?」

「どうもアンタは殺しても死にそうに見えないんだけど……」

「俺はお前の中でどんな生物になってるんだ。地球外生命体<sup>エイリアン</sup>か何か?」

という山城の突っ込みは無視され、美琴はスカートのポケットから一枚のコインを取り出す。

同時に美琴と周りの空気がパチパチと電気を帯び始めた。射撃体勢、と言ったところか。

「行くわよ」

超電磁砲レールガンの威力を知る大半の人間にとっては、死刑宣告に等しい台詞。

「って、無視かよ！死んだら化けて出てやる！」

その直後、青白い電光が河川敷を駆け抜け、それにやや遅れて迅雷が響いた。

激しく舞い上がった砂埃が、美琴の視界を閉ざす。

「流石に倒した……わよね？」

力が抜けてしまった美琴が地面に膝を着き、呼吸を整える。  
超電磁砲レールガンに残る全電力を注いだ結果、いわゆる電池切れ状態に陥ってしまったのだ。

その間に舞い上がった砂埃が徐々に晴れていく。

しかし、そこには……

「……流石に死ぬかと思った」

…… 右拳を前に突き出した山城扶桑が立っていた。

冷や汗を流し、息は絶え絶えであるが、しっかりと両足を地に着かせて立っている。

それを見た美琴の瞳が驚愕の色に染まった。

「勝負あつたみたいだな」

そして、山城は突き出していた右拳を開く。  
すると、開かれた手から銀色の小さな何かが滑り落ちていく。

キーン。

そして、滑り落ちた銀色の小さな何か……一枚のコインは、河川敷の石とぶつかり、綺麗な金属音を発した。

「嘘……」

美琴はその光景が信じられず、呆然とそんな言葉を発した。  
異名にもなった自分の超<sup>レールガン</sup>必殺技。  
それを目の前の人間は防いでもったのだ。

「さて……」

山城がそう言い、美琴の方に歩いてくる。

ここで美琴は。自分がとても不味い状況に置かれていることに気がついた。

それもそのはずだ。自分は電池切れで一切動けないのである。  
ましてや冷静に考えてみよう。

戦闘にかまけて冷静さを欠き、美琴は即死級の攻撃を数多く、山城目掛けて発しているのだ。

……つまり、何をされようと抗えないし、文句は言えない。

そう考えている間にも、山城は美琴に近付いていく。  
そして、山城は右手を美琴に伸ばし …

「ピッ！」

反射的に美琴は目を瞑り、身体を強張らせる。

「ていつー！」

… 山城は美琴の額を軽くデコピンした。

\* \* \*

「これで一本だよな」

「……え？」

「一本入れたんだから、試合終了でいいだろ」

山城の言葉が理解できず、美琴は啞然とした。  
いや、正確には意味は分かったのだが、素直に頭に入って来なかったのである。

「？ 何をボーツとしてるんだ？ …ああ、そっか。電池切れで立  
てないのか」

山城はそう言うと、未だに啞然としている美琴の身体をひよいと抱き上げた。

この思わぬ事態に美琴はさらに混乱する。

「な、ななな何を！」

「立てないんだろ？ 座れるとこまではとりあえず我慢しとけって」

そう言いながら、山城が河川敷の土手にある階段に向かう。

立てないことが事実である美琴は、顔を赤くして唸りながらも山城にその身を任せた。

そして、土手の階段に美琴をとりあえず座らせた山城は、戦闘の痕跡も生々しい河川敷に情報を上書き保存し、元通りに戻していく。数十秒後には、焦げ跡や吹き飛んだ地面の一部が元に戻り、平穏な河川敷が姿を取り戻した。

「これで問題無<sup>キーマンタイ</sup>しつと」

「……」

座らせられていた美琴はというと、冷静さを取り戻すと同時に驚くことを止めていた。

何故かは分からないが、この人物と一緒にいると驚くという行為が無駄に感じられてしまうのだ。

美琴がそう考えている最中も、山城は目の前でマジックの如く、両手に飲み物の缶を出現させているのである。

このまま驚き続ければ、一生分の驚きを消費してしまうだろう。

「ほじ」

そんな美琴の胸中など露知らない山城は、出現させた缶のうち、椰子の実サイダーを美琴に手渡す。

断る理由も無いため、美琴はそれを素直に受け取る。プルトップを空け、一口だけ啜る。味は学園都市の自動販売機で売っている椰子の実サイダーと何ら変わりは無かった。

「……ねえ」

「ん、なんだ？」

「何個か質問していい？」

缶珈琲を片手に隣に座った山城に対し、美琴は問い掛ける。

それに対し、山城は答えられる範囲なら、と前置きをしてから許可を出した。

「分かったわ。……じゃあ、まず一つ。最後の一撃はどうやって止めたのよ？」

最後の一撃というのは、あの超電磁砲レールガンのことである。

「アレか。アレは……まあ、こんな感じで」

山城はそう言うと、手にしていた未開封の缶珈琲を上になく放り投げた。

放り投げられた缶珈琲はある程度上昇し、次に重力に従って落ち始める。

だが、その落ちる速度が唐突に緩まった。

「！」



ふわふわとまるで羽のように緩慢に落下する缶珈琲。それを山城は右手で掴んだ。

「速度情報を上書きして、遅くしてから掴んだんだ。それと熱も凄かったから、温度情報もな」

つまり山城が超高速演算で撃ち出されたコインの速度情報と温度情報を上書き保存し、突き出した右手で握り込んだ……というのが、その実態であった。

「……タネは分かったけど、さらっと言える内容じゃないわよね」

ズズツ、と椰子の実サイダーを啜りながら、美琴は言う。

理屈では分かる。だが、それを可能にするには高度で複雑な演算を超高速で行わなければならない。

不可能ではないが、不可能に限りなく近い行為なのである。

「そう言われると、俺も何とも言えないけどな」

そう言うと、山城は缶珈琲をプルトップを開け、中身を啜り始めた。

仕事の後はこの一杯だねー、と言いながら。

「じゃあ、二つ目。アンタ、本当に大能力者<sup>レベル4</sup>？」

続いた美琴の質問は至極当然なものであった。

これほど能力で多彩なことを行なえる人間が、単なる大能力者<sup>レベル4</sup>扱いは信じ難い。

ましてや、学園都市第三位の超能力者<sup>レベル5</sup>と渡り合い、あまつさえ勝

利しているのだ。

「……測定機械が弾き出して、書庫バンクに記録されてる分はそうだな」

レベル4大能力者と測定されるように調整している、とは流石に言えないため、山城はそう誤魔化した。

美琴はその山城の答えを訝いぶかしんだが、書庫の情報がそうなら他に調べる術すべが無いため、それ以上は追求しなかった。

「何か引つ掛かるけど……まあ、分かったわ。じゃあ、とりあえず最後。アンタの名前は？」

その問いに山城は思わず、鳩が豆鉄砲を食らったような表情になった。

何かもつと痛い場所を突いて来る質問かと思っていたのに、全然違うものであったからだ。

「俺の名前？ そんなの聞いてどうするんだ？」

「へ、変な勘違いしないでよね。私を打ち負かした奴がどんな奴か知っておきたいだけよ」

「ああ、なるほど。でも、人に名前を聞く前に自分から名乗るべきじゃないか？」

原作知識のお陰で名前は知っているが、まだ正式には名乗られていないことを山城は思い出した。

「……まあ、一理あるわね。私の名前は御坂美琴みさか みことよ」

「よし、それなら俺も名乗り返そう。俺の名前は山城。やましろ山城扶桑ふそうだ」

美琴が素直に名乗ったため、山城も名乗り返した。それを聞いて、美琴がうんうんと頷く。

「山城扶桑、ね。憶えたわ。アンタ、またいつか再戦させなさいよ」

「えー」

「えー、じゃない」

「ええー」

「……」

「申し訳ございません」

不穏な空気を察した山城は、即座に魂の土下座で誠意を示した。対する美琴は、ふん、と鼻を鳴らしてそっぽを向く。

「えーと、それじゃ……御坂。一つだけお願いが」

土下座のまま、あることを思い出した山城がおずおずと美琴に声をかける。

「何よ?」

「自宅に押しかけることだけは絶対に止めてくれ」

「何でよ?」

「俺から安息を奪わないでくれ……」

「……分かったわよ」

涙目で懇願する山城に、渋々、といった面持ちではあるが、美琴は約束した。

だが、山城としては涙を流すほど、生活に直結する死活問題なのだから仕方が無い。

美琴に毎日強襲されでもしたら、それは精神をがりがりと鑢にかけているに等しくなる。

「助かった……」

「大袈裟ね。ただ、代わりに電話番号とか教えなさい」

「何故に」

「だって、再戦したい時に連絡しなきゃいけないじゃない。行つちや駄目なんでしょ？」

「それもそうか……。把握した」

確かに自宅に押しかけさせない以上、何らかの連絡手段は要るだろう。

山城は黒いスラックスのポケットから携帯電話を取り出し、赤外線通信の準備を始めた。

その準備が終わる頃には、美琴も蛙をデフォルメしたような携帯電話を取り出して、同じく準備を終えていた。

「確かこうだったかな。ほい」

赤外線が交わされ、お互いの携帯電話にアドレスが記録される。山城はすっかり保存されたのを確認すると、携帯電話を元のポケットに仕舞った。

「じゃ、再戦の話はこれで。…あ、毎回毎回は御免だからな。さっきも言ったが、俺だって休みたい」

「分かってるわよ……あれ？」

ムツとしたような表情になった美琴だが、自分の携帯電話のある部分に気が付き、その顔色がサーッと変わった。

「ちょ、もうこんな時間！？ 門限過ぎてるじゃない！」

時刻は既に午後九時半を回っている。

美琴が住んでいる常盤台中学学生寮の門限を大分過ぎていた。慌てて立ち上がった美琴だが、どうもまだ本調子ではないのか、その足取りはふらふらとしていて覚束ない。

それを見兼ねた山城が立ち上がり、

「仕方ないな。それなら送ってやるよ」

と、事も無げに言った。

「送るって……どうする気なのよ？」

「転移だよ転移。ここは素直に山城さんにお任せあれ。……でも、場所が分からないから教えてくれ」

それに対し、美琴が常盤台学生寮の位置を口頭で説明した。幸い、口頭でも分かる場所であつたらしく、山城は短く了解、と言つと美琴の手を掴んで、情報を上書き保存した。

余談だが、唐突に手を掴まれた美琴の頬がやや朱に染まったのだが、山城が気付くことは無かつた。

第七学区内に二つある常盤台学生寮。

そのうち、美琴が暮らしている方は、常盤台中学校を含む五つのお嬢様学校が犇く学舎まなびやの園内の学生寮ではなく、その外の地域にある学生寮である。

「さて、一応近くに来たが……」

その常盤台学生寮の近くに転移した山城と美琴は、その様子を伺っていた。

正面玄関の灯りは灯っており、付近に人影は見えない。

しかし、馬鹿正直に玄関から入れば、何処からともなく原作通りイケスゴケウス《首狩り王》が降臨することは何となく予想できる。

美琴も流石に首を狩られるのは嫌だろう。

「……中まで送るしかなさそうだな。部屋は何処だ？」

「部屋？ 部屋は……あそこだけだ」

「あの部屋か」

美琴が指差した寮の一角を山城は確認し、目測距離から転移座標を演算する。

予測演算のため、手間がかかってしまうが、まさか女子寮を透視

するわけにもいかないので致し方無い。

やがて、予測演算を終えた山城は美琴の方を振り向いた。

「よし、準備できた。それじゃあ、送るぞ」

「何かありがとうね」

流石に美琴もお礼を言った。

自分が追い回していた相手が、自分のために骨を折ってくれてくれるのだ。

美琴は口こそ悪いが、根は良い娘なのである。

「気にすんなって。それより、これからは追い回さないでくれよな」

「それは分かったって言うてるでしょ！しつこいわね！」

河川敷で電池切れに陥った美琴だが、ある程度は元気が戻ってきているらしい。

パチパチと放電し始めたのがその証拠だ。

「！　そ、それは止める！直ぐに送るからな！お休み！」

山城は放電されては堪らないとばかりに、美琴をさっさと部屋へと転移させた。

それを終えた山城は脱力するように、その場に座り込んだ。

「……疲れた。どうしてこうなった……」

悪態を吐きながら、しばらくその理由をぼんやりと考え、そして、あることを思い出す。

「……そうか。そうだな。アイツが悪いんだよな」

そんな意味深な台詞を残し、黒いオーラを纏った山城は常盤台中  
学学生寮の近くから転移した。

\* \* \*

(っと……ここに移動させたのね)

気が付くと御坂美琴は、自分の部屋の前に立っていた。  
どうやら山城の転移はかなり正確であったようだ。

(って、ぼんやりしてて見つかったら元も子も無いわね)

それに感心していた美琴だが、寮監に見つかっては不味いと思い、  
廊下からさっさと部屋に入った。

「ただいまー」

「あら、お姉様？ こんな時間に…寮監の目は大丈夫でしたの？」

部屋に入った美琴に、後輩のルームメイト……白井黒子しほくろこが不思議  
そうに問いかけてきた。

「裏技を使ったのよ」



自分を慕う　かなり過剰に　後輩の質問をはぐらかしながら、  
美琴はベッドに座る。

多少、元気が戻ってきたとはいえ、珍しく電池切れになるまで全力で戦った疲れは大きい。

今日は早く寝てしまふべきだろう、と美琴は考えた。

「……むむ！　お姉様、かなり汗をかいていらっしやいますわね。  
では、この黒子がお背中を流して差し上げまsぐふっ」

「自分で洗えるわよ！　全く……」

テレポート  
空間移動で飛び掛ろうとしてきた黒子を、疲れている美琴はとりあえず枕を投げつけることで黙らせる。

最近押しかけてきたこの後輩だが、いい加減、その思考や行動パターンを把握しつつある。

もっとも、把握はしても理解はしたくないのが心情ではあるのだが。

「うー…それにしても、お姉様。こんな時間まで何をなさっていらっしやっただんですの？」

顔に張り付いた枕を除けながら、黒子はまた質問をしてきた。

「……ちよつと腕試しを」

「……またなんですの、お姉様。今度は何処のどなたなんですの？」

美琴の答えに、黒子はやや呆れたような表情になる。

美琴を慕う黒子だが、毎度の腕試しと称する行為には流石に辟易

していた。

「う、うるさいわね！ 怪我はさせてないから大丈夫よ！ とにかくお風呂借りるわね！」

正確には怪我一つ負わせることができなかった、が正しいだろうか。

だが、負けん気の強い美琴は自ら口に出すことを憚った。

とにかく再戦した時にどう戦うかでも考えよう、と思った美琴は後輩の追撃を逃れるためにバスルームへと向かう。

一方、そのバスルームの扉がパタンと閉じられるまで美琴を見送った黒子は、ある違和感に気が付いていた。

「腕試し、ねえ」

今まで美琴が汗だくになるまで腕試しをしてきたことがあっただろうか、という違和感に。

\* \* \*

同時刻。

第七学区のとある学生寮の階段を幽鬼のようなオーラを放つ少年が上っていた。

その学生寮はやや古い学生寮ではあったが、各種セキュリティシステムはしっかりと設置されているはずである。

しかし、そのどのセキュリティシステムも少年に反応することは無かった。

そして、少年は目的としていた階に達する。

ゆらりゆらりと廊下を歩き、とある部屋の前に到着した。

その部屋からは灯りとテレビの音が僅かに漏れており、部屋の主がまだ起きていることを少年に知らせていた。

「…」

にやりと口角の端をつり上げた少年は扉を開けることなく、扉の前から消える。

そして、玄関に“現れた”少年は、一応律儀に靴を脱ぎ、そこから見えるリビングに歩みを進めていく。

そのリビングでは、一人の少年がテレビをのんびりと眺めていた。

「当麻」

ビクウツ！

その声にテレビを見ていた少年……かみじょうとしま上条当麻は、まるで背中に氷でも入れられたかのような反応を示した。

「俺の名前を言ってみろ」

ギギギ、と擬音が聞こえそうな調子で上条は声の主の方を見る。

「……こ、これはこれは山城さん。お、お帰りでしたか」

「小便は済ませたか？ 神様にお祈りは？ 部屋の隅でガタガタ震

えて命乞いをする心の準備はOK？」

声の主……山城扶桑が放つ黒いオーラが強まる。

その有無を言わさない様子に上条は思わず後退った。

「ま、待て！待ってください！ 人間話せば分かり合えるはずだと上条さんは説得します！」

「分かった。なら、少し“オハナシ”しようか」

人はこれを八つ当たりと呼ぶ。

その直後、とある学生寮にいつもの言葉が響き渡った。

### 第三話（後）（後書き）

感想・評価・意見は随時お待ちしております。

**第四話（前） とある再会の風紀委員（ジャッジメント）（前書き）**

お陰様でこの小説もPV70000、ユニーク85000を叩き出すに至りました。

皆様、ありがとうございます。

それでは、第四話（前）をお楽しみください。

2010/8/8 20:20 一部修正

#### 第四話（前） とある再会の風紀委員（ジャッジメント）

「不幸だ」

上条当麻かみじょうとうまは、第七学区のファミリーレストラン内で嘆いていた。彼は今、目の前で自らの財布の中身を食い荒らされているのだ。ここまで四人の野口さんが財布からレジスターへの引越しを宣言している。

これでは嘆きたくもなる。

ちなみに現在進行形で彼の財布を食い荒らしている相手は、とある空から降ってくる系暴食シスターではない。

「すみません。追加で大王プリンお願いします」

それは上条の親友で育ち盛りの男子高校生、山城扶桑やましろうふそうであった。

「幸福だ」

「不幸だ……」

幸せそうな表情で食後のデザートを食べる山城。

陰鬱とした表情で珈琲を啜る上条。

この対照的な二人による食事会が開催された切っ掛けは数日前に遡る。

山城による“夜通し耐久オハナシ”に屈した上条が食事を奢るから許してほしい、いや、許してください、ごめんなさい、と言い出したことがその発端だ。

ウェイター二人によって運ばれてきた巨大極まりない大王プリンを綺麗に、かつ幸せそうに平らげていく山城を見ながら、上条は溜め息を吐く。

山城扶桑。上条当麻にとって、高校に進学した後に学校外で初めてできた友人だ。

学園都市でも比較的上位に位置する大能力者<sup>レベル4</sup>ながら、厭味が無く、気さくで気が合う人物。

不幸体質の自分の親友には勿体無いほどの人間だと上条は考えている。

……こんな風に自分の財布でドカ食いされなければ、もっともつと素晴らしいはずである。

「美味しいな、コレ。デカイけど飽きがこない味だ」

そんな上条の心境など露知らず、山城は既に大王プリンの半分以上を胃に収めていた。

その光景に、おおー、という歓声が店内のあちこちから聞こえる。フードファイターもかくやという勢いで食べている山城は、知らず知らずのうちに店内の視線を集めていたのである。

「ご馳走様」

いつの間にか構成されていたギャラリィ達の拍手を背景に、山城はスプーンを大王プリンが盛られていた皿の上に置いた。

それを見た上条は、ここで打ち止めと判断して安堵する。

被害は野口さん四人。学生向けの食事が基本的に安価である学園都市のファミリーストランで食べたとは思えない損害だが、まだ何とか許容範囲だろう。

「まだもう一品は食えるな」



だが、そう考えていた上条の表情は次の瞬間に凍りつく。

「あ、すみません。追加でこのエンペラーパフェをお願いします。バニラベースにしてください」

その日、上条当麻の財布から樋口一葉女史が引越していった。

\* \* \*

「いやー、美味かった。ありがとうな、当麻！」

「……扶桑には血も涙も無いのか」

明らかに寂しくなった財布を見ながら、上条当麻は涙を飲む。実際のところは紙幣一枚と小銭が少々が無くなっただけだが、体感的には財布がとても軽くなった気がする。

「……まあ、いいじゃないか。お蔭で当麻に向かうはずの不幸が少し……いや、かなり俺で阻まれてるんだから」

それに対し、何故か遠い目をしている山城。

上条はその意味がよく分からなかったが、その話題は触れると起爆してしまう指向性爆薬のように思えたため、聞き返すことはしなかった。

「これからどうすんだ？」

上条の言葉で山城が腕時計を確認する。  
時刻は午後一時過ぎ。今日は休日だが、特に食事会以外の予定は入っていない。

「そうだな。少しブラブラするか？」

だが、上条と一緒にいれば、何か転がってくるのでは無いか、と山城は考え、上条に提案する。

「じゃあ、それで。ちょっと買いたい漫画もあるし……冊数抑えな  
いといけないかな」

その怨めしそうな上条の視線を山城は右から左に受け流す。  
とにかく午後の予定は決まった。

それに従い、二人は第七学区の中心部へと足を向けた。

また、結果的に山城の読みが正しかったことを記しておこう。

上条当麻は言わずと知れた不幸少年である。

犬も歩けば棒に当たるといふ諺ことわざがあるが、当麻は歩けば不幸に当  
たるのだ。

自動販売機でザクローラを購入すれば、何故か出てくるいちご  
おでん。

マンションの軒下を歩けば、近くに落下炸裂する植木鉢。

そして、極めつけは ……

「不幸だあああああああ！」

「犬の尻尾を踏んで追いかけられるとか、いつの時代だよ……」

… 曲がり角で寝ていた犬の尻尾を踏んづけ、追い回されていた。  
やはり上条といると退屈しないな、と山城は思う。

しかし、いつまでもエンターテイメントとして楽しんではいられない。

いくら逃げ足大王と名高い上条でも犬が相手ではそろそろ不利だろう。

それに拍車をかけるように歩道の遙か先で豆粒になりつつあった上条が盛大にコケた。

そのため、山城は迷わず、上条を追いかけていた犬に情報を書き保存した。

「!？」

上条を追いかけていた犬は吃驚したはずだ。

突然、いくら足を動かそうとも前に進めなくなったのである。

もちろん理解できずにはばらくは必死に足を動かしていたが、やがて疲れたらしく、足を止めて地面にへたりこんだ。

そこで山城は犬の情報を元に戻し、離れすぎて豆粒程度の大きさになっていた上条の側に転移した。

「もう犬は追ってこないぞ」

「ぜえ……ぜえ……ありがとう……山城さん……」

地面に突っ伏したまま、息も絶え絶えな上条。

とりあえず、山城は彼を助け起こすことにした。

助け起こされた上条は自力で立とうとするが、まだ体力が回復仕切っていないため、そのまま近くの手摺に座り込んだ。

確かに犬相手に短距離走スプリントレースを演じたのだから、体力的にはかなり辛いだろう。

そんな時、山城は上条が右足に怪我をしていることに気がつく。ただの掠り傷に見えるが、目についた以上は治療した方が良くと山城は考えた。

「当麻、怪我してるじゃねーか。……ほら」

山城は翳した手に消毒液と絆創膏を持っている、と上書き保存する。

そして、上条に出現させた消毒液と絆創膏を手渡した。

流石に道具を揃えてやれば、これくらいの治療は自前でできるだろう。

上条もそれらを受け取ると、自分で治療を始める。

「さんきゅー。……それにしても、扶桑の能力は相変わらず便利だな」

傷に染み渡る消毒液の痛みに耐えながら、上条は“右手”に持つ絆創膏を見た。

山城の能力で出現させたはずの絆創膏は、上条の右手に触れているのに消えていなかった。

「上書きして、保存した時点で“存在していた”ことになるからな。イマジンプレイカー  
幻想殺しでも消せない」

「幻想殺し破り、ってどこか」

「いや、保存する前の上書き行為そのものは異能の力になるから影

響は受けるぞ。だから、右手を含んでる当麻の身体に直接、怪我がないとは上書きできないしな」

「なるほど」

そう言いながら、上条は絆創膏を傷に貼る。

実に簡易な治療だが、擦り傷程度だから問題は無いはずだ。

「これで上条さんの足の傷が化膿して腐り落ちる危険は無くなりましたね」

「あの犬はゾンビ犬かつーの」

体力が戻ってきたらしい上条の冗談に、山城はすかさず突っ込みを入れる。

だが、学園都市（この街）ならバイオでハザードなこともあり得ないか？とも思ってしまうところが怖い。

ピーッ！ピーッ！ピーッ！

「うわっ！」

そんな山城の思考を中断するように突如、耳に警報音が飛び込んできた。

「な、なんだ？ この音」

「これは……車の警報装置じゃないか？」

音源を探して、二人は周辺をぐるりと見渡す。

しかし、見た限りでは音源らしき車は見えない。  
だが、二人が立っている場所の背後に位置する道路。  
その先にパーキングエリアの看板があったのを上条は見つけた。  
どうやら警報音もそちらから響いているようである。

「山城、あつちだ！」

「あつち？ ……あの駐車場か！」

それを合図に二人は駐車場目指して駆け出していた。

\* \* \*

「たまの休日に駆り出されてみれば……」

白井黒子しろい くろこは、街を駆けていた。

いや、天駆けていた、の表現が正しいかもしれない。

空間移動能力者である黒子にとって、道はほぼ関係無い。

現に屋根や電柱の上という“空中”を効率的に利用して、最短距離で目的地へと向かっている。

「馬鹿野郎！ 警報鳴ってるじゃねーか！」

「この車種に付いてるなんて思わなかったんだよ！」

そして、黒子が目的としていた駐車場。

そこには警報を鳴り響かせる乗用車とそれに群がる覆面を被った二人の男がいた。

乗用車の窓は無残に割られ、ドアは開け放たれており、そこから男達が手当たり次第に鞆やカーナビ、カーオーディオを取り外している。

彼らは近頃、この第七学区一帯で騒がれていた車上荒らしであった。

「クソツ！ 早くズラかるぞ！」

鞆とカーナビを抱えた男が、カーオーディオを持つ男に言う。

二人はそれらを抱えたまま逃げ出そうとしたが、その前に到着した黒子が立ち塞がった。

「シヤツジメン風紀委員ですの。器物損壊と窃盗の現行犯で拘束致します！」

男達は風紀委員という言葉に一瞬たじろいだが、相手が小柄な少女と分かると互いに目配せを交わす。

それから、カーオーディオを抱えていた男がそれをもう一人に手渡してから、黒子の前に歩み出てきた。

「嬢ちゃん、悪いことは言わねえ。怪我したくなかったら、そこを退きな」

そう言いながら、男はサバイバルナイフを懐から取り出す。

そして、黒子を牽制するように見せつけながら構える。

「……銃刀法違反も追加ですね」

だが、明らかに銃刀法に引っ掛かるような刃渡りのナイフを見て

も、黒子は動じずに男を睨み続ける。

「怪我してもしらねーぞ！」

やがて黒子の態度に痺れを切らしたらしい男がナイフを振りかぶりながら襲いかかった。

しかし、男が振りかぶったナイフ。

「……は？」

その柄と刃が突然“分離”した。

キーン！キーン！

啞然とする男を尻目に重力に従い、柄と別れたナイフの刃と“短めの鉛筆のような金属矢”が地面に落下する。

よく見てみるとナイフの刃の部分は折れたわけではなく、根元の部分で綺麗に切断されていた。

そして、その切断面はわずかに弧を描いており、そこには金属矢の曲線がぴたりと当てはまりそうである。

「空間移動した物体は、移動先に物体があれば、それを押し退けて現れるんですの」  
レポート

金属矢をナイフの根元に空間移動させ、ナイフを切断した黒子は男に諭すように言うと、直後に男の前から消えた。

男はここでようやく相手が能力者。

しかも、高位の空間移動能力者だと理解する。

だが、それは後の祭りであった。



「ど、何処に……ぐえっ！」

そこまで思考が及んだ次の瞬間には、黒子の綺麗なドロップキックが男の後頭部に突き刺さっていた。

もちろん小柄とはいえ、体重のかかったドロップキックが後頭部という一点に集中したため、男は勢いよく地面に倒れ伏す。

そして、倒れた男を追い討つように男の衣服に金属矢が次々に突き立ち、男は地面に磔にされてしまう。

「これ以上暴れるなら、次はこれを直接……ですよ？」

「ぐ……こ、降参だ……」

「よろしい。……その貴方もすわよ。地面に大の字に伏せなさい」

「……わ、分かったよ」

ナイフを持っていた男が無力化されたことに怖気付いたらしいもう一人の男も、盗品を地面に起きながら指示に従う。

大の字になった男の衣服をこれまた金属矢で固定した黒子は、携帯電話を取り出し、相方に状況終了の旨を伝えることにした。

「こちら、黒子。初春、犯人二名を確保完了ですの」

『白井さん！ちょっと待ってください！』

しかし、携帯電話の向こう……黒子の相方である初春飾利ういはる かざりは焦ったような口調で言葉を返す。

『駐車場の防犯カメラの記録では、駐車場内に入った容疑車両に乗っていた人物は“三人”です!』

「なんですって!?!」

『間違いありません!容疑車両は白のワゴン …』

初春がその車両の特徴を述べようとした時、駐車場内に激しいホイールスピンの音が鳴り響いた。

そして、音と共に駐車場の奥から一台の白いワゴン車が姿を現す。

(冗談じゃねえ!俺まで捕まってたまるか!)

運転しているのは車内で待機を命じられていたもう一人の男であった。

運転する男は黒子や礫にされた仲間にも構わず、一目散に出口へと向かう。

どうやら仲良く捕まる気は無いようだ。

「!逃げしはしないんですの!」

携帯を一旦切った黒子は、ワゴン車の逃走を止めようと、タイヤに空間移動で金属矢を突き立てようとす。

だが、逃げられるという焦りからか、上手く演算を働かせることができず、金属矢はややズレた位置に現れ、空振りに終わる。

その間にもワゴン車は出口へと向かい …

「ちよ、危なっ!」

… 駐車場を出ようとしたところを到着した山城扶桑に片手で止められた。

「な……そこを退け、ガキ！」

男は素手で車を止められたことに啞然としていたが、我に返ると山城をはね除けようと、アクセルを踏み込む。

キュキュキュキュキュ！

しかし、タイヤが虚しく空転するばかりで車は全く動かない。それもそのはずである。

山城が止めるために、咄嗟に速度情報と重力情報を書き保存したため、現在、ワゴン車はほとんど重量がないことになっているのだ。

その状態ではいくら加速させようとも、それ以上の重量を持っている山城に前を抑えられているため、前に進むことができずにその場でタイヤを空回りさせることしかできない。

「なあ、当麻。この人、俺を轢き殺そうとしてるよな？」

「つか、現在進行形でアクセル踏んでるみたいだな」

「ですよな。そついうことなら、正当防衛正当防衛」

山城は同じく到着した上条に確認を取った後、ワゴン車のバンパーを掴み、ひょいと持ち上げた。

この瞬間、ワゴン車は山城の手によって、即席絶叫マシンと化すことになる。

上下左右、さらには回転運動まで加えられ、滅茶苦茶の無茶苦茶に振り回されるワゴン車。

車内から聞こえてくる声が罵声から絶叫、嗚咽と変わっていき、最終的に沈黙するまでの時間はそうかからなかった。

「いやー、いい汗かいたなー」

一仕事やり終えたかのようなさっぱりとした笑みを浮かべた山城は、ようやくワゴン車を地面に下ろし、その情報を元に戻す。

ちなみに車内の男は泡を吹いて意識を手放していた。

(えげつねえ……)

その光景に上条はそう思ったが、山城のそら恐ろしさを知っている分、思いを言葉に出すことなく飲み込んだ。

(えげつないですよ……)

一方、その光景に上条と同じ感想を抱いていた黒子は、とりあえず犯人確保に協力してくれたらしい二人の少年の元に空間移動することにした。

もともと黒子自身もえげつない人種にカテゴリーされるのだが、そのことに本人は気がついていない。

「風紀委員の白井ですよ。犯人確保のご協力感謝します」

「うおっ！ ……って、風紀委員か。別に俺は何もしてないよ。全部アイツが終わらせたし」

二人の少年のうち、白いワゴン車の中を確認しているらしい少年

を後回しにして、所在無さげに立っていたツンツン頭の少年、上条当麻に黒子は話しかけた。

上条はいきなり近くに現れた黒子に驚いたが、すぐに気を取り直して主犯 誤字にあらす 指で示す。

「……うわ、本当に泡吹いてるな。流石にやり過ぎたか？」

指で示された先では、もう一人の少年が車内の惨状と運転手の様子を見て、今更ながら罪悪感に苛まれていた。

黒子はとりあえず、上条に警備員到着まで待つように促すと、罪悪感を噛み締めている少年、山城扶桑の元へと向かう。

……この時点では、互いが相手が誰であるかに気がついていなかった。

「風紀委員です。犯人確保のご協力感謝します」

「え？ ああ、俺はただ……」

黒子の呼びかけに気が付いた山城が振り返った。  
そして、互いの視線が交錯する。

「……」

「あ」

こうして、山城扶桑と白井黒子は半年振りの再開を果たした。

第四話（前） とある再会の風紀委員（ジャッジメント）（後書き）

感想・評価・意見は随時お待ちしております。

#### 第四話（後）（前書き）

この話の次に小話を挟んだ後、ついに原作に突入する予定です。  
これからもお付き合いをお願いします。

それでは、第四話（後）をお楽しみください。

2010/8/8 21:30 一部修正

## 第四話（後）

風紀委員第一七七支部。  
ジャケット

第七学区内のあるビルの一室に存在する風紀委員の詰所の一つだ。

その詰め所に置かれたローテーブルを挟んで、二人の男女が対峙していた。

「……なるほど。警報を聞いて咄嗟に駆けつけた、というわけですね?」

「そうなるかな」

ソファーに腰掛けた白井黒子シロイノクノ子は、手元の調書にボールペンを走らせ、発言を取り纏めていく。

そして、調書を書き終えた黒子は何度もそれを見直し、書き間違いがないことを確認する。

この調書は後で風紀委員上層部に提出しなければいけないため、記述に誤りがあつては問題だ。

だが、幸いにも調書に間違いや書き漏らしは見当たらないようである。

「では、これで聴取は終わりですの」

「ん、そうか。じゃあ、俺はこれで ……」

「引き続き」

逃がしはしないと云わんばかりの視線を黒子は帰ろうとした人物



にぶつける。

「半年前の件でお話がありますの」

(……どうしてこうなった)

山城扶桑やましる ふうそうはそんな視線を向けてくる黒子に負け、一度上げた腰を下ろした。

山城が今、何故ここに居るのか。

それを語るには、数十分ほど時間を遡らねばならない。

\* \* \*

数十分前。

駐車場で二人は予期せぬ遭遇に硬直していた。

半年振りの感動的な再開だから、というわけではなく、全くの想定外の遭遇にお互いの処理が追いついていないだけである。

そして、その数秒か数分か分からない硬直から、白井黒子は僅差ではあるが先に抜け出すことに成功した。

「……！ 今度は逃がしませんの！」

がしっ、とかなりの早業で黒子は山城の服を掴む。

一方、逃げようとした山城だが、黒子がそれよりも素早く服を掴んでしまったため、己む無く断念せざるを得なくなった。

「えーと、離してもらえませんかね？」

「同じ轍は踏まないんです。貴方は重要参考人なんですから、お待ちになってください」

「ですよねー……」

戦訓（？）から学んで成長を遂げたらしい黒子に、山城は完全に後手に回ってしまった。

服だけ残して……という手もあるにはあるが、逃げたところで上条当麻が残されてしまう。

残された上条に対し、聴取だなんだと職権乱用されてしまえば、芋蔓式に山城の居場所が判明するだろう。

また、記憶情報を上書き保存してしまう手もあるが、そこまでの逆逆に気が引ける。

結論から言うなれば……

「……降参します」

……山城は白旗を掲げることにした。

その後、到着した警備員アンチスキルによる事情聴取を受け、さらに追加で風紀委員側の事情聴取という名目で、山城だけ黒子ドナドナに連行されていた。

ちなみに連れ去られる際によく分からねえけど、山城も苦勞してるんだな、と上条に憐憫れんぴんの視線を向けられ、不幸少年にすら同情された山城の立つ瀬が無くなったのは言うまでも無い。

そして、物語は冒頭へと戻る。

\* \* \*

「助けていただいたことには感謝しています」

黒子はそう言いながら、山城を見据える。

「……ですが、何故、あの場から逃げたんですの？」

「黙秘権を行使します」

「却下ですの」

「なにそれひどい」

目立つのが嫌だったから。

事情聴取が面倒だったから。

至極単純な理由であったが、それを言ったら最後、何を言われるか分かったものではないと山城は思う。

思い出というものは綺麗なまま、仕舞われておくべきなのだ。

「まあまあ、白井さん。山城さんは悪いことをしたわけではないんですから」

流れていた空気を払拭するように初春飾利ついはるかざりは、淹れたてのお茶を二人の前に置いた。

お茶から揚がる良い香りの湯気が広がり、ささやかな和みを場に齎す。

「お、初春さん。わざわざありがとうございます」

ちなみに互いの自己紹介は山城がここに連行されてきた時点で終えている。

山城があ那时的人物だと分かった時には、初春はキラキラと輝く視線を山城に向けてきた。

どうやら純粹に山城に対して、憧憬を抱いていたらしい。

「いえいえ、山城さんは私達の恩人ですからね。それから、私の方が年下ですから呼び捨てで構いませんよ」

「ん、分かった。それじゃいただくよ、初春」

山城がそう言いながら、お茶に手を伸ばし、美味しそうに啜り始める。

その様子を見て気を削がれたのか、黒子も同様にお茶に手を伸ばす。

初春も二人がお茶に手を付けたことを確認してから、自分の分を飲み始めた。

「それにしても、もう半年前なのか」

「そうですね。でも、私は昨日のことのように憶えていますよ」

山城が感慨深そうな呟きに、初春が言葉を返す。

「人を助けて名も名乗らずに去っていく…まるで英雄ヒーローみたいでしたし」

「随分と大袈裟な」

目を輝かせて言う初春に、山城は再度カップに口を付けることで  
気恥ずかしさを誤魔化した。

流石に面と面を向かって、持ち上げられることには山城も慣れて  
いない。

「山城さんに逃げられた分、事後処理がややこしくなりましたけど  
もね」

「もう、白井さんは素直じゃないんですから」

「事実ですの」

決まりが悪そうに黒子は言う。

だが、言い方はともかく言い分としては真つ当だ。

山城が介入しなくても、原作通りに事が運ばれたはずなのだから、  
かき回したことはない。

しかし、幼い初春に泣きつかれたというあの場の空氣的には、介  
入は致し方ないだろう。

現に山城としては介入したことを後悔してはいない。

「あ、そういえば……」

そこで何かを思い出した山城はカチャ、とお茶のカップをローテ  
ーブルに置く。

「あの時のマフラーだけど、結局どうなったんだ？」

「ぶっ」。

何故かお茶を飲んでいた黒子が小さく咳き込んだ。

「？ 大丈夫か？」

「……けほっ、けほっ。な、何でもないですよ」

黒子が何故咳き込んだか分からない山城は疑問符を頭に浮かべる。  
一方、黒子は気管に入り込んだお茶に悪戦苦闘しつつ、何とか動揺を隠して取り繕う。

「マフラーと言つと、もしかして迷彩柄のマフラーのことですか？」

だが、まだ完全に回復していない黒子を尻目に初春が山城に問い返す。

「それぞれ。結局、あの後に同じ柄を買い直したんだけど、気になつてたよ」

「そのマフラーなら、白井さんが持ってましたよ」

「そうなのか？」

「はい。絶対に持ち主を見つけるとかで、冬の間はずっと持ち歩いてましたね。あ、でも、寒い時は時々自分の首に巻……」

「初春！」

ようやく回復した黒子の動きは素早かった。

ぐわしっ、と唐突に黒子が初春の両肩を掴み、自分の方を振り向かせたのだ。

その突然の行動に初春は驚き、抗議の声を発する。

「し、白井さん！？ 何をするんですか！」

「それ以上の発言は無用ですわ」

「え？ でも……」

「……今日は天気が良いですね。頭の花だけ光合成させるために  
テレポルト外に空間移動させてあげましょうか？」

「ええっ！？ 止めてくださいよー！」

黒井黒子と化した黒子を前に、初春は全力で花飾りの防衛に移る。傍目見れば普段通りにじゃれ合っているようにも見えるが、黒子も初春もそれぞれの事情で普段以上に必死だ。

「あ、そうだ！ 私、本部に定時報告をしないといけないんです！  
！ ちよつと失礼しますね！」

しばらく続いた花飾り攻防戦だが、良い口実を思い出した初春が戦術的撤退を図る。

そして、黒子に追撃されないうちにそそくさと詰め所の奥にあるスペースに逃げ込んだ。

それを逃がしましたの、と黒子は呟きながら見送った。

「えーと、つまり白井がマフラーを持つてるといふことでFA？」

事態が飲み込めず、ぼかんと攻防戦を眺めていた山城が残った黒子に問いかける。

「……まあ、そうですね」

「そうか。それなら気に入ってるみたいだし、それは譲るよ」

「え？」

「気に入ったから使ってたんだろ？ 柄はあんただけど、そんなにそこらのマフラーより実用性高いからな」

実はあの迷彩柄のマフラーはフィンランド軍で正式採用され、兵士に支給されている高性能な軍用防寒マフラーなのだ。

遺失物私的流用はあまり良いことではないが、あのマフラーを保温性抜群なのに蒸れ難いという代物。巻き心地も申し分無い。一度でも使ったのなら、即座にその虜になっても致し方はない。山城は単純に黒子がマフラーを気に入って使っていた、と考えたのだ。

「いえ、でも……」

「それに俺は買い直したからさ。使われた方がマフラーも報われるんじゃないか」

……最終的に無駄に推しが強かった山城に黒子が負け、マフラーは黒子のものとなった。

何かが違う、と突っ込む人物が現場にいなかったことが非常に惜しまれる。

「……あ、もうこんな時間だな」



窓から射し込む光の色がわずかに変わったことに気が付いた山城が、腕時計を見る。

そろそろ帰って、夕飯の準備をしなければいけない時間になっていた。

その材料を買う都合もあることから、この辺りでお暇いとまする必要があるだろう。

「なあ、白井。そろそろ帰って夕飯の準備しないといけないんだが」

「え？ あら、もうそんな時間なんですか？」

携帯で時間を確認した黒子が流石に長く付きあわせ過ぎましたわね、と呟く。

「山城さん、帰っちゃうんですか？」

「夕飯作りたいたからさ。今日はこの辺にするよ」

その山城と黒子の話を聞いていたのか、奥からひよっこりと初春が顔を出した。

そして、帰ろうと立ち上がった山城にぱたぱたと歩み寄ってくる。

「今日は結局お礼できませんでしたし、いつかお礼がしたいんですが……」

「別にお礼が目的でしたわけじゃないし、気にしないでいいんだぞ？」

「いえ、初春の言う通りにお礼はさせていただきたいんですの」

二人の言葉を聞いて、そういうもんなのだろうか、と山城は思う。だが、折角お礼をしたいと言っている以上、ここは受け取っておくべきなのだろう。

「うーん……なら、これからしばらくは俺が試験とか考査する期間になっちゃうから、それが終わった時に改めてるのはどうだ？」

もう間もなく六月も終わり、七月に入る。

七月に入ってしまうと、山城が通う鷺峰学院うしほ高等部は中間考査の期間となるのだ。

その間は当然ながら、時間を作りにくい。

となれば、その期間が終わった頃が丁度良いだろう。

「それなら、山城さんの都合に合わせましょう。白井さん」

「それが良さそうですわね」

「何か悪いな」

「いえいえ、これは私達のお礼の気持ちですから」

そう言うと、初春は制服のスカートのポケットから携帯電話を取り出した。

「とりあえず、山城さんのアドレス教えていただけませんか？」

「あ、ついでにわたくしの分もお願いしますの」

初春に便乗するように黒子も携帯電話を取り出す。

「了解。ちよつと待ってくれ」

それに促されるように同じく携帯電話を取り出した山城は、赤外線通信の準備を開始する。

既に以前、御坂美琴みさか みことと来るべき再戦のため、という名目でアドレス交換を行っているため、山城の中では年下の女性とアドレス交換することに対する抵抗は無くなっていた。

カチカチと準備を終えた山城は、二人の携帯電話とアドレスを交換する。

「それじゃ、今日のところはこれで。お礼の方は楽しみにさせてもらおうよ」

「はい！ 私と白井さんに任せてください！」

「しっかりとお礼はさせていただきますの」

えへん！と胸を張る初春と畏まる黒子。

何となく微笑ましさを感ぜさせる図だ。

「これは期待しないとな」

山城はひらひらと二人に手を振ると、風紀委員第一七七支部を出て、帰宅の途についた。

\* \* \*

「ただいま戻りました、お姉様」

「あ、黒子。お帰り」

山城が帰った後、残っていた風紀委員の雑務を初春と二人で片付けた黒子は、常盤台中学学生寮に帰宅した。

部屋には既に相部屋である御坂美琴みさか みことが帰ってきており、何やら机で書き物をしている。

「お姉様、勉強ですの？」

「まあ、ちよっとね」

そう言いながら、ノートにシャープペンシルを走らせる美琴。

普段は愛しのお姉様に飛び付くところだが、真面目に勉強しているところを邪魔しては不味いと思い、黒子は鞆を机の上に置くと自分のベッドの下の整理を始めた。

収納スペースが限られる常盤台中学学生寮では、自然とベッドの下が私物収納空間となっている。

(これは必要。これは要らない。これはお姉様の……ぐふふふ)

もっとも入れられる品数は限られているため、数分もすれば片付いてしまう。

だが、最後に出てきた小箱を見つけて、黒子の手の動きが止まる。

「……………」

小箱を近くに引き寄せ、その蓋を開ける。  
出てきたのは、迷彩柄のマフラーであった。

(わたくしの趣味には合わないんですけども……)

そう考えながら、黒子はじいつ、とマフラーを見る。

柄自体は好みからかけ離れているが、確かに山城の言うように使い心地はとても良かった。

何だかんだで冬後半はこればかり使っていた気がする。

「……どうも調子を狂わせられっぱなしですよ」

黒子はマフラーを元の小箱の中に戻すと、頭をふるふると振った。やや振りすぎてクラクラしたが、もやもやが幾分か晴れた気がして安堵する。

(借りを借りっぱなしにしてるせいですわね。早くお返ししてすっきりすることにしますの)

そう考えた黒子は、携帯電話を取り出すと、メールを打ち始めた。宛先は山城扶桑。考查期間はいつ頃終わるのか、正確な日時を聞くためだ。

その最中、携帯の画面が大部分を占める視界の片隅で美琴が書き物を終えて、向かいのベッドに座るのが見えた。

送信し終えたら、抱きついてしまおう。

そんな邪なことを思考しつつ、黒子はメールを打つ指を速めた。

\* \* \*

「よし、終わった!」

傾向と対策。

美琴はどのように銘打たれたノートをぱたりと閉じた。

前回の勝負で判明した山城扶桑の能力を書き記し、それに対して思いつく対策を書き込んでいる。

後は反復し、実践してみるだけだ。

(次こそはアイツを電極刺した蛙の足みたいにヒクヒクさせてやるわ)

そう思うが早いか、美琴は自分のベッドに向かい、枕元で充電していた蛙をデフォルメしたような携帯電話を手取る。

その途中、向かいのベッドに座る黒子の姿が見えたが、彼女も何やら携帯電話を弄っていた。

邪魔されないうちに、と美琴は携帯電話を開き、メールを打ち始める。

宛先は山城扶桑。次に都合が良い日はいつかを聞き出すためだ。

同じ寮の同じ部屋の中で、向かい合うように携帯電話を弄る二人の少女。

彼女達がメールを打つ相手が同一人物だと言うことには、まだ誰も気がついていない。

## 第四話（後）（後書き）

感想・評価・意見は随時お待ちしております。

小話其の一 とある少年の自動二輪（オートバイ）（前書き）

お気に入り登録数が三百を超えた…だと…？

驚きの事実には、柄にもなく緊張してきたかもしれない。

それでは、小話其の一をお楽しみください。

2010/8/8 21:40 一部修正



## 小話其の一 とある少年の自動二輪（オートバイ）

試験や考査に追われる一週間が通り過ぎたとある休日。

山城扶桑やましろふそうは、日々を暮らしている鷲峰学院しゅうほう第五学生寮の地下駐輪場へとやって来た。

その姿は普段の制服や私服姿ではなく、とあるルートから入手した航空自衛隊の整備服姿であり、手には工具箱と何やら部品を携えている。

「今日でチューンは終わりだな」

ニヤニヤとつり上がってしまいそうな口角を抑えながら、山城は地下駐輪場の一角へと向かう。

そして、山城に割り当てられている駐輪ガレージのシャッターに鍵を差し込み、ガラガラと開けていく。

開けられたシャッターの中。そこには一台のバイクが収められていた。

ドウカティ・モンスター400。

イタリアの老舗オートバイ製造販売会社メーカー、ドウカティ社製の400cc級ネイキッドオートバイだ。

十六歳の山城が持つ普通自動二輪車免許で運転できるオートバイとしては、最大の排気量を持つ部類である。

大能力者レベル4に支給されている奨学金やアルバイト給金のうち、多くを生まれ育った孤児院に送金している山城だが、趣味にかける分はしっかりと確保している。

そして、その趣味の一つが愛車たるモンスター400であった。イタリア陸軍砂漠迷彩という極めてマニアックな塗装が施された

このオートバイは、山城の丁寧なチューンでその形を残したまま、  
良い意味で化けていた。

「……これを組み込んだら、ちょっと走ってみるか」

そう言いながら、山城は愛車への今朝方届いた部品の組み込みを  
開始した。

\* \* \*

ドドドドド。

腹の底に響くような力強いエンジン音が地下駐輪場に響き渡る。  
チューンが完了したドウカティ・モンスター400のエンジンに  
火が点つたのだ。  
それを聴く山城は、感極まれりという表情をしている。

「よしよし、待たせたな」

皮製のライダージャケットを羽織り、同じく皮製の手袋を身に着  
けた。

それからフルフェイスヘルメットを頭に被り、山城はモンスター  
400に跨る。

エンジンの鼓動が直に身体に響いてきて、その胸を満たしていく。  
山城がハンドルを両手で握り、軽くエンジンを吹かしてみた。

すると、待ちわびていたとばかりにヴォーン！とモンスター400

が唸る。

「良い出撃日和だ」

アクセルをゆっくりと握り込むと、それに応えたモンスター400がゆっくりとガレージから滑り出した。

都市高速をぐるりと一っ走りしてこようか、そんなことを考えながら、地下駐輪場から出る山城。

その山城と接近遭遇する人物がいた。

「あれ？　もしかして、扶桑か？」

「ん？」

道路に出ようと左右を確認していた山城はヘルメットのバイザーを上げながら、呼びかけられた方に顔を向ける。

そこには上条当麻<sup>かみじょうとくま</sup>が、何か凄い物を見てしまったかのような表情で立っていた。

「おお、当麻か。おいすー。こんなところで何してるんだ？」

「俺はこれから残念なことに補習を強いられるわけだが……で、何だそれ？」

「コイツか？　コイツは俺の愛車だ」

そう言いながら、山城はポンポンとモンスター400の車体を叩く。

それに対して、ほほう、と興味津々といった面持ちで上条はモンスター400を眺める。

「山城つてバイクの免許持ってたんだな」

「これでもバイク好きだからな。バイク通学が許可される距離が足らなくて、通学には使えないのが残念だが」

公共交通機関が高度に発展し、かつ安価で提供されている学園都市において、原付バイクやオートバイはほぼ学生の趣味として認識されている。

一部の風紀委員<sup>シヤッジメント</sup>は警邏車両として活用しているらしいが、それでも学園都市で自前でオートバイ保有は物好きな行為であった。現に上条にとっても、オートバイは珍しいものらしい。

「乗ってくか？」

その表情を見て、山城は上条に提案する。

「え？ いいのか？」

「当麻の高校まででいいんだろ？ 別に構わないぞ」

「うーん……」

山城の提案に悩む上条。

提案としては早く到着する分、魅力的であるが、一つだけ気掛かりなことがあったのだ。

「……俺の不幸で壊れたりしないよな？」

それは自らの不幸体質である。

山城自身が愛車と表現するオートバイを不幸の延長線で壊してしまえば、かなりの罪悪感に苛まれるだろう。

上条としては、それだけが気になってしまったのだ。

「ああ、そういうことなら気にすんな。最悪、情報上書きして復元するから」

だが、山城は事も無げに上条の不安を取り払った。

山城扶桑と上条当麻とは既に三ヶ月近い付き合いの上で、山城は上条当麻という人間をほぼ把握している。

彼は自分から首を突っ込むことが多いが、その不幸体質を忌避され続けた経験からこの手のことには遠慮しがちだ。

そのため、こういう時は多少強引にでも誘う方が良いのである。

「そういうわけで乗ってけ乗ってけ。この俺が運転する無料タクシーだけだぜ？」

「本当にいいのか？」

「何を遠慮してんだ。友達だから」

「……なら、上条さんはお言葉に甘えさせていただきます」

その山城の言葉で上条は友人の好意に甘えることにした。

普段は無条件の善意を提供する上条だが、この時は提供される側となった。

上条が納得したのを見て、山城は上条の頭に合うフルフェイスヘルメットを上書き保存で出現させて手渡す。

それを上条が被ったのを確認　この時、密かにあの髪型がどう変形するか楽しみにしていたことを記す　すると、一旦止めていたモンスター400のエンジンを再び起動させた。

そして、上条に後ろに乗るよう促し、自分は少しだけ前に詰める。上条はそれに従って、後ろに乗り、しっかりと掴まった。

「振り落とされるなよ」

ブロロロ、と二人の乗るモンスター400は車道に出る。そのままゆっくりと加速し、上条の通う高校の方へ進路をとった。

(一癖二癖あるけど、基本的に良い奴だよな。コイツは)

加速するモンスター400の風を感じながら、上条は友人に感謝した。

……しかし、悲しきかな。しつかりとオチもある。

本日の上条の不幸は、この山城好みにチューンされたドウカティ・モンスター400と運転手たる山城そのものであった。

\* \* \*

「よー、カミヤん。今日は随分と早いんだにやー」

教室の扉を開けた土御門元春つちみかど もとはるは、珍しく早く登校していた友人、上条当麻の姿を机の上に見つけた。

いつもは不幸だなんだと遅刻がちな上条なのだが、今日は一番乗りをしていたのだ。

「カミヤーン？　どうかしたのかにゃー？」

しかし、何故か突っ伏したまま、ぴくりとも動かない上条を疑問に思った土御門はその側に歩み寄る。

そして、側に寄った土御門は…

「……カ、カミヤんが死んでる！」

「……死んでない。でも不幸だ……」

… 虚ろな目をした超グロッキー状態の上条を目撃することになった。

久しぶりの運転でテンションが高かった山城の運転により、極めて過激な通学を提供された上条の精神は筆舌にし難い状態に陥っていたのである。

合掌。

小話其の一 とある少年の自動二輪（オートバイ）（後書き）

感想・評価・意見は随時お待ちしております。



第五話（前） とある科学の超電磁砲（レールガン）（前書き）

総合評価が千百を超えた…だと…？

一体何が起こったと言うんでしょうか。

事態がよく飲み込めぬまま、第五話（前）をお送りいたします。

2010/8/8 21:45 一部修正

## 第五話（前） とある科学の超電磁砲（レールガン）

学生達待望の夏休みまでの秒読みが開始され始める七月十六日。  
御坂美琴は、陸橋の手摺に凭れて、椰子の実サイダーの蓋を開けていた。

「……また負けた」

ぶつくさと言いながら、椰子の実サイダーをグビグビと呷る。  
自棄酒ならぬ自棄サイダーだ。

常磐台中学が誇る無敵の電撃姫と名高い彼女が、朝からこんな場所  
所で自棄サイダーを興じているのには理由がある。

それは昨晩、とある河川敷で行われた通算三回目の戦闘が原因であつた。

一回、二回と交戦し、苦杯を飲んだいつもの相手。  
それを踏まえて、対策と戦術を練りに練った美琴は、今回こそは  
という意気込みで望んだ。

しかし、戦略爆撃機が適当に爆弾を投下していったのでは無いか、  
と思える程度に河川敷に大量のクレーターを製造した昨晩の戦闘は、  
またも美琴の電池切れで終焉を迎えていた。

技のレパトリーには研ぎがかかっていたが、スタミナばかりは  
短期間でどうにかなるものでは無かつたのだ。

「それにしても、アイツの能力は万能過ぎるのよね……電池切れも  
無いみたいだし……」

《上書保存》。

情報操作系の一種であるらしいが、その汎用性の凄まじさを三回の死闘を演じた美琴は身に染みて感じていた。そして、ただでさえ強力なその能力を余すことなく使いこなし、相手は美琴の攻撃を防いでいる。

それは今は鉄壁に近い。

何とか攻める糸口は無いのだろうか。

……もつとも、朝からそれを考えていて、どうにも良いビジョンが浮かばず、今ここで自棄サイダーを興じていたのだが。

「よお、お嬢ちゃん。こんな朝から一人で何してんの？」

そんな美琴の思考は、不寐ぶしつげな者達によって中断させられた。数人の柄の悪い男達。

それが手摺に凭れる美琴の周りを囲んでいたのだ。

「もしかして暇？ 俺達と遊ばない？」

彼らはこんな朝早くから何をしているのだろうか。

むしろ朝から暇を持て余しているのはそっちではないのか、との考えが美琴の頭を過る。

「ホント、退屈しないわね。この街は」

まあ、そんなことはどうでも良い。

大人数に目をつけられた以上は穩便すべに逃れる術は無いだろう。ならば、ちよろつとぶちかましてお帰り願おう。

そう考えながら、美琴が後ろを振り向こうとした時 ……

「おいす、御坂。朝からナンパされてんのか」

…ここ最近、美琴の退屈を軒並み爆破解体している人物が通りかかった。

「って、何でアンタがここにいるのよ！」

「いや、普通に通学中だけど。ここは通学路だし」

その人物は通学鞆を左手に、食べかけのチョコチップドーナツを右手に持った山城扶桑であった。

襟元に鷲峰学院高等部を示す鷲を模した刺繍が入った灰色の半袖ワイシャツに黒いネクタイ、黒の夏用スラックスという夏期制服をそつなく着こなしている。

これで買い食いさえしていなければ、そこそこの優等生に見えるだろう。

「御坂も学校だろ？ 遅れないようにしろよ」

「分かってるわよ。それにしても、登校中に何を買い食いしてるのよ」

「食後のデザートを楽しむ余裕が無かったから、せめて登校中にとだな」

「……おい」

山城と美琴の掛け合いでスルーされていた不良達の一人が山城の方を向く。

「兄ちゃん、俺達が先約なんだ。知り合いだか何だか知らないが、

あんまりナメてるようだ……」

そう凄んできた男に続くように不良達の輪から数人が抜け出し、山城の周りを軽く囲む。

どうやら威嚇しているようだが、山城は何処吹く風といった面持ちだ。

「はいはい。すぐに居なくなりますからご安心を」

「いいからさっさと失せろ！」

山城の飄々とした態度に痺れを切らしたらしい男が怒鳴りながら山城の右手を払う。

その勢いで山城の手から食べかけのチョコチップドーナツが宙を舞い、重力にその身を任せて地面に落下する。

そして、ぐしゃ、という音と共に無惨に地面に叩きつけられ、虚しくチョコチップを辺りに散らした。

「……」

次の瞬間、山城扶桑は阿修羅と化した。

\* \* \*

「日本では古来より相手に誠意をみせる時は土下座と相場が決まってるんだが、その辺をアンタらはどう考えてんの？」

「……貴方様のチョコチップドーナツを無下に扱って、誠に申し訳ございませんでした」「……」

綺麗で美しい、完璧な土下座。

それを不良達は山城に対して行っていた。

誰も彼も顔面やら身体やらが匠やましの手によって、悲劇的ビフォーアフターを成し遂げている。

中には感動のあまりなのか、咽び泣いている者もいた。

「違う。俺に謝るんじゃない」

不良達に食べ物の大切さを肉体言語で教授し終えた山城は、地面で無惨な屍を晒しているチョコチップドーナツを指で示す。

この山城の意図が伝わったのか、不良達が軍隊顔負けの規則正しい動きで地面に落ちたドーナツを中心に円陣を組む。

それから、再び美しい土下座を行なった。ドーナツに向かって。

「……すまないな、チョコチップドーナツ。俺が不甲斐ないばかりに……せめて安らかに……」

そして、犠牲となったドーナツに対し、山城は哀しみに満ちた視線と甲いの言葉を送る。

その様子には、何処か哀愁すら漂っていた。

「……ねえ、アンタ」

そんな山城に対し、すっかり蚊帳の外に置かれていた美琴が声をかけた。

「ん？ どうした、御坂？」

「アンタ、格闘技も出来たの？」

山城の立ち回りを間近で見ていた美琴だが、能力を使わずに肉体言語オンリーだった山城の動きに何か思うところがあったらしい。何と言うか、路地裏の喧嘩の動きというよりは、何かしっかりとした型に基づいた動きに見えたのだ。

「ん？ ああ、自衛隊格闘術とクラブ・マガは一通り。後はシステムを若干」

結論から言うと、山城扶桑は良く訓練されたミリタリーマニアであった。

「……」

山城の返答を聞いた美琴は思わず溜め息を吐いた。この人物を知れば反撃の糸口が見つかる就先ほどまで考えていたが、むしろ逆に戦術の幅が狭まってしまった気がする。

「何だよ、その溜め息は」

「本当に何者なのよ、アンタは」

「何者って……よく居る高校生だが」

よく居られて堪るか、と美琴は内心鋭い突っ込みを入れた。

「……うわっ、もうこんな時間じゃねーか。今日は身体検査だからシステムスキャン

急がねーとな。それじゃ、俺はもう行くぞ。またな、御坂」

腕時計を見ていた山城が焦ったような表情になり、慌てて何処かへと駆け出す。

「えっ？ あ！」

それに驚いた美琴は、山城を呼び止めようとした。今、山城に立ち去られてしまうのは不味いのだ。主に状況が。

美琴の背後には、未だにチョコチップドーナツに土下座を続ける不良達がいる。

その集団的奇行は徐々に増し始めた人通りから、満遍なく衆目を集めていた。

そんな中、山城に立ち去られてしまったのは、その衆目に強く晒されるのは美琴一人になってしまうのだ。

「ちよ、ちよっと待ちなさいよ！ コラ！」

しかし、美琴の呼び止めも虚しく、逃げ足に定評がある山城はさっさと走り去ってしまった。

こうなってしまった以上、さらに事態がややこしくなる前に自分も立ち去ってしまうべきだろう。

美琴は咄嗟にそう考え、山城に続くように陸橋から立ち去ろうとする。

「ジャケットメント風紀委員ですの！ 通報を受けて参りました！」

だが、そんな美琴の願いは叶わず、事態は目出度くややこしくなった。



\* \* \*

キンコンカンコンという電子音楽をバツクミュージックに、幾人もの生徒達が近代的な造りの校舎から歩み出てきた。

皆、灰色の半袖ワイシャツにネクタイ、スラックス姿か、白いブラウスに赤いネクタイ、紺系チエックのプリーツスカートという驚峰学院高等部の制服を着ている。

その二種類の制服のどちらかを着た千人以上の学生が通う驚峰学院高等部の帰宅の図は中々壯観だ。

「ふいー、終わった終わった」

そして、その学生達の中に山城の姿もあつた。

普段は全種類の検査をやらされ、丸一日近くかかるはずの山城の身体検査だが、本日は午前中だけで終了した。

と言うのも、今回は検査の数が最低限に減らされたのだ。

担任教師曰く山城の超能力者シフトには、かなり時間がかかることが未来予測の結果で判明したらしい。

そのため、それまでは負担を減らすために最低限で済ますことにしたとのことだ。

( ようやく使ってくれたみたいだな、《ツリーダイアグラム樹形図の設計者》を )

それを聞いて、山城が真っ先に思ったことは“そのこと”であった。

ツリーダイアグラム  
《樹形図の設計者》。

学園都市が保有する人工衛星《おりひめ?号》に載せられた世界最高の超高度並列演算器。  
アフソリユートシミュレーター

今後、四半世紀は追い抜かれないうまで言わしめる人知の最先端を行くスパコンだ。

このスパコンは気象“予言”の他、学園都市では学術研究目的での予測演算などに広く利用されている。

そして今回、鷲峰学院教師陣が山城の超能力者シフトの未来予測をこれに委託したらしい。  
レベル5  
シミュレーション

その結果、導き出された答えが先の“山城の超能力者シフトには時間が必要”というものであった。

《樹形図の設計者》がそう導き出した。

それならば、疑う余地は無いし、仕方がない。

鷲峰学院教師陣は肩を落としていつも自らを納得させたようだ。

「そうなるように“上書き保存”しておいたんだけどな」

だが、そもそも未来予測というものは数多の情報を元に組み上げるものである。  
シミュレーション

その情報が全て仕組まれたものだとしたら、どうであろうか？

《樹形図の設計者》は最先端を行くとは言えども、所詮は人知の範囲内の存在だ。

片や必要に応じて《世界管理装置》という神知と同調した上で能力行使を行なう山城。  
ワールドマネージャー  
データリンク

人知の存在の未来予測を意図的に改竄、誘導することは山城にとって容易いことなのである。

また、それが可能だと言うことは、山城が“原石”として、初めてこの学園都市にやって来た時にも証明済みであった。

《オーバーライト上書保存》という規格外の原石として、学園都市にやって来た山城扶桑。

それはダイヤモンドにおける“カリナン原石”に匹敵する存在と言えた。

もちろん、そんなものがやって来れば、調べ尽くしたくなるのが研究者達の性サガだろう。

検査と言う名の研究所周遊。

あの手この手、ありとあらゆる角度で調べ尽くすための処置が学園都市にやって来た山城を待っていた。

そして、そうなるであろうことを原作知識からある程度予想していた山城は、全てが始まる前にあることを行なう。

“山城扶桑の能力はこの上無く繊細。故に踏み入った検査やさらなる開発には耐えられない”。

山城はそのような情報を上書き保存し、自らを偽った。

これにより何処の研究所でも、調べ進めると途中でこの情報に行き着くようになる。

そして、貴重な山城サンプルに万が一があつては困ると何処の研究所も考えた。

大抵がその考えを元にその場でさらなる調査を諦め、別の角度から調べるために山城は次の研究所へと回される。

この一連の流れが繰り返され、やがては山城が学園都市内に数多存在する“普通の能力者”より遥かに扱い難い代物と判断されるようになった。

ここでようやく山城は研究所周遊から解放され、“変わった能力

者”として鷺峰学院中等部に転がり込むことができたのである。

つまり、山城は今なお、現在進行形で学園都市を騙し続けている。全てはギリギリまで学園都市上層部に睨まれないために。

そして、今回も未来予測改竄もその一貫であった。

山城が超能力者<sup>レベル5</sup>と学園都市に判断されてしまえば、なんだかんだと監視が増えて、行動の幅が狭められる可能性がある。

それを嫌うが故に、山城は大能力者<sup>レベル4</sup>の立ち位置に自分を留めていたのだ。

「午後はどうすっかな」

だが、今はそんなことは山城にとって大きな問題では無い。

午後の予定 目下の問題をどうするべきかの方が山城にとって、重要なのである。

山城はひたすらどうするかを考えながら、生徒達の波間に消えていった。

\* \* \*

「暇だ」

キリッ、というSE……もとい幻聴が山城を中心に聞こえた気がする。

照り付ける陽射しも眩しく暑い夏の正午過ぎ。

山城は完全に学生から暇人にクラスチェンジしていた。

予期せぬ午前中での身体検査終了。システムスキャン

ぼっかりと空いた山城の午後の予定は、未だに埋まっていなかった。

「立ち読みでもしていか……」

生憎、山城のお抱え（？）の退屈殺しこと上条当麻ヒマジンブレイカー かみじゅーたつまとは、今日は予定が噛み合わない。

白紙である脳内予定帳の午後の欄には、自前で適当な予定を書き込まなければならぬだろう。

今日は七月十六日。

愛読しているミリタリー雑誌の一つの発売日でもある。昼食は既に食べ終えていたし、それを購入していけば……

「あ

……と、そこまで考えた山城は、あることを思い出す。

本日、七月十六日の重要な“イベント”を。

（そういえば、とある科学の超電磁砲レールガンって今日からスタートじゃね？）

ナチュラルに。

極めてナチュラルに、山城は忘れていた。

（よく考えれば、朝のアレも……）

冷静に思い起こせば、あの朝の邂逅も本編の重要なワンシーン。あそこでよく気が付かなかったものだ。ある意味、それは山城扶桑が“この世界の人間”として馴染みすぎた結果とも言える。

……今からでも混ざれるだろうか？

一瞬そのように考えたが、山城は直ぐに考えを改める。世の中、そうそう都合よく出来てはいない。

「……素直に立ち読みしていい」

実際に間近で見れないのは残念であるが、この場合は致し方がない。

気持ちを素早く切り替えた山城は、近場の本屋の方向に足を向ける。

そして、曲がり角を曲がろうとして ……

「きゃっ!?!」

「うわっ!」

… 山城は歩道を走ってきた少女の一人とぶつかった。

「いたたた……」

「だから急ぎ過ぎだつて言ったじゃん。……すみません、あたしの友達がぶつかっちゃって」

ぶつかった少女の友人らしい長い黒髪のセーラー服の少女が山城に頭を下げる。

「ああ、俺は構わないけど。そっちの娘は大丈夫か？」

山城は無事であったが、彼と衝突した頭でガーデニングを催さんばかりの髪飾りをつけた少女は、反動で尻餅を突いてしまったようだ。

山城はその少女を助け起こすべく、手を差し出す。

「す、すみません……前をよく見ていなかったの……」

花壇顔負けの髪飾りの少女が、飴玉を転がしたような甘い声で謝罪を述べ、山城の手を取って立ち上がるうとする。

そして、頭を上げた少女と見下ろす山城の視線が交わった。

「……お？」

世の中、そうそう都合よく出来てはいない。

だが、同時に結構いい加減に出来ていたりする。

そのいい加減具合は、偶然という便利な一言で片付けられることが多い。

「……あれ？ 山城さん？」

そして、その便利なシステムが働いたとしか思えないような状況を経て、山城扶桑は二人の少女、初春ついはる飾利かざりと佐天さてん涙子なみこと遭遇した。

「え、なに？ 初春の知り合い？」

山城と初春の反応から何かを察したのか、佐天が初春に問いかける。

どうやらその関係に興味津々らしく、ちらちらと山城にも視線を向ける。

「えーと、ほら、あの郵便局強盗の時に出てきた山城さんですよ。佐天さん」

「ああ、あの話か。……ということは、この人が初春ご執心の英雄ヒーローさんだね？」

「はーん、と悪戯っぽい笑みを浮かべる佐天。

「何か言葉のニュアンスに含みがある気がします！」

「気のせい気のせい」

そんなやり取りを初春と交わした後、佐天は山城に向き直る。

「……それじゃ、改めてこんにちは。初春の親友やつてる佐天涙子です。話は常々聞いていますよ、山城扶桑さん」

「こちらこそ初めまして。もう分かってたみたいだけど、俺の名前は山城扶桑。よろしく、佐天さん」

年上と言うこともあるのか、丁寧な挨拶をした佐天に対し、山城も丁寧に言葉を返す。

山城から見れば、佐天は年下であったが、初対面の人を流石に呼び捨てにすることはしない。

「それにしても、山城さんが何でこんなところに？」



「んー……ちよつと身体検査が予想以上に早く終わったからさ。ちよつと散歩を」

システムスキャン

初春の問いに、山城はそう答えた。

行為はどちらかと言うと、散歩というより暇をもて余した挙げ句の徘徊であつたが、そこに突っ込んではいけない。

それを聞いた初春は何か思案げな面持ちになり、直ぐにぱあっと閃いたような笑みを浮かべる。

「ということは、山城さん。今はお暇なんですね？ 私達、今から白井さんの仲介である御坂美琴さんに会いに行くんですが、一緒にどうですか？」

「えっ」

なにそれこわい。

……ではなく、どうも話が上手く進みすぎている。やはりこわい。一度諦め、気持ちを切り替え終えていた山城は初春の申し出に思わず困惑していた。

「いや、流石に飛び入りでそれは……」

「大丈夫ですよ！」

そして、その困惑状態から立ち直ることもままならず、山城は初春に半ば引き摺られるように連れて行かれる。

妙なところでアグレッシヴな初春であるが、それは山城相手でも変わらないようだ。

「え、ちよ、何これ」

ずるずるずる、と引つ張られた状態のまま、山城が状況に対する疑問の声をあげる。

だが、それに答える人物はいない。

「あらら……初春は積極的だなあ」

そんな二人の背後を佐天は付いていったのであった。

第五話(前) とある科学の超電磁砲(レールガン)(後書き)

感想・評価・意見は随時お待ちしております。

## 第五話（中）（前書き）

地味に初めてのの中編になります。

どうしても長々となってしまうのは、私の構成力不足が主因のようです。

今後も精進せねば…。

それでは、第五話（中）をどうぞ。

2010/8/8 21:50 一部修正

## 第五話（中）

第七学区のとあるファミリーストランの一席は異様な雰囲気  
に包まれていた。

かの有名な常磐台中学に身を包んだ茶色い短髪の少女が、右手で  
小柄なツインテールの少女の顔面を押さえつけ、左手の接収したそ  
の少女のメモ帳をジト目で読み進めている。

確かに傍目では、一体どんな状況か把握しかねるだろう。

「……つまり、大人しく分別ある友人を利用して、自分の変態願望  
を叶えよう」と

メモ帳を読み進めていた御坂美琴が、底冷えするような口調で言  
う。

そして、そのジト目は台詞と共にメモ帳を離れ、小柄なツインテ  
ールの少女、白井黒子しろい くろこへと向けられた。

「いえ……あの……」

「読んでるだけで……」

ダラダラと滝のように嫌な汗を流す黒子。

断罪の時はすぐそこに迫っていた。

「……すんげえストレス溜まるんだけど！」

そう言うのが早いか、美琴は両手で黒子の頬肉を捉え、そのまま両  
側に何度もぐいぐい引っ張った。

この口か、この口がまだ何か言うのか、と言わんばかりの勢いで。

頬肉を引つ張られている黒子はと言うと、健気にもその状態のままで何やら言葉を　大方、何らかの言い訳だろうが　発していたが、何を言っているかはさっぱり分からない。

やがて、ひとしきり黒子に対する制裁を終えた美琴は、最後に思い切り両側に頬肉を引つ張り、それから手を離れた。

ようやく開放された黒子は涙目のまま、頬を労わるように抑える。それを見ながら、美琴は小さく溜め息を吐いて、席に座り直し…

「まあ、でも……黒子の友達じゃあしょうがないか」

…と呟いた。

慕い方そのものには大いに問題あるものの、何度も美琴の助けになつてくれている後輩なのだ。

“朝の陸橋の一件”も美琴がしっかりと説明をすると、上手く周りを取り繕ってくれた。

それに対する細やかな恩返しと考えると、よいだらう。

「お……」

「ん？」

しかし、そんな美琴の思いをどう勘違いしたのか。

「おおおおおおお姉様あつ！」

次の瞬間、美琴の膝の上に目をハートにした空間移動能力者テレポーターが出現した。

思わず呆気に取られた美琴に、黒子そのまま鼻息荒く抱きつく。

「お姉様がそんなにも黒子のことを想っていてくださっただなんて、黒子は……黒子は……もうどうにかなくなってしまいそう！」

「ちよ、黒……」

ここでようやく回復した美琴は黒子を引き剥がそうとするが、その前にある光景が目に入ってしまった、再度フリーズ状態へと戻る。

「……あ」

目に入ったとある光景。

それはファミリーストランの外から三人の人物がこちらの方を見ている光景であった。

一人は口元に手を当てて、顔を赤くしている花飾りを頭につけた中学生らしき少女。

もう一人は硬直している同じく中学生らしき黒く長い髪を持つ少女。

そして、最後の一人は苦笑いをした見知った顔の冴えない高校生の少年。

「あの……お客様？」

「……え？」

外に視線が釘付けのまま、硬直していた美琴の意識が現実へと引き戻される。

「申し訳ありませんが、他のお客様のご迷惑となりますので……」

「嗚呼、お姉様！この胸がはち切れんばかりですわ！むふーっ！む

ふーっ！」

その直後、ファミリーストラン内に電撃姫の拳が変態淑女の頭に着弾する快音が響いた。

\* \* \*

数分後、五人はファミリーストラン前の通りに集まっていた。流れている空気が少々微妙なのは、先程の百合の花が咲いているように見えた一幕の影響だろうか。

「……というわけで、とりあえずご紹介致しますわ」

その空気の中、鉄拳が炸裂した頭を擦りながら黒子が喋り始めた。

「こちら、柵川中学一年、初春飾利ういはる かざりさんですの」

「は、初めまして。初春飾利……です……」

黒子に示された初春は、辿々しく自己紹介をする。

どうやら憧れの美琴を前にして緊張気味らしく、その自己紹介も後半は消え入るように小さくなっていった。

「それから……」

初春が一応、自己紹介を終えたと判断した黒子は、次に初春の隣



に立つ佐天涙子さてんなみこに視線を移す。

「どうも」。初春のクラスメイトの佐天涙子です。何だか知らないけど付いて来ちゃいましたー」

視線から読み取ったのか、佐天が自己紹介を始める。

「……ちなみに能力値は無能力者レベル0です」

しかし、出てきた内容はやや斜に構えたものであった。

「え、わわ、さ、佐天さん何を！」

そんな佐天に傍らの初春がわたわたと慌てる。

その初春の慌て様にも構わず、佐天は何処吹く風といった面持ちだ。

「初春さんに佐天さん」

だが、美琴は佐天のやや斜に構えた自己紹介を特に気にせず、二人の苗字を確認するように呟き……

「私は御坂美琴。よろしく」

……二人に向かって、親しげな笑みを浮かべた。

これには佐天のみならず、初春も呆気に取られる。

その後、よろしくお願ひします、と二人は小さな声で辛うじて言葉を返した。

「では、恙無く紹介も終わったところで……」

そう言いながら、間に割って入った黒子の視線。

そして、初春と佐天に向けられていた美琴の視線が、所在なさに立っていた“五人目”へと向けられる。

「……で、何で貴方（アンタ）がここに居るんですの？（のよ？）

」

「……」

「え？」

言葉が被ったことに驚き、美琴と黒子が互いの顔を見合わせた。どちらも何故、相手がこの人物を知っているのだ、という表情である。

「何でと言われても……成り行き？」

それに対し、五人目こと山城扶桑は苦笑がちに言った。

「山城さん、成り行きとは一体どう言う……いやいや、それよりも何故お姉様と面識が？ 一体何処で！」

「アンタ、黒子と知り合いなの？ ……って、そんなことよりも朝はよくも逃げたわね！ お陰でこっちは大変だったんだから！」

「待て待て！ そんな十字砲火クロスファイアみたいに言葉をぶつけるな！」

堰を切ったように山城に対して、十字砲火口撃を浴びせる二人。

そんな二人を制するように山城が両手を前に突き出し、ストップ、とジェスチャーを行なう。

「今日の主賓は俺じゃないだろうって！ 質問には後で答えるし、よく分からないが文句も後で聞く！」

山城の言葉で美琴と黒子の二人がハッと我に返り、初春と佐天の方に視線を戻す。

そこには、ぽかんと事態を見ている初春と佐天の姿があった。今日の主賓は彼女達。それを忘れてはいけないうらう。

「ご、ごめんね。ちょっと訳有りだから熱くなっちゃった」

「確かに今日は初春をお姉様に会わせるためにセッティングしたんですの……ごめんなさい、初春。それに佐天さん」

「あ、いえ、大丈夫ですよ！ ちょっと驚いただけですから」

「そ、そうそう。大丈夫です！」

美琴と黒子が銘々に謝罪の意を示し、それに初春と佐天の二人が恐縮することで、何とかその場は治まった。

結局、山城にぶつける質問や文句は後回しにすることになり、五人はメモ帳に記された不埒な予定を実行に移そうとした黒子を二度目の鉄拳制裁で沈めた美琴の提案で、ゲームセンターに向かうことにした。

(……咄嗟にああ言ったが、後で質問攻めフラグだな。不幸だ……)

約一名。行く末を想像し、友人の常套句を心中で発していたが。

\* \* \*

「もう、お姉様だったら……ゲームとか立ち読みではなく、もっとこ  
うお花とかお琴とか、ご自身に相応しいご趣味をお持ちになれませ  
んの？」

「うっさいわね。大体、お茶やお琴の何処が私らしいって言うのよ  
？」

美琴と黒子の先導の元、五人は近場のゲームセンターへと向かっ  
ていた。

「何かさ。全然お嬢様じゃない？」

「上から目線でも無いですねぇ」

掛け合いを演じながら、先頭に行く二人の背中を見て、佐天が小  
さく呟く。

その傍らで、配られていたチラシを受け取った初春が相槌を打つ。  
そして、常磐台ペアからの質問攻めという名の機銃掃射を避け、  
柵川ペアの横に身を寄せていた山城は二人の会話を聞きながら、何  
とも言えない表情となる。

（まあ、御坂はお嬢様より戦乙女とか姫將軍の代名詞が似合いそう  
だな）

一週間に一回程度の割合で行われる夜の河川敷での戦闘を思い浮かべ、思わず小さく溜め息を吐く。

「……と言っか、山城さん。御坂さんと知り合いだったんですか？」

「あ、それはアタシも気になります」

そんなことを考えていたところで、初春と佐天が山城に問いかけてきた。

確かに先程の流れを見たら、当然抱く疑問だろう。

「んー……単なる喧嘩相手知り合というか好敵手顔見知りというか、そんな感じかな」

怪しげなルビはおくびにも出さず、山城は言う。

しかし、それを聞いた初春はどう勘違いをしたのか、羨望の眼差しを山城に向けた。

「あの御坂さんと知り合いだなんて羨ましいです……」

「……多分。……いや、絶対に初春が考えているような素晴らしい関係じゃないと思うぞ?」

「えっ? 舞踏会で出会ったとかじゃないんですか?」

「……」

山城は思わず頭を抱え、いろいろと猛烈に突っ込みたい気分になった。

毎回毎回、人目から滞空回線まで誤魔化して構築する河川敷の舞台。<sup>アンダーライン</sup>

そこを砂鉄剣や落雷、超電磁砲<sup>レールガン</sup>が舞う。

……どう見ても“武闘会”です。本当にありがとうございました。もしあれが舞踏会と言うなら、昨今の社交界は随分過激だと認識し直さざるを得ない。

「いやー、初春。今時、舞踏会<sup>ソレ</sup>は流石に……」

「むう。もしかしたら、もしかするかもしれないじゃないですか」

頭を抱えた山城が復帰する前に、初春の発言を聞いて苦笑いしていた佐天が彼を代行するように突っ込みを入れた。

そして、友人から放たれた突っ込みに、初春は拗ねるように唸る。

「まあ、確かに百パーセントとは言えないけど……」

「……あ、おい、佐天さん！ 前！ 前！」

「へ？ ……あいたっ」

その時、山城が佐天に向かって声を上げた。

しかし、それは間に合わず、初春の方を見て、余所見をしながら歩く形になっていた佐天の身体が何かにぶつかる。

何だろうと佐天が前を見ると、そこには一枚のチラシを片手に立ち止まっていた美琴の姿があった。

どうやら彼女にぶつかってしまったらしい。

「……！ す、すみま……ん？」

「御坂さん？」

しかし、気付いた様子もなく、チラシに視線を奪われたままの美琴に初春と佐天の二人は怪訝そうな顔となる。

山城だけはその理由が分かっているのか、顔に苦笑を浮かべた。

「どうなさいましたの、お姉様？」

立ち止まっている美琴の横に黒子が歩み寄り、そのチラシを覗き込む。

そして、美琴を過剰に慕う黒子には即座に理由が分かっただらしくははーん、とばかりに悪戯な表情を浮かべた。

「あらー…クレープ屋さんにご興味が？」

つつ、とチラシから美琴に視線を移す黒子。

「それとも、もれなく貰えるプレゼントの方ですか？」

「つつ」

黒子の言葉に、美琴はびくりと反応。

その直後、脊髄反射の如く反論を開始した。

「な、何言ってるのよ！ わ、私は別にゲコ太なんか！ だって、蛙よ？ 両生類よ？ 何処の世界に…」

「御坂」

山城は傍目見れば、必死乙の一言に尽きる美琴に向かい、静かに

言葉をかける。

「好きなら好きで良いと思うぞ。別に隠す必要は無いだろ」

「な……！ いや、だから、私は別にゲコ太のことなんか！」

往生際が悪いのか、美琴はまだ反論を試みる。

しかし、それに対し、山城は無言でびしっ、と自分の顔の前で人差し指を立てた。

そして、その人差し指の角度を変え、美琴の方を　より詳しく言えば、美琴の持つ鞆の方を　指差す。

「？」

美琴と他の三人が山城が指差す方向に視線を移す。

すると、初春と佐天は苦笑いを。

黒子は忍び笑いを。

そして、美琴は瞬間湯沸し器のように顔を紅潮させた。

……山城が指差した先には、緑色の蛙をデフォルメしたキーホルダーが自己主張するようにぶら下がっていたのだから。

\* \* \*

山城扶桑は悩んでいた。

結局、あの手後は五人でそのクレープ屋に向かうこととなり、移動



販売車が来ている公園へと来ていた。

辺りには思った以上に人が多く、黒子と初春はベンチを確保すると列から離れており、現在は山城、佐天、美琴の順で列に並んでいる。

そんな中、山城扶桑は悩んでいた。

彼が悩んでいるのは他でも無く…

(……何を食べよう)

…  
食べ物のことであつた。

(ベースは何にするか……生クリームやチョコ……いや、暑いからアイスも良いよな……)

先程、美琴や初春のように路上でもらつたチラシのメニュー欄を凝視する山城。

ベースを決めて、トッピングを自分で選ぶスタイルのクレープらしく、どうするべきかかなり悩んでいた。

彼の背後では佐天と美琴がアニメでお馴染みのやり取りをしているが、それすら気にしない勢いである。

「……暑さには勝てないな。バニラアイスベースにしよう」

最終的にそんな結論を下したところで、山城の順番となった。

店員にバニラアイスベースにチョコソースやバナナの切り身をトッピングした物を頼む。

「お待たせしました。それから、これが最後の一個になります」

山城が頼んだものを手際良く飾り付けた店員は、山城に完成したクレープを手渡す。

それと一緒に髭が生えた礼装着用 of 緑色の蛙をデフォルメしたキーホルダーも山城の手に渡る。

「ありがとうございます」

……。

……。

……最後の一個？

キーホルダーを受け取った山城の思考がそこまで及んだ瞬間、背後で強烈な負のオーラと共に誰かが膝を折った音が聞こえた。

まさか、と慌てて振り返った山城の視界に入ったのは、突然の事態に狼狽する佐天と……

「うう……」

……全身で意気消沈具合を表す学園都市第三位の超能力者レベル5の姿であつた。

(……そうか。俺一人分多いから、俺で打ち止めなのか)

山城は原因を即座に弾き出す。

原作と違い、佐天の前に山城がいたため、彼の順番でキーホルダーが打ち止めとなってしまったのだ。

……まあ、どちらにせよ美琴が轟沈した理由は原作と変わらないはずである。

「あー……佐天さん。気にせずにクレープの方を」

「え？ 御坂さん、大丈夫なんですか？」

「コイツは俺が復旧させとくからさ」

美琴の方を見ながら、山城は未だに狼狽している佐天にそう促す。促された佐天は美琴の様子を気にしながらも、順番が来ていたため、店へと戻って注文を始めた。

それを横目見た山城は、矢尽き刀折れたような様相の美琴に側に近寄る。

「おい、御坂」

「うう……？」

沈んでいた美琴だが、山城の呼び掛けに反応し、涙を蓄えた猫目で山城を見上げる。

「ほれ、これやるよ」

そんなことを言いながら、山城は美琴に対し、先程もらったばかりのキーホルダーを見せた。

次の瞬間、キュピーン、と美琴の目が猫もかくやと思えるほど、爛々と輝く。

そして、素早い動きで山城の手ごとがっちり両手でキーホルダーを押さえ込んだ。

「良いの？ 本当に良いの？」

「……あ、ああ。何か朝に迷惑かけたみたいだし、迷惑料ってことで」

予想以上の反応に気圧されつつも山城は首を縦に振り、美琴の手の拘束を解いてから、改めてその手にキーホルダーを手渡した。

「ありがとうー！」

受け取ったキーホルダーを感涙とばかりに両手で胸元に抱き締める美琴。

もう完全なトリップ状態である。

「よしよし、良かったな。じゃあ、さっさとクレープ買ってこい。お店の人が困ってるぞ」

そんな美琴を山城は引き摺るように店の前に戻す。

店の前に戻された美琴が我に返って注文し始めたのを確認し、山城は店の脇で待っていた佐天と合流する。

山城による電撃姫復旧作業の一部始終を見ていたらしい佐天は、驚嘆の視線を山城に向けていた。

「本当に言葉通りに御坂さんを元に戻すなんて、山城さん凄いですね」

「まあ、理由が分かりやすかったからな」

「それはそうかもしれませんが……あんなに上手には難しいと思いますよ」

「そうか？ ……つと、御坂のお帰りだな。ちゃんと買ったか？」

原作では佐天がすっかりと美琴を復旧させているという知識があ

るため、佐天の言い様にも特に感慨を覚えない山城。

そこにクレープを買い終えたららしい美琴が戻ってきた。

鼻歌混じりであるため、調子は完全に戻ったらしい。

「ちゃんと買ったわよ。……黒子に頼まれたトッピングは理解できないけど」

「どれどれ？ ……ああ、大丈夫だ、御坂。流石の俺にも理解できない」

「どうかしたんですか？ ……あー、これはアタシも正直……」

美琴が手に持つ二つのクレープのうち、黒子所望の納豆生クリームクレープを見た三人は満場一致で意見を可決させた。

「そんじゃ、とりあえずベンチ行くか」

その後、黒子と初春が確保していたベンチに三人は向かい、五人で銘々のクレープを食べ始めた。

山城も自らが注文したクレープに齧りつく。

夏の暑さにバニラアイスの冷たさが心地よく、パリパリと固まったチヨコソースも絶妙。

どうやら選択は正解だったようだ。

常磐台ペアのじゃれ合いや柵川ペアの会話を肴にしつつ、幸せそうに食べ進めていく山城。

食べ物の中でも特に甘い物に目が無い山城は、完全にクレープを食べることに夢中になっていた。

またしても、この後に起こることをすっかりと忘れたまま。

「…………？」

「ん？」

「いえ、あそこの銀行なんですけど………昼間っから防犯シャッター下ろしてるんでしょうか？」

だが、山城が思い出さなくとも世界は進む。

ベンチに座っていた初春があることに気がついた。

彼女たちの後ろの通り。道路を挟んで反対側にある銀行のシャッターが下りているということに。

「…………あ」

それを聞いて、クレープに夢中になっていた山城が何かを思い出したのと同時に、銀行のシャッターが激しく爆ぜ飛んだ。

第五話（中）（後書き）

感想・評価・意見は随時お待ちしております。

## 第五話（後）（前書き）

サブタイトルの改編作業を実施しました。  
以後、あのような表示となります。

それでは、第五話（後）をお楽しみください。

2010/8/8 22:00 一部修正



## 第五話（後）

爆発で砕け散った銀行のシャッターが路面を叩き、銀行内から流れ出た黒煙が辺りを包む。

その突然の事態に、広場は悲鳴と怒号に満たされた。

「な、何なの？」

爆発音でベンチに身を縮こませていた佐天<sup>さてん</sup>涙子<sup>なみこ</sup>が疑問の声をあげる。

「初春！」

その疑問に答えるようにあの納豆生クリームクレープを一口で平らげるといふ芸当<sup>うまいたけ</sup>を見せた白井<sup>しらい</sup>黒子<sup>くろこ</sup>が、佐天の座るベンチを踏み台にして道路に躍り出ていく。

<sup>ジャッジメント</sup>風紀委員である彼女が動く理由は一つだろう。

「警備員<sup>アンチスキル</sup>への連絡と怪我人の有無の確認！ 急いでくださいな！」

「は、はい！」

黒子は風紀委員を示す盾の意匠をあしらった腕章を付けながら、<sup>ういはる</sup>初春<sup>はつはる</sup>飾利<sup>かざり</sup>に迅速に指示を飛ばす。

そして、同じく腕章を付けていた初春は、黒子の指示通りに携帯電話で警備員への通報を始めた。

「黒子！」

「いけませんわ、お姉様」

そんな彼女達の動きを見て、御坂美琴も動きかける。しかし、直後に黒子の制止を受けた。

「学園都市の治安維持はわたくし達、風紀委員のお仕事。今度こそ、お行儀良くしててくださいいな」

美琴に対し、笑みを浮かべながら言う黒子。

そして、そのまま視線を横へとずらし

…

「山城さんもすわよ？」

… 柵を乗り越えている最中であつた山城扶桑にも釘を刺した。

「あー、分かつてる。“そつち”じゃない」

だが、山城は制止にも構わず、柵を乗り越える。

彼の目的は、黒子の懸念とは別のものであつたからだ。

「あんな濃い煙だ。さつさと排煙しないと中の人危ない。……善意ある市民の人命救助はノーカンだろ？」

「……そう来ますの。まあ、確かに山城さんなら余程が無ければ大丈夫ですわね。救助の方はお任せしますわ」

確かに銀行内に人が残っている可能性は高い。

となれば、山城の言い分にも一理ある。

そのため、黒子は救助の部分を強調して念を押し、山城の行動を認めることにした。

「ありがとよ！ そっちも気をつけてな！」

「言われなくとも、ですの！」

そう言葉を交わした直後、立ち上る煙の中を抜けて三人組の強盗らしき男達が外に駆け出てくる。

それを確認した山城と黒子は、それぞれの目的に向かって空間を飛んだ。

「移動完了……ゲツホゲツホゴホ！」

そして、強盗達が駆け出た方向と反対側に飛んだ山城だが、直前に風向きが変わっていたため、丁度煙の真っ只中に現れてしまっていた。

流石に対策無しで飛んだのは拙かったか、と涙目のまま、空気の流れの情報を上書き保存し、銀行内から外、そして空へと強制的な排煙を開始する。

それと同時に、炎上している入り口付近のソファや壁の掲示物など、煙の発生源となっている物品周辺の温度情報と湿度情報を上書き保存し、消火作業も行なう。

やがて銀行内に満ちていた煙が薄れ始め、小規模な火災も鎮火したことを確認した山城は、怪我人がいないかを確認し始めた。

だが、幸いにも銀行員や巻き込まれた利用客の中に大きな怪我大きくても精々掠り傷程度であった。をした人間はいないようだ。

「警備員到着まで動かないでください！」

そう注意を促した後、山城は踵を返し、破壊された入り口から銀

行の外へと出た。

この時点で排煙は既に完了しており、周囲の視界は改善している。そのため、丁度右手では黒子が銀行強盗のうち、バイロキネシスト発火能力者の男を車道に磔にしている姿が確認できた。

「白井！ 銀行の排煙と消火終わったぞ！ 大きな怪我人は無し！」

「分かりましたわ！ ご協力感謝しますの！」

白井に向かって銀行内の情報を手短かに報告した山城は、車道に磔になっている発火能力者の男と死亡フラグを立てた故に地面に転がされている大男を順番に見る。

そして、あることに気がつき、ハツとした顔付きとなった。

一人足りないのだ。原作で佐天を蹴飛ばしていたあの男が。

「何だよテメエ！ 離せよ！」

「駄目！」

その直後、車道の向こう側から怒号と悲鳴が聞こえた。

そちらに顔を向けた山城の目に飛び込んできたのは、男の子と佐天。そして、今まさに佐天を蹴り付けようとしている銀行強盗の男の姿。

「しまっ ……」

咄嗟に山城は座標情報を上書き保存し、自身を佐天と銀行強盗の男の間に佐天と男の子を庇うように出現させた。

「ぐあっ！」

もちろん咄嗟のことであつたため、それ以外のことには気を回せなかつた。

二人を庇う形となつた山城の無防備な顔に、男の蹴りがもろに突き刺さる。

衝撃で口の中が切れ、血の味が山城の口に広がつた。

「山城さん!」

すぐ傍で佐天の悲鳴が。

少し遠くで美琴の怒りの籠つた大声が聞こえた。

しかし、蹴られた山城はというと、ある思いが胸に満ちていた。

男の蹴り。それは想像以上に痛いものであつた。

今回は自身が庇つたが、原作ではこれが佐天に向けられたのだ。実際に食らつたからこそ、湧き上がる感情。

これが果たして、許せるだろうか？

「……佐天さん、怪我は？」

「え……あ、あたしは大丈夫ですけど、山城さんは？」

……答えは否である。

「俺は大丈夫。……とにかく、怪我が無くて良かった」

山城は不安そうな表情の佐天にそう言うと、ゆらり、とその場で立ち上がった。

立ち上がった山城の前で、男の乗り込んだらしい乗用車が走り出す。

だが、原作通りなら直ぐにでもコーナーしてくるはずだ。

それを確認すると、山城は後ろに視線を送る。

そこでは、怒り心頭と言った表情の美琴が車道の真ん中でバチバチと放電していた。

ああ、一応蹴られたのが俺でもちゃんと原作通りに怒るんだな、と何処か冷静な部分で山城は感じる。

「……！ アンタ！ 怪我は無いの！？」

「無いと言ったら嘘になるが、これくらいはどつにでもなる。それより、すまんがちょっと俺も混ぜてくれ」

立ち上がった山城に驚いているらしい美琴の声に答えながら、山城はズカズカと車道の真ん中まで歩み出た。

丁度、美琴とコーナーを終えた乗用車の間に割り込む形である。やがて、その乗用車がこちら目掛けて突撃するように猛然と加速し出した。

それを見ながら、山城が口に溜まった血をペツと吐き出す。

「……てめーの敗因はたった一つだ、モブ」

スツ、と山城が右足を上げる。

それは奇しくも、少し先の未来で学園都市第一位の超能力者<sup>レベル5</sup>が、とある科学者の乗用車に制裁を加えた時と同じ光景。

もちろん、工程こそ違えど、山城の場合は情報を上書き保存して衝撃を殺すため、傍目見れば起きた現象もほぼ同じに見えただろう。

「たった一つの単純な答えだ」

ドガンッ！という激しい衝突音と共に突撃してきた乗用車が山城の右足で阻まれる。

ボンネットは拉げ、運転していた男は作動したエアバックの上で啞然としていた。

それに構わず、少し身を屈め、乗用車の歪んだバンパーを両手でがっしりと掴む山城。

「てめーは俺を怒らせた」

そう言うのが早いか、山城は一切の遠慮無しに運転手の男ごと乗用車を天高く放り投げた。

いつの間にか重量情報や空気抵抗情報などを極限まで投げやすいように上書き保存された乗用車はロケットも驚愕の上昇力を見せつけ、あっという間に青い空で小さな粒となる。

それを見送る傍ら、山城は近くに辺りの石やらコンクリート片やらを上書き保存で手元に集積させていく。

「オラオラオラオラオラオラオラ！」

そして、粗方集まったところで、山城は機関砲の如き勢いでそれらをひたすら高速で空に放り投げ始めた。

先程投げられた乗用車と同様の処理を経て、投げやすく情報を上書き保存され、同時に命中精度さえ変更された石や瓦礫は、空で粒と化していた乗用車へ正確無比に飛んでいく。

ここに人間地对空機関砲、山城扶桑が爆誕したのだ。

山城の手により、強力無比な対空砲弾と化した石や瓦礫に襲われた乗用車は、空中で無惨で斬新なイメチェンを遂げていく。

だが、これだけでツアーは終わらない。

乗用車の上昇が終わって自由落下が始まり、地上まで五メートル程度になったその時。

「御坂！」

名前を呼んだだけであったが、意味は的確に通じたらしい。

「言われなくとも！」

その直後、山城の声に応えるようにSF兵器マニアが泣いて喜びそうな超電磁加速方式対空砲が、万を辞して火を噴いた。

キャヒュン！と音を置き去りにする一撃は、山城の攻撃で既にポロポロとなっていた乗用車には過剰攻撃の権化的存在だったに違いない。

現に空を駆け抜けた一枚のコインは、止めとばかりに乗用車の後部座席から後ろを根こそぎ吹き飛ばしていった。

そして、二つの対空砲火に晒されて空中分解し、辺りにバラバラと降り注ぐ乗用車らしき残骸。

そのうち、山城は運転席部分だけを落下直前に速度を殺し、着地させる。

綺麗に残されていたその運転席部分では、運転していた男は筆舌にし難い表情のまま失神していた。

ただ少なくとも……いや、ほぼ間違いなく精神的に何らかの傷を負ったであろう。

「あまり俺を怒らせない方がいい」

最後に一つ、小さく山城はそう言った。



\* \* \*

「何なんだよ……あいつらは……」

地面に磔にされた発火能力者の男は、その異次元の戦いを呆然と眺めるしかなかった。

その男を横目見ながら、黒子はそれに答えるように喋り始める。

「……片方は学園都市二三万人の頂点、七人の超能力者の第三位。《超電磁砲》御坂美琴お姉様。常盤台中学が誇る最強無敵の電撃姫です」

「そして、もう片方が……」

先日、風紀委員の仕事の合間に書庫で見た山城の経歴、そして、彼が通う鷲峰学院高等部での通称を思い出す黒子。そこには、このように記されていた。

「……超能力者に最も近き大能力者。《上書保存》山城扶桑さん」

視線の先で凜と立つ二人を見ながら、黒子は笑みを浮かべた。

\* \* \*

「わぁ……………」

初春は山城と美琴の合わせ技にすっかりと目を奪われていた。

途中、山城が突然、美琴を制しながら乗用車の前に出てきた時には驚いたが、蓋を開けてみればこれである。

これに似合う形容詞を、初春は一つしか知らなかった。

「凄い……………」

そう小さく嘆息するように、初春は呟いた。

\* \* \*

「……………」

目の前の光景に目を奪われていたのは、初春だけではなかった。

その視界の先には、並び立つ二人。

そして、片方は先程、無我夢中で行動した自分を身を挺して守ってくれてすらいいた。

「凄い……………」

様々な思いが混ざり合っていた佐天は、辛うじてそんな言葉を紡ぎ出した。

\* \* \*

時刻は夕暮れ。

事件の現場となった銀行前では、警備員による調査が行なわれており、辺りには複数の警邏車両や護送車両が止まっている。

そして、黒子や初春は風紀委員として、それら警備員の補助に回っていた。

「ぬはー……」

「なーにを愉快的な溜め息吐いてんのよ？」

その光景を見ながら、単なる一般市民の山城は歩道の柵に美琴と共に腰掛けていた。

顔の傷は上書き保存して既に治療済みであり、傍目見れば特に異変は見当たらない。

しかし、吐き出された深い溜め息の原因は、彼の心情的なものであった。

「どうも熱くなりすぎたからな……。ああ、穴があったら入りたい……」

ぼそぼそと独りごちる山城。

軽く厨二な発言をしてしまうほど、あの時の山城は熱くなっていた。

そのため、頭が冷えてきた今は気恥ずかしさで自己嫌悪に陥っているのである。

「山城さん」

「ん？」

そんな山城に一人の少女、佐天涙子が話しかけてきた。

原作通りに親子からお礼を述べられていた彼女だが、どうやらそれが終わっただけらしい。

「ああ、佐天さんか。どうだった？」

「お礼言われちゃいました。……あはは、実際に守ったのは山城さんなんですけどね」

「んー、そんなこと無いと思うぞ」

山城に話しかけてきた佐天は、自嘲気味な笑みを浮かべる。しかし、山城は即座にそれを打ち消した。

「え？」

山城のその言葉に佐天はきょとんとした表情になる。

「あの男の子を最初に守ろうとしたのは佐天さんだ。俺はただそれを助けただけだよ」

そう言いながら、頭を軽く掻く山城。

実際、あの時に男の子が銀行強盗の男に連れ去られかけたのを防

いだのは佐天である。

山城がしたのは、咄嗟に蹴りの盾になったことくらいだ。

「お手柄だったわね、佐天さん。あの時の佐天さん、凄く格好良かったよ」

美琴も山城に相槌を打つように、優しい笑みを佐天に向けた。その二人からの思わぬ言葉に、佐天は顔を赤らめる。

「お姉さまーん！」

「佐天さん！ 山城さん！ 大丈夫でしたか！？」

そこへ仕事が終わったらしい黒子と初春が駆け寄ってきた。

「ん、あたしはへーきだよ。初春」

「俺は無駄に頑丈だから問題無しだ」

「良かったあ……」

二人の反応に、初春は不安げな表情を安堵のそれに変える。

しかし、逆に安心し過ぎたのか、今度はその目に涙が浮かぶ。

それを見て焦った山城が佐天と共に初春を宥めつつ、原作と違って美琴が柵に座っていたため、正面から抱き付こうとした黒子が美琴に全力で迎撃されながら、山城が居る世界でのとある科学の超電磁砲初日は終わりを迎えた。

第五話（後）（後書き）

感想・評価・意見は随時お待ちしております。

小話其の二 とある少年の時系考察（コンシダレーション）（前書き）

この辺りから原作介入に平行し、徐々に山城が考えている手札を表にして行こうと思います。

また独自時系列の採用のため、ここからはやや話がシャッフルされるかもしれません。

それでは、とある小話其の二をお楽しみください。

2010/8/8 22:10 一部修正

## 小話其の二 とある少年の時系考察（コンシダレーション）

「ただいまー、っと」

七月十六日、午後七時過ぎ。

アンチスキル

警備員による事情聴取などを終えて、山城扶桑は自宅である鷲峰

やましる ふうそう

しゅうほう

学院第五学生寮へと帰ってきた。

左手には帰り道にコンビニエンスストアで購入したチーズ鱈やスモークタン、裂き烏賊の入ったビニール袋を持っている。

如何にもな組み合わせであったが、酒のお飲みではなく、あくまでオヤツである。

山城が入ったその部屋は、学生寮にしてはかなり立派な1LDKであったが、あの有名な鷲峰学院の学生寮であるということ考虑すれば納得せざるを得ない。

その玄関で靴を脱ぎ、着替えもそこそこにリビングに向かう山城。そして、部屋の一角に置かれていた高速起動、高速処理が謳い文句の学園都市製高性能タワー型パソコンの電源を入れる。

謳い文句に寸分違わず、あっという間にパソコンが起動したことを山城は確認すると、部屋全体に探知妨害 ジャミング 人間の“六感”や探知機器類、超能力や魔術による探知すら妨害する山城の情報上書き行為全般を指す を施し、その前の椅子へと腰掛けた。

パソコンの画面が乗った机の端に置いたビニール袋から裂き烏賊を取り出して口に運びつつ、空いているもう片方の掌を何も無い空間に翳す。

すると、その虚空から突然小さな銀色のUSBメモリが現れた。

「うーむ……」



山城はその現れたUSBメモリを掴むと、考え込むようにしながら、目の前のパソコンに挿し込む。

挿し込まれたパソコンは外部デバイスが接続されたことを認識し、即座に画面にその中身を表示した。

表示されたUSBメモリの中身は、幾つかのテキストドキュメント。

そのそれぞれに《ラインジャック滞空回線掌握計画》や《レブリカ模造霊装製造計画》、《スコトロノ実働部隊構成計画》など、その言葉の意味を少しでも知る者が見たら、度肝を抜かれるような名称が付けられていた。

「この世界はアニメ版に沿ってる世界なのか？」

山城はブツブツと呟きながらマウスカーソルを動かし、並ぶテキストドキュメントのうち、単にスケジュールと書かれたものを開く。

「朝の御坂との遭遇はシチュエーションから言えばそうだし、その後佐天さんも出てきたから、多分そうだと思うが……」

開かれたテキストドキュメントを眺めながら、山城は唸る。

そこには山城が思いつく限りの原作の出来事が時系列順に書き込まれていた。

「アニメ版はほぼ明確な時間描写がなかったよな。最悪、其処を突いて出来事がシャッフルされて出てくる可能性もあるか」

山城が現在進行形で悩み考えていること。

それはこの世界の時系列についてであった。

遙か遠い記憶。

転生する際に神様と交わした話を山城は思い出す。

この世界は主世界オリジナルに数多連なる平行世界の一つであるらしい。

この場合、主世界とは恐らく原作のことだろう。

であるなら、それを踏まえて推測すると平行世界であるこの世界は原作に似つつも何処かが微妙に違うわけである。

そして今回、その推測を裏付けるように科学サイドはアニメ版を軸にしたもので展開していた。

「……ちょっと予定が狂いそうだな。アニメ版超電磁砲レールガンと原作禁書インデックスの目録がどう混ざるかさっぱり分からん」

まだ“アレ”の解析が終わってないんだが……、という言葉を新たに食べ始めたチーズ鱈ごと飲み込む。

「……とりあえず、進めるしかないか」

最終的に考えている暇すら勿体無い、という結論に山城は至った。

元より自身が考える良い方向へ世界を改変しつつ、この世界で第セ

二の人生を送ることが山城の目的である。

自身の原作知識ネタ情報もその流れの中で効力が薄らいで行くだろう。

ならば、完全に効力が無くなる前に二の手、三の手を打ち、四の手、五の手を準備して伏せておかねばならない。

学園都市この街はそれ程に読めない存在であるのだから。

「面倒だけど、しゃーないか。“アレ”の続きをやるとしよう」

そう呟くが早いか、山城はパソコンの電撃を切り、取り外したUSBメモリをまた何処か虚空に消す。

そして、椅子から立ち上がって、寝室としている部屋に足向けた。

\* \* \*

部屋の扉を開けると、そこは戦争博物館でした。

そんなナレーションが某有名テレビドラマ調で流れた気がしたが、恐らく気のせいである。

しかし、山城扶桑の寝室はその幻聴通りのような体<sup>てい</sup>を成し、その手の人物で無ければ恐らく悪い意味で気圧されていただろう。

壁という壁にこれでもか、と飾られた本物の拳銃や自動小銃、狙撃銃……から弾丸発射機構を取り除き、法律上はモデルガン扱いとなった品々。

部屋の一角の棚にずらりと並ぶ古今東西の戦車や戦闘機、艦艇の模型達。

その中でも特に目を引くのは、山城至高の逸品である三五分の一サイズの大日本帝国海軍敷島型戦艦。

……本当に一体全体、何処の戦争博物館だと言うのだろうか。

だが、もちろん寝室であるため、ベッドもあるし、勉強机も置いてある。

断じて戦争博物館では無いはずだ。恐らく。多分。きっと。

「……んじゃ、やるか」

そんな地の文のフォローなど知る由も無い山城は、迷わず勉強机に付随した椅子に腰掛けた。

勉強機の周りに関しては、かなり綺麗に片付いている。

この一角だけ見れば、優等生の落ち着いた勉強机に見えるかもしれない。

そして、山城はその勉強機の引き出しを開け、そこから小さな瓶を取り出した。

一見するとただの小瓶であるが、それが山城の手による徹底的な探知妨害を施した凄い代物であり、その中に学園都市最大級の秘密が複数個入っていることを知るのは山城自身だけだろう。

その小瓶の中に入っている学園都市最大級の秘密。

それは《アンダーライン滞空回線》と呼ばれている。

学園都市の黒幕こと学園都市総統括理事、アレイスター・クロウリー直通情報網を構成する学園都市中に五千万機程度撒かれた僅か七十ナノメートルのシリコン製ナノマシン。

学園都市の大半の人間は存在すら知らず、仮に知っても捕獲困難百歩譲って捕獲に成功しても、即座にとある都市の暗部組織アンダーグラウンドが捕獲者を黄泉の国に送り出すために、仲良く(?) 徒党を組んで押し掛けて来てくれる凄い代物である。

……もつとも、それは常人相手の場合の話。

メタ情報原作知識で存在を把握し、人間の六感に加え、あらゆる探知機器類はもちろんのこと、超能力や魔術による探知すら妨害する探知妨害を使える山城の手にかかれば、バレずにそれを捕獲することは容易いことであった。

現に捕獲された憐れな幾つかのナノマシンは山城の手により、日夜解析されている最中である。

「確か情報を変質させずに読み取るとは出来たんだよね……後はバレずに一つから回線全体にハッキングを仕掛けることが出来れば

……」

《滞空回線》の自己防衛システムとして、不用意に外部から保有する情報に対する接触が行われると自らの情報を破壊、変質させる点が挙げられる。

さしもの山城でもこの自己防衛システムを切り崩しつつ、万が一に備えて、学園都市側に《滞空回線》へのハッキング行為をバレないように探知妨害を行なうことは骨が折れた。

その石橋を渡る最中さえも石橋を叩きまくるような行為ゆえ、ここまで作業が遅々としているのである。

だが同時に、遅々ではあるが確実にその作業は進んでいた。

《滞空回線掌握計画》の具体的目処が立つほどに。

「山城さんはやれば出来る子です」

スモークタンをかじりながら、山城は今宵も《滞空回線》に挑みかかっていった。

その日の深夜。

……いや、正確には日付が変わってからもしばらく解析作業に没頭していた山城は、瓶詰めにされた《滞空回線》の一つに干渉し、そこから同じく瓶詰めにされた他の《滞空回線》に干渉することに成功する。

つまり、それは第二段階の成功を意味していた。

その結果に一通り狂喜乱舞した山城は、溜まっていた疲れの一斉攻勢に負けてしまい、その場で意識を手放すこととなった。

小話其の二 とある少年の時系考察（コンシダレーション）（後書き）

感想・評価・意見は随時お待ちしております。

また読者の皆様にアンケートなのですが、人物紹介や用語集は必要でしょうか？

場合によっては、掲載も考えているため、お答えいただければ幸いです。

第六話（前） とある偽装の風紀委員（ジャッジメント）（前書き）

お待たせしました。

前話でお聞きした用語集や人物紹介については、時期早々という  
考えに至ったため、掲載は見送ろうと思います。

それでは、第六話をどうぞお楽しみください。

2010/8/8 22:10 一部修正

第六話（前） とある偽装の風紀委員（ジャッジメント）

七月十七日。

休日であるその日、山城やましろ扶桑ふさつは戦争博物館……もとい寢室の“勉強机”の上で目を覚ました。

「……あー」

山城は間抜けな声を発しながら、何故こんなところで寝ているかを思い出そうと試みる。

そして、少し悩んだ後に昨晚の狂喜乱舞を思い出す。

……あの時は深夜テンションなどの様々な要因が混ざり合い、我を失ってしまったのだ。そういうことにしておこう。

山城はそう考えて、その事実をそつと胸に仕舞い直した。

とにかく目が覚めた以上は動き出さなければならぬため、山城は身体をぐいっと伸ばす。

すると寝ていた体勢の関係で、山城の身体のうちらこちらがバキバキと悲鳴を發した。

また、首からは寝違えていたことが原因らしい鈍痛が自己主張を開始する。

「あだだだ……“寝違えていない”つと……」

だが、そこは山城。情報を上書き保存して即座に解決する。

こういう時には便利な能力だ。

それから痛みの取れた首を回し、背後のベッドの枕元にあるデジタル式目覚まし時計に視線を移す。

時刻は八時半。どうやらきっかり六時間の睡眠を取ったようだ。



「……シャワー浴びるか」

山城はそう言う座っていた椅子から立ち上がり、上がらぬテンションと戦いながら、のそのそと浴室へと向かった。

ちなみに野郎のシャワーシーンは極めて誰得であるため、ここでは割愛する。

そして、シャワーを浴び終え、いい加減目が覚めた山城は身支度を整え、部屋を出た。

その服装は私服……詳しく述べれば、迷彩柄の半袖Tシャツに黒のタクティカルベスト、カーゴパンツである。

選択と組み合わせについては、もはや何も言うまい。

そんな山城が部屋を出た時点の時刻は九時過ぎ。朝食を摂るにはいい時間だろう。

普段はマメに自炊している山城だが、たまには朝から外食してみようと考えたのだ。

ちなみにこの世界では孤児院で生まれ育ち、学園都市しの街に来てからは一人暮らしであった山城は、実はかなりの家事スキル保持者である。

孤児院では掃除、洗濯はもちろんのこと、年長になれば食事当番まで任されるため、基本的なことをきっちり叩き込まれていたのだ。

しかし、世界でも超希少に分類される“原石”であり、生まれながらにして能力を持ち得ている山城。

能力を使ってしまうえば、それらのことなど本当は容易く出来る。

だが、山城はそうせず、あくまで“真の意味での自力”でそれらを行っていた。

理由としては、なまじ転生者であるため、日常生活では無意識のうち自ら動いてしまうことも関係していたが、何より能力に頼りきることを避けたい気持ちが一番にある。

日頃から能力に完全に頼りきった結果、何かあった際に駄目人間に成り下がる…では洒落にならないからだ。

その考えは他方面にも向けられており、弾き出した一つの解答が彼が身に付けている幾つかの軍隊式格闘技。

そして、銃器や刀剣などの武器を用いた戦闘訓練である。

中でも軍隊式格闘技は昨日さくじつの対不良戦。

刀剣を用いた訓練の成果は、対美琴戦での光量子刀の太刀筋となつて現れていた。

また、訓練に使う武器は一体何処から、と聞くのは野暮だろう。

あの寝室に溢れている弾丸発射機構を取り除いた実銃ベースのモデルガンや刃が潰された模造刀に情報を上書き保存すれば、それまでなのだから。

……話が逸れた。

ともかくにも、山城は珍しく朝から外食するべく《Julia n》という近場のファミリーストランへとやって来たのである。

「えーと……大王िकासミパスター。それから、野菜と乳製品の栄養素をこれでもかと凝縮した程度のシーザーサラダを一つ」

案内された席に座った山城は、外の広告に出ていたメニューから選んでいたものを即座に店員に頼む。

その後、山城は注文を聞いた店員が奥に消えるのを見送ってから、携帯電話を取り出し、登録されているゲームアプリを弄り始めた。

学園都市製の携帯電話に付属していたパズルゲームのアプリは意

外に面白く、ごくごく僅かに暇な時間がある場合、彼はこれで時間を潰している。

もしこの時に山城が何気無くにでも店内を見渡していれば、“それ”により早く気が付けたかもしれない。しかし、そうしなかったため、気が付くのはもう少し後のこととなる。

\* \* \*

「」馳走様」

空になった二つの皿を前に、山城は律儀に手を合わせる。なかなかどうして、久しぶりの朝の朝食は乙なものであった。その満足感を背景にコップの水を飲み干すと、山城は伝票を掴み取ってレジへと向かう。

「行きますわよ、初春ついはる！」

「待ってください、白井しらいさん！」

その時であった。

聞き慣れた少女達の声が山城の耳に届いたのは。

「あれ？ 白井に初春じゃないか」

「え？ 山城さん？」

ファミリーストランの奥の方から現れた二人の風紀委員ジャッジメントの少女、白井黒子しろい くろこと初春飾利ういはる かざりはレジに向かっていた山城に気が付くと、驚きの表情を浮かべた。

「昨日振りだな」

「そうですね。ところで山城さんが何故ここに？」

「たまには朝外食しようと思ったんだ。……で、そっちはそんなに急いでどうした？」

黒子の問いに山城が手にした伝票を見せながら答える。  
それから、何やら慌てているらしい二人に問い返した。

「実は風紀委員の急用が……って、急がないといけませんの！ 山城さん、すみませんが一旦これで！」

「白井さん、引つ張らなくても大丈夫です！ ……すみません、山城さん。また今度」

「ああ、そうか。なら、呼び止めて悪かったな。頑張つて来いよ」

山城の言葉で目的を思い出したらしい二人は、山城への謝辞もそこそこにレジで会計を済ませるとカランカランと入口から外に出て行った。

そんな旋風しむじかぜのような二人の背中を見送りながら、山城は相変わらず大変そうだな、と感想を抱く。

……その時、ふと背後に何かを感じた気がした。

山城は後ろを振り返り、先程退店した彼女達が現れた方向を目で辿る。

すると、その先の座席には二人の少女が居た。

「……」

額に井桁を貼り付け、不機嫌オーラ全開の視線でこっちに来いと  
言っている常磐台の電撃姫、御坂美琴。

「はは……」

苦笑いしながら、こちらに視線で救難信号SOSを送る長い黒髪にセーラー服の少女、佐天涙子。

「おおっ……」

そして、見てしまったがために立ち去る機会を完全に失ってしまったのが山城扶桑。

前門の虎だけで後門に狼はいないのだが、何故か逃げ切れる気が全くしない。

その思考の結果、山城は逃亡を諦め、その異様な空間に突撃せざるを得なくなつた。

\* \* \*

数分後。

山城扶桑は最前線に居た。

愚痴と怒気という名の弾丸が一方的に降り注ぐ最前線に。

「アンタは私のママかーッ!!!」

立ち上がりながら咆哮し、砲兵の如く愚痴と怒気の弾幕を張っているのは、山城を視線で呼び付けた美琴である。

「で、アンタはどう思うの!」

「……まあ、何だ。とりあえず座れ」

対して、向かいの席に陣取った山城はどろどろと宥め、何とか怒れる電撃姫を鎮める。

美琴の怒りの原因。それは原作にあったあの風紀委員の件くだりであった。

風紀委員である黒子曰く、妄みだりに事件に首を突っ込むな、だとか。事件に巻き込まれても一人で解決しようとせずに風紀委員の到着を待て、だとか。

スカートの下に短パンを穿くな、下着はパステル調の子供っぽいものから卒業しろ、だとか。

前半二つはともかく、最後の下着云々は本来、男性である自身に話すべきことでは無いだろう、と山城は思う。

少なくとも乙女の尊厳を自ら爆破していることと同義なのだ。

しかし、完全メタ情報に怒りが先行している美琴がそれに気が付く様子は無く、原作知識メタ情報で知っている山城も思いを抱くだけで、下手な誘爆を招きかねない特別な反応や突っ込みはしない。

五月に美琴と出会ってから、早二ヶ月。  
山城はすっかり乙種危険“電撃”物取扱資格保持者になっていた。  
もちろん履歴書には書けないのだが。

「そ、そうですね、御坂さん。とにかく落ち着きましょう」

そんなことよりも山城は一つ気になっていることがあった。  
それは山城の隣に座る佐天涙子の存在である。

ここに突撃した直後に彼女に簡単な状況説明を頼んだところ曰く、  
佐天は朝方に予約していた有名アイドルである――のアルバムを  
買いに行こうとしたらしい。

それから間もなく、道で偶然に初春と遭遇。  
さらにその後、これまた偶然にも美琴と黒子に遭遇し、ファミリ  
ーレストランで少々談笑することにしたようだ。

だが、いざファミリーレストランに入って少し経ったところで、  
黒子と初春に風紀委員関係の急な呼び出しがかかった。

それに対し、手伝おうかと美琴が切り出したところ、黒子が蛇足を  
含めた忠告を開始。

結果として、美琴と黒子の間には軽い口論が勃発したらしい。

その内容については、山城が知っているそれとほぼ合致している。  
しかし、問題はこの場面はファミリーレストランで展開されたも  
のではないという点。

そして、漫画版、アニメ版共にこの場面に佐天はいなかったはず  
という点だ。

昨晩に山城が行なった考察の通り、平行世界であるためか、やは  
り微妙に原作と違っていているようである。

「まあ、確かに……ん？」

…ピピピッピピピッ。

山城がとりあえず美琴を完全に鎮めてしまおうと口を開いた矢先、そんな電子音が何処からか聴こえてきた。

その音に山城と美琴は首を傾げるが、佐天だけは慌てた様子でポケットから携帯電話を取り出す。

佐天が取り出した携帯電話に触れると、鳴っていた電子音はぴたりと止んだ。

どうやら電子音の正体は、佐天の携帯電話のアラームだったらしい。

「えーと、すみません。御坂さん、山城さん。そろそろお店が開いちやうので……」

携帯電話のアラーム　佐天がCDショップの開店時間近くになったら鳴るように設定していたもの　を止めた佐天がおずおずと言った。

「お店？ ……あ、そうか。CD買いに行く途中だったんだよね？」

それを聞き、山城は先程、佐天がしてくれた説明の中にあつた彼女がそもそも外出をした理由に思い至る。

「ああ、そっか。ごめんね、佐天さん。何か付き合わせちゃって」

美琴も山城とほぼ同時に思い至ったようで、たぎ滾らせていた怒りを一旦鎮めて佐天に詫びた。

根は面倒見の良い美琴である。



やはり愚痴に付き合わせてしまったことへの罪悪感はあるようだ。

「いえいえ、大丈夫ですよ。今からでも十分に間に合いますから」

佐天は既に退いていた山城に会釈をしながら、通路へと出る。

それから、早く白井さんと仲直りしてくださいね、と美琴に言う  
と、自分の分の伝票を掴んでレジへと駆けていった。

…そして、やましう 図らずしも少年と少女だけみこがファミリーストラン  
に残される。

(……あれ？ 何この状況？)

残念ながら、山城の疑問に答える人物はいない。

「むう……」

とりあえず座席に座り直した山城の目の前には、先刻よりは落ち  
着いたとはいえ、依然として何とも言えない表情でドリンクを啜る  
美琴。

乙種危険“電撃”物取扱資格保持者の山城だが、いつまでも危険  
物の傍に居たいという酔狂な人間ではない。

だが、目の前には未だに不機嫌な危険物みさかみこと。  
処理を放棄して逃げる手立ては一切無いのが現状だ。

(……不幸だ)

くしゃり。

「あれ？」

思わず友人の口癖を脳内で発した山城の手が何かに触れた。  
座席の合成皮とは明らかに違う布の感触。

一体何だ？と手の先に視線を向ける。

そこには緑色を基調に白い四本の線。そして、同じく白い盾を模した意匠が施された帯状の布。

「これは……」

山城はそれを座席から拾い上げ、テーブルの上へと置く。  
テーブルに置かれた物。

それは学園都市の有志学生による治安維持組織、風紀委員を示す腕章であった。

「なあ、御坂。俺が来る前にここに座ってたのって誰だ？」

「え？ ……確か初春さんだったけど。それって、もしかして初春さんの？」

どうやら、ここは原作通りらしい。

「……とりあえずメールで連絡しとくか」

山城はそう言うと、携帯電話を取り出してカチャカチャと初春宛のメールを拵える。

そのメールの送信を終えると、また携帯電話をポケットへと仕舞った。

「で、これからどうするのよっ？」

「いや、そこで俺に振るのかよ」

唐突な美琴の振りに山城は苦笑いで答える。

むしろ、それはこちらが聞きたいくらいだからだ。

不機嫌な電撃姫と上手に行動を共にするマニュアルまでは、流石の山城も持つていない。

本当にどうするべきか、と山城が思案げな顔になった時、“原作の流れ”は始まった。

「何を暢気にサボってるの？」

「へ？」

突然の声に山城と美琴は同時に疑問の声を上げ、次に声の主の方を見る。

そこには紺色のサマーセーターに黄色いリボン、チェック柄のスカートという出で立ちの眼鏡の女子高生、固法美偉このりみいが立っていた。

腕にはテーブルの上に置かれているものと同じ風紀委員の腕章を付けている。

「貴女でしょう、応援の人って。それをこんなところで……」

そして、その固法の視線は制服姿の美琴へと向けられていた。

「えっと、私？」

「貴女よ。ほら、早く腕章付けて。行くわよ」

事態がよく飲み込めていない美琴は何故、自分が指されたのかが分からずに困惑する。

しかしこの時、美琴にとって、かなり不運が重なった状況だった  
と言えよう。

テーブルの上に置かれた風紀委員の腕章。

そして、私服姿の山城と違い、常磐台中学の校則に従い、制服姿  
だった美琴。

基本的に風紀委員の仕事は制服で実施するため、固法の勘違いの  
矛先は必然的に美琴に向いてしまったというわけだ。

「行くつて、何処へ？」

「仕事に決まってるでしょう。……って、聞いてないの？」

ともかく、誤解は解かなければならないだろう。

そのように思った美琴は事情を説明しようとして……止めた。  
頭の中を黒子に言われた言葉が過ったためだ。

(私だつて、風紀委員の仕事ぐらい……)

ここで風紀委員の仕事を華麗に片付けてしまえば、あの後輩の鼻  
を明かせるのでは無いだろうか？

美琴は咄嗟にそう考えたのである。

「ああ、すみません。実はです」モガッ

そのため、美琴は彼女に助け船を送ろうとした山城の口を即座に  
手で塞いだ。

そして、山城が何かを言い出す前に身を乗り出し、山城に耳打ち  
をする。

話を合わせて、と。

「そういえば、見掛けない顔だけど……もしかして、新人さん？」

「あ、はい！ 今日から配属になった御坂です！」

シュバツと山城から離れて立ち上がり、美琴は固法に頭を下げる。その様子を見て、山城は小さく貸し一だぞ、と呟くと、美琴に続くように立ち上がった。

「ああ、すみません。実はコイツ、俺の後輩なんですけど、今日から初仕事だとかで応援がてら声をかけてしまって……」

愛想笑いを浮かべながら、山城は固法に会釈する。

咄嗟の言い訳だが、少なくとも悪手では無いはずだ。

「そうだったの？ でも、駄目じゃない。仕事なのにサボらせちゃ」

「申し訳ないです。お詫びに今日は非番だったんですが、お手伝いしますよ」

「それはありがたいけど……。貴方、非番なら風紀委員の腕章は？」

「一応、持ち歩いてます」

山城はそう言いながら、カーゴパンツのポケットに手を入れて、風紀委員の腕章を取り出した。

何のことは無い。ポケットの中に上書き保存で出現させただけである。

ちなみに美琴は山城の台詞に驚いた顔をしていたが、話を合わせると言った手前、何も言っただけはこなかった。

「分かったわ。なら、今回だけは不問にするわね。その代わりにし  
っかり仕事をしてちょうだい」

「はい！」

こうして、二人の偽風紀委員による奇妙な活動が幕を開けた。

第六話（前） とある偽装の風紀委員（ジャッジメント）（後書き）

感想・評価・意見は随時お待ちしております。

## 第六話（後）（前書き）

考查とレポートが交差する時、執筆時間は削られる。

それでは、第六話（後）をお楽しみください。

2010/8/8 22:15 一部修正



## 第六話（後）

ジャッジメント  
風紀委員。  
アンチスキル

警備員と並ぶ学園都市の二大治安維持機構の一つであり、有志の学生達によつて構成されている組織である。

その一員になるには志願の後、九枚の契約書にサインし、十三種の適正試験に合格し、四ヶ月に及ぶ研修を受けなければならない。

しかし、そのために勘違いされがちであるが、学生はあくまで学生。

本来的な風紀委員の活動は、その学生が所属する学校内での仕事  
が大半となる。

校外での活動は極めて限定的であり、緊急時以外に彼ら風紀委員  
に本格的な治安維持任務が任されることが無い、ということ<sup>を</sup>正しく  
認識している一般学生は何人いるだろうか。

そして、偽風紀委員こと御坂美琴<sup>みさか みこと</sup>の場合、それを正しく認識して  
いなかった方と言えた。

「……………」

学園都市第七学区のとあるコンビニエンスストアの前。  
美琴は釈然としない表情のまま、掃き掃除をしていた。

だが、その表情とは裏腹に箒捌きは的確。

散らかっていたゴミはみるみる綺麗に集められ、同じ偽風紀委員  
の山城扶桑<sup>やましろ ふさつ</sup>がそれを塵取りで回収して行く。

しかし、道は綺麗になれど美琴の心は一向に晴れない。

(風紀委員の仕事ってこんなことなの……?)

美琴が想像していた風紀委員の仕事と、目の前の仕事は大きく違っていた。

てつきり暴走した能力者を相手に大捕物、と考えていたのだが、実際に蓋を開けてみればこれである。

どうにも釈然としない。

「ねえ」

「あん？」

ゴミ箱に塵取りの中身を棄てて戻ってきた山城を美琴は呼び止める。

「風紀委員の仕事って、普通はこんな感じなの？」

「まず風紀委員じゃない俺に聞k……げぶんげぶん。まあ、でも多分こんな感じだぞ。街中で見掛ける範囲では」

うっかり普通の声量でカミングアウトしそうになった山城は、咄嗟の咳払いで誤魔化した後に言い直す。

少し離れた位置で同じく掃除をしている本物の風紀委員、固法美<sup>このらみ</sup>偉に聞かれては堪らないからだ。

「むう……」

一方、山城の言葉を聞いた美琴は、そうだ、きつと本来の仕事はこういうものなのだ、と思いつき、再び箒を動かし始めた。

よく考えれば、この状況に不満を持ったところで事態が解決する

わけでもないし、何より全ての言い出しっぺは自分自身である。  
予想と違ったからとはいえ、途中で投げ出すような無責任な真似はしたくない。

「あっ！」

そう心を入れ替えて、掃除を続けようとした美琴の箒の前に紙屑が投げ落とされる。

一体何だ、と顔を上げた美琴の目が、缶ジュースを片手に前を通り過ぎる一人の男子学生の姿が捉えた。

どうやらその学生がこの紙屑を投げ捨てたようだ。

「ちょっと、待ちなさいよ！」

ゴミを道に捨てておきながら、何でもないような学生の態度に美琴が声を荒げる。

そして、その声に気が付いたららしい学生がこちらの方を振り向いた。

「ああ、これも頼むわ」

飲んでいた缶ジュースの空き缶を道に放るといふ全く望んでいない動作付きで。

「なっ……」

思わず絶句する美琴。

対する学生はと言うと、用はそれだけとばかりにさっさと歩き去ろうとする。

この一連の行為は元々、沸点が然程高くない美琴を怒りの臨界点

に押し上げるには十分過ぎた。

「待てっつて……」

「いやいや、お前が待て」

バチバチと帯電し、学生に制裁を与えるべく片足を上げた美琴を山城が即座に止める。

行動を止められ、怒りの行き場を無くした美琴は八つ当たりと思いつつも、山城をキツと睨む。

「ここは任せる。スマートに諭してくる」

だが、睨まれた山城はそう言っていると、空き缶を拾い上げて学生を追いかける。

しかし、心なしか井桁が貼り付いているように見えるその右手では、アルミ製の空き缶がメキメキと“握り込まれていった”。

流石の山城も掃除をしている目の前でポイ捨てという暴挙を実際に見せ付けられて、何か思うところがあつたらしい。

「ここらから、その君。空き缶を捨てる場所はあそこのゴミ箱だぞ」

山城はにこやかに学生の肩を左手で掴んで呼び止めると、純粹な握力のみでペットボトルの蓋程度に圧縮された空き缶を手渡す。

学生は最初こそ何だこいつは、と言わんばかりの表情で山城を見たが、手渡された物体の正体に気が付くとみるみる顔を引き攣らせた。

「じゃあ、ちゃんとあつちに捨てようか？」

「は、はひー！」

にっこりと凄まれた学生は、青い顔を米搗飛蝗コメツキバッタのように高速で縦に振ることで答える。

その後、コンビニエンスストア前に設置されているゴミ箱に空き缶と紙屑 向かう途中に拾い上げていた をそれぞれ投げ、何故か山城に敬礼をしてから脱兎の如く逃げ去っていった。

「ほら、話せば分かるもんだろ？」

「……何かが違う気がするんだけど」

一仕事終えた表情で戻ってきた山城に、美琴は先程とはまた別の釈然としない思いを感じる。

「あら、そっちは終わったの？」

「ああ、はい。一応」

「手際が良いわね。それじゃ、次は巡回パトロールに行くわよ」

しかし、美琴が山城への突っ込みを考える間も無く、偽風紀委員達に新たな仕事が舞い込んだ。

\* \* \*

「……はあ」

それから一時間後。

美琴は公園のベンチで深い溜め息を吐いていた。

「私、駄目じゃん」

ぼつりと呟きながら、この一時間の出来事を思い出す。

まず、道を聞かれた際。

美琴が地図を相手に四苦八苦ししている間に、傍らの山城が光情報を弄って作り出した地図プログラムを使い、固法が行き先を分かりやすく相手に説明するという連携技を披露する。

次に川原で動かないラジコンヘリコプター相手に悩んでいた男子を見つけた際。

美琴が電撃でラジコンの微調整をしたはいいが、加減が足りなかったのか、哀れラジコンは飛び立った直後にエンスト。

そのまま、川に墜落……しそうなところで山城が阻止。修理をした上で男の子に返却していた。

極めつけは男女二人の逢い引き現場を目撃した際。

何か別の現場と勘違いした美琴が制止のために突撃しようとし、逆に山城に制止させられるという失態を犯す。

……つまり、分かりやすく言うなら、空回りする度に美琴は山城にフォローされっ放しだったのである。

その、例えるならまるで先を読んでいたかのようなフォロー。

あれで本当に本職ではなく、自身と同じ“偽”風紀委員なのか、と美琴は頂垂れた。

もっとも山城は原作知識メタ情報という後ろ楯から、今日の出来事を大体

知っていたため、本当に先読みした結果の行動だったのだが、それを美琴が知る由は無い。

「……ん？」

そんな思考の海に沈み、ぼんやりとしていた美琴の前に何か差し出された。

美琴が顔を上げると、そこには美味しそうなクレープと……

「はい」

「ああ、すみません」

…… 優しいな笑みを浮かべる固法の姿があった。

固法は美琴にクレープを手渡すと、その隣へと腰掛ける。

「やっぱり研修と現場では勝手が違う？」

「はあ……、ってゆーか。あそこまで地図音痴で加減知らずで空気読めないとは……」

この一時間の出来事をまとも思い出してしまい、美琴が顔を伏せながら、小さく答えた。

「私も苦手だったわよ、地図の見方」

その美琴の様子を見ながら、固法は言葉を続ける。

そんな固法の言葉に、美琴は少し驚いたような表情で顔を上げた。先程の山城謹製ホログラム地図を　かなり精巧で分かりやすい代物だったとはいえ　即座に読み取り、相手に説明していた固法

の台詞とは思えなかったからだ。

「知っている街でも意外と手間取るのよね」

そう苦笑気味に固法は言葉を締め括った。

誰でも最初はそんな感じだから気にするな、とでも言っかのよう  
に。

それを読み取った美琴は少し表情を和らげた。

「それに貴女は良い先輩を持っているみたいだしね。彼に学べばき  
つと問題無いわ」

「え？」

「ほら、彼よ。山城さん……だったかしら」

固法が少し先に停車しているクレープの移動販売車を示す。

その前にはカーゴパンツに迷彩柄のシャツ、タクティカルベスト  
という不審者……もとい山城がメニューが書かれた看板に齧り付い  
ていた。

まだ決めていなかったのか、と美琴は苦笑いする。

「非があつたとは言え、非番の日に後輩を手伝ってくれるなんて、  
私は良い先輩だと思うわよ」

「えーと、まあ、先輩はお人好しですから……あはは」

偽風紀委員なのだが、とは言わず、美琴は無難な相槌を打つ。

だが、山城が自分より風紀委員の仕事を的確にこなしていたこと  
は疑いようが無かった。



ピリリリ。ピリリリ。

「あら、電話？ ちょっとごめんなさいね」

直後、固法の携帯電話が鳴る。

そちらの対応を始めた固法を横目に、美琴はふとあることに気が付く。

……確かに冷静に考えれば奇妙な話である。

何故、山城扶桑は今日、こんなことに付き合ってくれているのだろうか。

全ての始まりであるあのファミリーレストランでの邂逅の際、確かに美琴は山城に対して、話を合わせると言った。

しかし、本来なら山城にそれに付き合う義理は無いはずである。

山城は美琴との決闘において、彼女を軽く往なせる稀有な人物。

美琴が彼に何かを強要したところで、それを拒否できる力を十二分に持っているのだ。

だが、実際のところ、山城は断らず、かつ特に文句も言わずに美琴の我儘に付き合ってくれている。

考えれば考える程に美琴には不思議に思えて仕方がない。

「何を考え込んでるんだ？」

「へ？」

考え込んでいたところへ投げかけられた言葉に、美琴は反射的に顔を上げる。

そこにはクレープ チョコアイスベースらしい を片手に怪訝そうな表情をした山城が立っていた。  
どうやらようやく何を食べるかを決め、買って来たようだ。

「べ、別に何でも無いわよ」

「……？ まあ、それなら良いんだが」

何故か気恥ずかしくなり、やや突っ慥貪に美琴は言葉を返す。

そんな美琴の言い方に山城は疑問を抱いたものの、深くは追求せずに幸せそうにクレープを食べ始めた。

その様子を見て、今度は小さく溜め息を吐く美琴。

目の前の人物について、真面目に考察しようとした自分が馬鹿らしく思えてしまったのである。

「…うん、分かった。私達も探してみるわね」

そして、一連のやり取りが終わるのを待っていたかのように、美琴の隣に座る固法が通話を切った。

「探し物の要請が入ったわ」

「探し物？」

「ええ、鞆ですって」

「鞆……」

その固法の言葉に美琴が反応した。

一時間と少し前。

山城が来る前に黒子や初春、佐天とファミリーレストランで話題にあがっていた話を美琴は思い出す。

それは最近、巷を騒がせている連続爆弾テロ クラブイトン 連続虚空爆破事件と呼ばれている に関する話題だ。

原子番号十三番ことアルミニウムを基点に重力子を加速させ、一気に周囲に放出させ、爆発に似た現象を引き起こす能力者……要約すると、アルミニウムを爆弾に変えてしまう能力者による犯行らしい。

ここ数日は縫いぐるみや子供用の鞆など、人間の警戒心を削ぐようなものにアルミニウム爆弾を仕込まれるケースが増え、関係者を悩ませているようだ。

それを聞いていたため、もしや、と美琴は咄嗟に思い至ったのである。

「それってもしかして、子供用の鞆じゃありませんか？」

「あら、よく分かったわね。ピンクでお花の柄が付いているそうよ。ベンチに置いてあったのを、犬が銜くわえて持っていったんですって」

「犬が!？」

ガタツ、と勢いよくベンチから立ち上がる美琴。

爆弾という危険極まりない代物を銜えた犬が何処かへ消えた。  
不味いなどという次元の話ではない。

早く探しに行かないと！と美琴は辺りに憚らずに声を上げそうになった。

しかしそこで、ふと考える。

(……でも、どうやって探せばいいの?)

繰り返すようだが、目標の鞆は犬に銜えられて、ふらふらと街を彷徨っているのだ。

全くの見立ても無しに探し始めても、間違いなく日が暮れてしま  
う。

何か良い手立ては無いのだろうか。

「ご馳走様」

あった。素晴らしい手立てが。

そう思った美琴の視線が、丁度クレープを食べ終えたららしい上書オウ  
保存能力者の少年の姿を捉える。

あの販促じみた汎用性を誇る能力を使う目の前の人物なら、多分  
何か良い手立てを打てるはずだ。

他人任せは良くないことだが、今日だけでも既に幾つも借りを作  
ってしまっているし、ならば後一つや二つの追加くらい構わないだ  
ろう。

後でしっかり返せばいい。そう割り切った美琴の行動は速い。

「アンタ、今の話は聞いてた?」

「ん? ……ああ、大体はな」

「で、方策は?」

「あるぞ」

そして、対する山城のこんな場合の話の早さも中々のものである。

「えーと、固法さん。鞆の特徴はピンクの花柄で良いんですか？」

「ええ、そつらしいわ」

「なら、選別基準は“犬”と“子供用のピンクの花柄鞆”か」

固法に確認を取った山城は、ポケットから小型情報端末を取り出し、無線LANを起動させる。

それから、何やら目にも止まらぬ速さでキーボードを弾き始めた。左手は小型情報端末を持つことに使っているため、右手だけで弾いているのだが、あまりの速度に指が何本もあるように見える。

その光景に固法は呆気にとられていたが、見慣れている美琴はその結果だけを静かに待つ。

時間にして数分。

山城の右手小指が何十回目かのエンターキーを叩いた次の瞬間、山城の周りの空中に、光の屈折を弄って出現させた十数個のホログラム・ディスプレイが現れる。

そこに映し出されているのは、学園都市中に張り巡らされた監視カメラシステム網に山城が“ハッキング”を仕掛けて入手した映像だ。

「“犬”と“ピンクの花柄鞆”が同時に映っているカメラだけを選別した。犬が鞆を銜えてる映像を探してくれ」

その山城の言葉の意味を理解した美琴が、即座に十数個のディスプレイ

プレイに視線を走らせる。

十数個とはいえ、星の数もある学園都市の監視カメラ数から考えれば、段違いに少ない量だ。

そこまで山城が絞り込んでくれたなら、後はとにかくやるしかない。

「いた！」

そして、ある一つのディスプレイで目を止めた美琴がそんな声を上げる。

彼女が指差したディスプレイには、小さなピンクの鞆を銜えた犬がとことこと何処かの公園に入っていく様子が映されていた。

「……第七学区二一一六五号監視カメラだな。設置場所は児童公園前の電信ばさ」

「児童公園ね！　なら、とつとと行くわよ！」

山城が台詞を言い終えないうちに、むんずとその襟を掴んだ美琴が全速で引き摺っていく。

原作知識の関係で今の美琴に何を言っても無駄だと知っている山城は、そのある意味、パターン化されつつある流れに逆らわず、そのままドナドナされることを選んだ。

\* \* \*

だが、途中で流石に息苦しくなった山城は自力での歩行を願い出る形で、暴走特急御坂美琴から解放されていた。

現在、山城は少し先を足早に児童公園に向かっている美琴を追うように道を駆けている。

固法を遙か後方に引き離してしまったことが気掛かりだったが、自身が美琴に高速で引き摺られていく時、追いつくまで御坂さんを頼む、との叫んでいたため、後から間違いないと到着するだろう、と思うことにしていた。

「ん？」

そんな山城の視界が音楽を聴きながら、ぼんやりとこちらに向かつて歩いている眼鏡の少年と、お世辞にも柄が良いとは言えない二人組の姿を捉える。

眼鏡の少年はこのまま気がつかずに直進すれば、間違いなく、あの二人組のうちの一人に肩がぶつかるような位置取りにいた。

(……あのシーンか)

そう、原作のあのシーンである。

だが、原作のように彼らがぶつかって喧嘩となった場合、仲裁に入るのはかなり面倒だ。

また、事故は未然に防ぐ方が手っ取り早い。

そう考えた山城は、上書き保存で眼鏡の少年の位置座標をやや横にずらした。

位置座標をずらした直後に、眼鏡の少年と柄の悪い二人が擦れ違

う。しかし、原作のように肩がぶつかることは無かった。

(今はとりあえずこれで良いよな)

事故を防いだのだから、感謝されることはあっても恨まれることは無いはずである。

眼鏡の少年と擦れ違った山城は、柄の悪い二人組を追い越して、さらに足を早めた美琴を見失わないように追いかけていった。

\* \* \*

何とか美琴を見失わずに、山城は目的地である児童公園へと到着していた。

児童公園前で一旦立ち止まり、ヒントをくれた監視カメラの位置を確認した山城は、次に児童公園内に消えた美琴の姿を探すための視線を巡らせる。

「おねえちゃん、ジャッジメントのヒト？」

「わー、トキワダイチュウガクのセイフクだー」

「え、えーと」

山城が美琴を見つけた時、彼女は目を輝かせた小さな子供達に囲まれている最中であった。

どうやら名門である常磐台中学の制服は子供相手でも目立つようだ。



「やっぱり常磐台は人気なんだな」

スカートを捲られ、短パンだノーパンだと子供に弄られている美琴を横目に、山城は先に犬を探すことにした。

しかし、意外に児童公園は広く、犬が何処にいるかの検討が付け難い。

ならば、と山城は地道な聞き込みを開始する。

「その君、この辺りでワンコ見なかったか？」

「ワンコ？ ボクはみてないよー！」

「わたしはみたよ！」

「お、どの辺りだ？」

「うーんとね」

「あ、イヌだ！」

犬を見たらしい少女に話を聞こうと屈んだ山城の背後から、そんな声が聞こえた。

咄嗟に首だけを回すと、ベンチの影から、ピンクの花柄鞆を銜えた犬が出てくる様子が見えた。

ほぼ間違いなく探していた犬と鞆だ。

山城はすぐに上書き保存で足止めをしようとしたが、その演算を途中で止めた。

最後の花は彼女に持たせよう、と思ったのである。

「いたぞ御坂！ そつちだ！」

そして、山城は御坂美琴に犬の所在を知らせた。

「！ 逃がすかあつ！」

山城の言葉で犬に気が付いた美琴が、逃げるように駆け出した犬を猛然と追いかける。

だが、さしもの美琴でも本気で走る犬に追い付けるはずがない。

（仕方がない……！）

そのため、バチバチツ、と美琴は電撃波を飛ばした。

ただし、犬目掛けてではない。

犬が走っていく先にある街灯目掛けてだ。

美琴が放った激しい電撃により、負荷に耐え切れなくなった街灯がパンツ！と大きな音と共に弾け飛ぶ。

その音に走っていた犬は驚き、一瞬動きが止まった。

「よっしやー！ 捕まえたー！」

犬に生じた隙を突き、背後から飛びかかるように犬を両手で捕らえるように美琴が突進。

もちろん驚きで動きが止まっていた犬はそれを回避できずに、見事に捕らえられた。

だが…

「あ、あれ？」

「上！ 上だ！」

… 美琴が捕らえた犬は、衝撃で口から鞆を離していた。鞆は何処に、と視線を巡らせていた美琴を山城の叫びを聞いて上を見上げる。

そこでは放物線を描いた小さな鞆が、噴水へと落下する軌道に乗る最中であつた。

「だああああああつ！」

それを確認した美琴は、犬を手放すと、カタパルトで打ち出された戦闘機のように駆け出す。

さらにより速度をつけるために、美琴は噴水の金属部分と自身との間に引き合う磁力を発生させた。

中にあると考えられる爆弾が、着水した衝撃で起爆しないとも限らないのだ。

あれを落としては不味い。

「舐めんなあーっ！」

そして、次の瞬間。

御坂美琴は噴水上へと、その身を躍らせた。

\* \* \*

「……何で言ってくれなかったのよ」

「そもそもそんな風に考えてたなんて、俺は聞いてないぞ」

「確かにそうだけど……」

時刻は午後二時過ぎ。

美琴はデジャヴを感じつつ、公園のベンチで頂垂れていた。その隣には、山城が居心地悪そうに座っている。

あれから無事に追いついた固法の説明で、鞆を爆弾と勘違いしていたことに美琴がようやく気が付いたのだ。

また空回りしていたのか、と今は絶賛意気消沈中である。

ちなみに鞆を確保するべく噴水に飛び込んだため、濡れ濡れのぐちよぐちよになっていた美琴だが、既に山城が上書き保存で乾かしてくれていた。

「お姉様。それに山城さん」

そんな二人に、聞き慣れた声がかけられる。

途端、二人は顔を強張らせ、しどろもどろとなった。

「えーとだな、白井。これには山より深く、海より高いワケがあるんだ」

「それだと然したる理由ではない、ということになりますの」

どうやら山城の言い訳は逆効果だったらしい。

ジト目の小柄なツインテールの風紀委員、白井黒子（シロコ）は最初に口火を切った山城にターゲットを絞ったのだから。

「まったく、山城さんともあるう方がお姉様と一緒に風紀委員の真似事を……こういう場合は止めていたただかなくては困りますの」

「あー…、いや、何か見過ごせなかったというか」

「それでもですの!」

思わぬ精密爆撃に晒された山城は、隣の美琴に助けを求めようとする。

だが、彼女は山城を尻目に、少し離れた位置で鞆を探していた女の子からお礼を受けていた。

どうやら山城は体の良い被害担当艦と化したようだ。

「山城さん、ちゃんと聞いてますの!」

「は、はい! 聞いていらっしやいます!」

原作のイベントを近場で楽しもうとした罰なのだろうか。

哀れな山城はそれからしばらく黒子にこっそりと絞られた後、返信されていたメールに気がつかなかったために、黒子と共にやって来ていた腕章の持ち主、初春飾利ついはるかざりにも軽く怒られることとなった。

第六話（後）（後書き）

感想・評価・意見は随時お待ちしております。

第七話 とある学者の突発脱衣（キャストオフ）（前書き）

手を伸ばせば届くはずなんだ。いい加減に始まるうぜ、夏休み！

未だに夏休みが始まりませんが、第七話は仕上がりました。どうぞ、お楽しみください。

2010/8/8 22:20 一部修正

## 第七話 とある学者の突発脱衣（キャストオフ）

七月十七日、午後三時。

太陽が徐々に西日となり、その照りつける熱線の量を強める中、少年と少女は並び立って第七学区を歩いていった。

この一文だけを見るなら、単なるカップルとも受け取れるかもしれない。

しかし、少年の顔が見る者の憐憫を誘う土気色で、隣の少女が申し訳なさそうな顔をしている、となれば話は違ってくるだろう。

「何故俺だけこつてりと……しかも容赦無さすぎだろ、常識的に考えて……」

迷彩柄のシャツにタクティカルベスト、カーゴパンツという出で立ちの少年、山城扶桑やましろ ふそうは、その口を力無く動かし、言葉を紡ぎ出す。どうやら風紀委員の真似事を黙認した代価は、かなり高かったようだ。

風紀委員二名によるお説教フルコース強制体験で精根を搾り取られた彼は、今まさに照りつける西日で最後の体力を削がれ、沈没しようとしていた。

普段なら西日くらい上書き保存でどうにでも出来るのだが、今の山城にそこまで思考を及ぼせる精神及び体力的余裕は存在しない。足を機械的に前へ前へと動かすことで精一杯なのである。

「ねえ、アンタ。本当に大丈夫？」

そして、そんな山城の様子は隣を歩く少女、御坂美琴みさか みことの同情を得るには十分過ぎた。



美琴としては、自身に付き合わせたばかりに山城が悲惨な目にあつたのだから、その同情も一際大きい。

「……まあ、大丈夫さ。お陰で御坂も白井と仲直り出来たみたいだし、その犠牲が俺だと言うのなら……俺エ……」

「いや、とてもじゃないけど大丈夫には見えないわ」

何やら精神が何処かに旅立とうとしている山城の姿を見て、美琴は大真面目に心配する。

ちなみに山城の発言通り、風紀委員の仕事の大変さを知った美琴は、あの後に白井と仲直りしていた。

ただし、その際の言葉をどう取り間違えたのか、感極まった白井は美琴に鼻息荒く突撃を仕掛け、電撃で撃沈させられていたのだが、その部分は割愛する。

何はともかく、今は沈みつつある山城の復旧が急務だ。

このままでは間違いなく完全に沈没してしまう。

そう考えた美琴は、少し前に通り過ぎたコンビニエンスストアの存在を思い出す。

暑い夏場である。冷たいアイスクリームでも奢れば、多少は山城の体力も回復するのではないだろうか。

「ああ、もう、アンタはそのベンチで待ってなさい。今日のお礼に美琴センサーがちよろつとアイス奢ってあげるから」

「え？ 俺は別にそういうつもりじゃ……」

「いいからいいから。こういうのは断った方が気まずくなんのよ」

ちゃんと待ってなさいよ、と念を押し、美琴は歩いてきた道を駆け戻っていく。

体力的に追うことも儘ならない山城はそれを見送る他無く、それを終えると街路樹の袂たもとに位置するベンチに腰掛けた。

コンクリートジャングルという言葉が実に似合う蒸し暑い学園都市だが、このベンチは街路樹の下にある分、他よりも涼しい。

そのベンチに山城はぼんやりとアホのように、と言うよりもアホそのものと化しながら、さらにぐつてりと沈んでいく。

精神及び体力的疲労に上乘せする形で襲い掛かっていた暑さが軽減されただけでも、山城にとっては僥倖である。

「よつ、扶桑ふそう」

山城がそんな小さな幸せに浸っていた時、唐突に横から声がかけられた。

その声に山城が凭れていたベンチの背凭れ部分で頭を転がし、声のした方向へと顔を向ける。

「んあ？ おお、当麻あまか。こんなところでどうした？」

すると、そこにはツンツン頭が特徴的な彼の親友、上条当麻かみじまが私服姿で立っていた。

「上条さんはこれからバイトですよ。ようやく不幸を経験でカバー出来るようになりましてね。バリバリ稼かせごうかと」

「そういえば、ファミレスで落ち着いたんだっけか。確かに先立つものは稼げるうちに稼がないとな」

実は上条当麻。山城の強い勧めでアルバイトを始めていた。

山城と違い、無能力者故に学園都市からの奨学金が微々たる量の上条であったが、アルバイトを始めたことにより、徐々に財布や口座に住み着く紙の人物達が増えたらしい。

もちろん付き纏う不幸からは完全に逃れられないらしく、財布を落としたり、キャッシュカードを踏み砕くことなどの金運関係の被害が増したようだが、それでも彼はめげずにアルバイトに励んでいた。

もつとも、山城が上条に強くアルバイトを勧めた理由である近々彼の懐事情を強襲する“必要悪の教会の白い悪魔”<sup>ネセザリウス</sup>の存在を聞いたら、流石にめげる可能性はあったのだが。

「ところで扶桑の方こそ、こんなところでどうしたんだ？ ……いや、待てよ。さっきチラッとビリピリの姿が見えたし、まさかデートですか!？」

「ほほう、そうかそうか。当麻にはそんな風に見えたのか。よし、ちよつとその曇った目玉を二つ出せ。俺が塩揉み洗眼してやるっ」

「申し訳無いです。全力で遠慮致します」

上条にこの手の冗談を言われると無性に腹立たしいのは何故だろうか、と思いつつ、素直にそれに従って、ワキワキと手を動かしながら凄む山城。

一方、山城が本気で動けば、大抵のことが冗談では無くなることを知っている上条は、全身全霊をかけて遠慮の意向を示した。

「……ん？ ビリビリって、御坂のことか？ 渾名で呼ぶなんて、

あの後にも何か遭遇エンカウントしたのか？」

上条の反応にとりあえず怒りの矛先を収めた山城は、彼が発していた単語に疑問を投げかけた。

その“ビリビリ”という単語は、原作で上条と美琴がある程度の付き合いを経た後に上条が御坂に冠した渾名であったはずだ。

となれば、全ての始まりである六月のあの日以降に上条と美琴の間にか交流があった、ということになる。

「ああ、何度か街中で遭遇したんだ。六月のあの時に放電されたもんだから、咄嗟イマジンフレイカーに右手を使ってさ。お陰で興味を持たれたようです」

右手を見ながら、苦笑いをする上条。

やはり美琴の性格上、上条の右手の力に関する興味は発生してしまつらしい。

「曰く『アイツを倒したら、次はアンタの番よ！』だったかな。山城さん、お願いですから勝ち続けてください」

ただし、食い付き具合は山城の方が上であるようだ。

「……ふあつきんじーぞす」

上条の言葉に、山城は力無く頂垂れる。

今日は心なしか体力的、精神的を問わず疲れる事案や話題が多い気がしてならない。

しかも、その切っ掛けに首を突っ込んだのは自分自身なのだから余計に始末に終えない。

「うーむ、困ったな」

そして、そんな彼に追い討ちをかけるように、目の下に濃い隈を作った女性が近くを通りかかった。

\* \* \*

「そつえば、アイツって何のアイス好きなんだろ？」

その頃、コンビニエンスストアにやって来た美琴はオープン冷蔵ケースの前でアイスクリームを吟味していた。

学生が大半の学園都市では、夏場のアイスクリームの売れ筋は断トツであり、何処の店でも様々な商品が並べてある。

もちろん、学園都市特有の一定量の地雷や冒険物 異質さ際立つ駿河湾海鮮アイスやギネス級の辛さを誇るらしいブーツ・ジョロキアシャーベットなどはその筆頭候補だろう もあるが、多くは学生の一般的な需要に答える普通のアイスクリームだ。

だが、多くの商品が地雷で埋められている自動販売機のように消去法が使えない分、逆に悩んでしまう。

あれやこれやと吟味した美琴だが、最終的にバニラ系二つとチョコ系一つと無難な選択をした。

無意識のうちに二つではなく三つ購入したのは、山城の食べっぷりを数度見ているせいだろう。

それらを籠に入れ、レジへ向かおうとした美琴の足がふと止まる。その視線は書籍棚に並ぶ雑誌の一つに注がれていた。

「実録学園都市伝説？」

科学の最先端をひた走る学園都市に似つかわしくない非科学的な  
オカルト  
表題。

普段の美琴なら、手に取ることはない雑誌である。

だが、美琴はアイスクリームが入った籠を足元に置き、その雑誌  
を手に取った。

雑誌の表紙に散りばめられた煽り文句の中に、気になる一文を見  
付けたためである。

パラパラとページを捲る美琴。

途中、“どんな能力も効かない能力を持つ男”や“恐怖！脱ぎ女  
ページ  
！”について書かれた頁が流れていくが、美琴が見たい頁はそこ  
はない。

「あつた」

そして、ようやく目当ての記事へと彼女は辿り着く。

そこに書かれていた内容は …

「伝説の多重能力者<sup>デュアルスキル</sup>”。空間移動<sup>テレポート</sup>し、風を操り、車を軽々投げ上  
げる……」

… どこをどう読んでも、美琴の知り合いについてのものではあ  
つた。

「何よ、アイツ。都市伝説になってんの？」

先程まで並び立って歩いていた山城の姿を美琴は思い浮かべた。

確かに山城の能力は見ようによっては、多重能力そのものである。行使の方法を本人から聞いていなければ、恐らく美琴もそうだと思い込んでいただろう。

(……つまり、何？ 私は都市伝説に挑んでるってこと?)

美琴は思わず苦笑する。

都市伝説に挑む。一体いつのテレビ特集番組だろうか。

何より面白いのは、その都市伝説と自身が知り合いであり、さらに自身に付き合い、バテた都市伝説にアイスクリームを奢ろうとしている点だろう。

そんな身近にあれば、もはや伝説でも何も ……

「あ」

… と、そこまで考え、自身が何をしにコンビニエンスストアを訪れていたのかを美琴は思い出した。

「マズッ」

美琴は高速で雑誌を書籍棚に戻し、足元の籠を掴んでレジに向かう。

そこでささつと会計を済ませた後、アイスクリームと学園都市製の超保冷材の入ったビニール袋を片手に炎天下の店外に飛び出した。

「死んでないわよね、アイツ」

そう呟く美琴の頭を土気色の山城が過る。

早く行かねば、あのベンチで干物になっていそいだ。

流石にそれは洒落にならない、と美琴は足を速めた。

\* \* \*

(……あんにやろう。体良く逃げやがった)

同時刻、山城扶桑は厄介事を残して走り去った親友に内心、呪詛を送っていた。

彼のせいで山城は一瞬足りとも気が抜けない死闘を繰り広げているのだ。

これくらいの悪態は許されるはず。いや、許されるべきだろう。

「面白い能力を持っているんだな、君は」

山城と対峙する人物、ブラウスにタイトスカートという服装の女性がそんな台詞を口にした。

その濃い隈が残る目は、興味深そうに山城を眺めている。

しかし、油断してはいけない。

現について先程まで山城と一緒に居た親友、上条当麻は彼女の魔手にかかり、周りからの手痛い視線の集中砲火に晒され、誤解だあああああ！という捨て台詞……もとい魂の叫びを発しながら、何処へと消えているのだ。

つまり、些細な油断が山城に彼同様の社会的な死を与えてくれるだろう。



「……ところでやはり暑いのだが。どうしても駄目かね？」

「駄目です」

キツパリと否定する山城。

否定された女性は、やはり駄目か、と呟きながら、パタパタと手で自身を仰ぐ。

……諦めてくれたか？と山城はジト目で女性を注視する。  
だが、まだ気が抜けないのだから困る。

「ごめんごめん。生きてる？」

と、そこへ山城にとっての救世主が現れた。

ビニール袋を片手に戻ってきた御坂美琴である。

「み、御坂、助けてくれ」

「へ？ どうしたのよ？」

「いや、脱ぎ女が……」

山城の台詞の意味を美琴は当初、理解できなかったが、すぐにあることを思い出す。

コンビニエンスストアで読んだ雑誌の中の一頁。“恐怖！脱ぎ女！”を。

流し読みしたため、内容までは分からないが、単語は一致していた。

「……って、またかよ！？」

そこまで思い至った美琴の思考を中断するように、山城が叫ぶ。その山城の視線の先では、先程の女性が両手でガバーツと…

「駄目だ。暑い」

…ブラウスを脱ごうとしていた。

断っておくが、ここは彼女の自宅や私室などではない。天下の往来である。

しかし、彼女は今まさに自宅や私室で着替えるような気楽さで服を脱ごうとしていた。

実にとんでもない話だ。

「させるかあつ！」

山城が咆哮する。

すると、不思議なことに脱衣の過程にあつたはずのブラウスが、しっかりとした着こなしで女性の上半身に身に付けられていた。

「本当に不思議な能力だな」

これこそが山城が繰り広げていた死闘。名付けて、キャストオフィンターセプト脱衣迎撃である。

ブラウスに状態の情報を上書き保存することにより、女性が脱ごうとする度に強制的に再度身に付けさせていたのだ。

これのお陰で彼は社会的な死　つまるところの妙齡の女性の脱衣をぼんやり眺める変質者の称号　を免れていた。

「な、何よ。この人」

その一連の流れを目撃した美琴は、とりあえず山城に詰め寄る。

「いや、何と云うか、車を停めた駐車場が分からないとあの人が咳いてたのを、さっきまで居た友達が呼び止めてさ。話聞いてたら、突然今みたいに……後は無限ループだ」

そして、詰め寄せられた山城は掻い摘んだ説明を行なう。  
少なくとも俺は悪くない、と言うように。

まあ、今回の件についてはそれは事実であり、彼は一切悪くない。

「……で、その友達は？」

「周りから変質者を見るような目で見られて、陸上競技選手も真っ青な健脚で逃走しました。後で絶対にシバき倒す」

山城が割りとは本気で言い切る。

その説明を聞き、声をかけておいて、人に押し付けて姿晦ますなんて無責任な話ね、と美琴は感想を抱きつつ、女性の方を振り向く。  
そして、思い切りぎよつとした。

「ふう……汗びっしょりだ……」

隙あらば何とやら。

振り向いた先の女性はブラウスを脱ぎ終えていた。

「ア、アア、アンタ！ ほら、さっきのを早く！ 見られてる！ 見られてるわよ！」

「えっ？ ……って、うわっ！」

\* \* \*

十数分後。

三人の姿は街の一角にある休憩スペースにあった。

「すまないね。アイスまでいただいた上に、こんな風に能力まで使ってもらって」

食べ終えたチョコアイスクリームをテーブルに置きながら女性は言う。

今、彼女の周りはとても涼しい。具体的には二十七度だ。だが、学園都市が誇る天気予言では、日中は三十三度と言われていたはずである。

何故、これ程涼しいのだろうか。

「いえ、お構い無く。それにアイスを買ってくれたのは御坂ですから」

それは同じテーブルの一角でカップ入りのバニラアイスクリームを幸せそうに食べながら、体力を回復させている山城の能力であった。

周囲数メートルを範囲指定し、温度と湿度情報を上書き保存。

それから、空気の流れを上書き保存したエアカーテンで指定範囲をすっぽり包んでいたのだ。

能力による快適冷房空間、と言えば分かりやすいだろう。

「……っていうか、最初からこうしていれば脱衣迎撃アレしなくて良かったんじゃない？」

「……あの時はそんな余裕無かったっつもの。下手すりゃ妙な烙印押される状況だったんだぞ」

山城と同じくバニラアイスクリームを食べる美琴の小声の突っ込みに、彼は即座に突っ込み返す。

いくら予期してとはいえ、実際に脱衣されると、男なら様々な意味で戸惑ってしまうのは仕方がないことだろう。

「しかし、本当に君の能力は面白いな。多重能力とはまた違っみたいだが……」

「確かに多重能力では無いですね。一応、分類的には情報操作系です」

「情報操作、か。なるほど。今は温度や風の流れの情報を操作している、と言ったところかな」

実に興味深いな、と女性は言葉を続ける。

「随分と詳しいですね。もしかして、学者さんなんですか？」

一方、山城の簡単な説明で能力の大本を理解したらしい女性に驚いた美琴は、そんな質問をする。

「……そういえば、自己紹介がまだだったな。私の名前は木山春生きやま はるみ。脳生理学……主にAIIM拡散力場について研究しているんだ」

大脳生理学者こと木山春生きやま はるみは、二人にそう自己紹介をした。美琴の予想通り、彼女はその道の学者であったようだ。

「ああ、私もまだでしたね。私は御坂美琴です」

「あ、俺は山城。山城扶桑です」

「御坂に山城？ ……なるほど、《超電磁砲レールガン》に《上書保存オーバーライト》か。一度に二人の有名人に会えるとは、今日は凄い日だな」

その有名人、という表現に美琴は反応した。

「私とコイツ…いえ、彼の事をご存知なんですか？」

「ああ、超能力者レベル5の君はもちろんだが、彼は彼で一時期、研究者の間で大いに話題になってね」

学園都市二三 万人の中で七人しかいない超能力者レベル5である自身が有名人であるということは美琴は嫌という程に経験し、理解している。

だが、変わった能力とはいえ、数はそれなりにいる大能力者レベル4の一人である山城が、研究者の間で話題になった程の有名人とはどういうことだろうか。

…いや、山城は超能力者レベル5である自らを負かすような人物であり、何か美琴が知らない隠し種の一つや二つは持っていそうではあるのだが。

そう考えた美琴は、ちらりと山城を横目見る。

山城はアイスクリームの木篋きげいを口にしたまま、うだー、とテープルに延びており、その表情は今一つ読むことができない。

しかし、この会話は聞こえているはずであるし、触れられたくない話題なら何らかの反応をするだろう。

つまり反応しない、ということは聞いても問題ないはず、と美琴は判断する。

「話題、ですか？」

「ん、聞いていないのかな？ 彼はこの学園都市でも珍しい……」

ゲゴゲゴゲゴツ。ゲゴゲゴゲゴツ。

だが、木山の話を守るように、気の抜けた蛙の鳴き声のような電子音声が辺りに鳴り響く。

一瞬ポカンとした木山と美琴だが、次の瞬間には美琴がやや顔を赤くしながら携帯電話を取り出し、失礼します、と言いながら、通話をするためにビル影の方へと走っていった。

また、余談だが山城快適冷房空間を仕切るエアカーテンを抜けて学園都市本来の外気温と再会を果たした際に猛烈に暑そうな顔をしていったようだ。

「……仲が良いようだが、彼女には話していないのかな？」

残された木山は、テーブルに沈む山城に問い掛ける。

それを聞いた山城は後頭部をポリポリと掻きながら身を起こす。

「あまり自分語りは得意じゃないんです。聞かれた時に答えられる範囲で答えますよ」

「まあ、学園都市二大原石……とは言いが、一時期盛んに研究され、結局は調べ尽くせずには今は下火となった分野だ。最初から当たりを

つけて調べたり、聞いたりせねば、分からないだろうな」

「ははは、下火のままであって欲しいですね。流石にもう一度調べ回されるのは遠慮したいですから」

《原石研究》。

山城が東北地方から上京し、鷲峰学院中等部に転がり込む半年前から六ヶ月間、特に盛んとなった研究分野である。

盛んに研究された理由は、ある意味で単純。

学園都市が極東最大級……いや、世界最大級の原石を同時期に二つ得たからである。

一つは削れぬカリナン、超能力者に最も近き大能力者、《上書保存》山城扶桑。

そして、もう一つは……

(そういや、軍覇は元気かな。いや、元気が。常時元気百倍だもんな)

……計れぬカリナン、学園都市の超能力者が第七位、削板軍覇。

計れず、削れない。

この二人のお陰で《原石研究》は凄まじく研究者泣かせな分野と化したらしい。

これでもし、僅かに読み取れたと思われる山城の情報が彼の手で改竄されて意図的に流されたものだと思えたら、当時の研究者達は間違いなく茫然自失となるであろう。

とはいえ、下火になっただけで研究そのものは今でも続いている。それ故に二度目の研究所周遊をお断りしたい山城はこの分野の下



火を願っているし、何より再び盛んになるような事態に備えて、山城の恩人でもある“とある人物”に協力することで回避を目論んでいるのだが。

「ところで木山さん」

何気無く腕時計を見た山城が口を開く。

「車は良いんですか？」

山城の言葉で木山春生が本来の目的を思い出すのと、電話を終えた御坂美琴が山城快適冷房空間に帰還するのは、ほぼ同時であった。

\* \* \*

我らが美琴センサーが奢ってくれたアイスクリームと快適冷房空間により、山城は体力の回復を成し遂げていた。

無事に通常運転に戻れた山城の手にかかれば、一台の自動車……それも学園都市でも珍しい木山の愛車、ランボルギーニ・ガヤルドを発見することは実に容易かった。

何処の駐車場にも監視カメラの一つや二つは備わっているため、学園都市の監視カメラシステム網ハッキングを仕掛けてしまえば、その位置などあつという間に判明するからである。

「いろいろありがとう」

運転席に座る木山は、愛車探しを手伝ってくれた山城と美琴の二人に礼を述べた。

「いえいえ。でも、次からは場所を覚えてくださいね」

「ああ、そうするでしょう……それじゃ」

木山の青いギャルドが動き出し、駐車場の出入り口から外へと出て行く。

そして、それを見送った二人は ……

「……つか、自分の車停めた駐車場分からなくなるってどーよ？」

「……学者さんだから、いろいろ考えてたんだろ。多分」

…と、口々に感想を漏らした。

「そういえば、あの電話は誰からだっただ？」

「ああ、黒子よ。仕事が終わったから、朝の仕切り直しに初春ついはるさんと佐天さてんさんとで食事でもないか、って……折角だからアンタも一緒にどう？」

「なるほど。どうするかな……ん？」

そう思案げな面持ちになった山城の胸ポケットで、マナーモードにしていた携帯電話が振動する。

今度は俺か、ちよっとスマン、と美琴に断り、山城は電話の応対を始めた。

「はい、もしもし。……貝積かいづみさん？ ああ、どうも、ご無沙汰むさたしてます。 え？ 雲川先輩くもかわが？ ええー……」

会話が進むに連れて、山城の表情がみるみる曇っていく。  
何か厄介事が飛び込んできたかのような面持ちだ。

「ああ、はい。先輩のことだから拒否権は無いんですね。分かりました。早めに向かいますよ……それでは」

通話を終え、携帯電話を切った山城は深い溜め息を一つ吐いた。  
それから申し訳なさそうな顔で美琴の方を向く。

「悪いな、御坂。ちょっと急用が入っちゃった」

「うーん。それじゃ、仕方が無いわね」

「また今度、気が向いたら誘ってくれ。俺はすぐに行かないといけないらしい」

山城はそう言いながら、物体座標の上書き保存で学生寮のガレージに納まっているはずの愛車、ドウカティ・モンスター400とその鍵、そして、ヘルメットを呼び出した。

一方、突然現れたオートバイに美琴は面食らったようであったが、すぐにいつものことだ、と気を取り直す。

「分かった。それじゃ、また今度」

「あいよ。それじゃ」

ヘルメットを被った山城は美琴に軽く手を振ると、モンスター4

00に跨り、エンジンを始動させる。

それから木山が出て行ったのと同じ出入り口から道路へと出て行った。

「ま、しょうがないわ。私だけでも早く黒子達のところに行くつもりですよ」

山城を見送りながら、美琴は独りごちる。

「……あ、そういえば結局聞き損ねたわね。……今度聞いてみるか」

そして、すっかり木山に山城のことを聞き忘れていたことを思い出す。

だが、今更ではどうしようもない。

とりあえずそれは胸に留めることにして、黒子達と合流するべく、美琴は夕方の街並みへと歩み出すことにした。

ちなみに余談であるが、先の電話でうっかり木山こと脱ぎ女のことを話してしまっていた美琴は黒子達と合流した際に初春、佐天両名からの質問攻めに遭遇し、呪いを解くためですの！と何故か下着を片手に持った黒子に襲われることとなる。

第七話 とある学者の突発脱衣（キャストオフ）（後書き）

感想・評価・意見は随時お待ちしています。

第八話 とある少年の諜報活動（エスピオナーージュ）（前書き）

夏季休業になったら時間が出来る？                    まずはそのふざけた幻

想がぶち殺された！

お待たせ致しました。何とか第八話が書き上がりました。  
どうぞお楽しみください。

## 第八話 とある少年の諜報活動（エスピオナーージュ）

学園都市第一学区。

そこは学園都市の中でも、特に行政関係機関が集中する学区である。

外部と比べ、二、三十年は先行していると言われる科学技術の漏洩を防ぐため、周囲を高さ五メートル、幅三メートルもの防壁で蔽い、事実上の自治独立都市と化している学園都市だが、この第一学区の存在がその自治独立性の一つの象徴と言えるだろう。

しかし、一種の官庁街とも言える学区であるが故に生活感はかなり希薄であり、学生達にとってはあまり居心地が良い学区ではない。そのため、同学区内の経済、司法系の大学にでも通っていない限りは、普通の学生が進んで訪れることはまず無い場所でもある。

そんな第一学区を通る都市高速のランプの一つから、山城扶桑やましろうふそうが乗るオートバイは出てきた。

時刻は午後六時過ぎ。イタリア陸軍砂漠迷彩というマニアックの極みでしかない塗装が施されたドウカティ・モンスター400の車体を染めるのは傾いた夕日である。

この時間帯は学園都市の一部が戦場と化すことで有名だ。

山城のモンスター400と併走する学生達をこれでもかと鯨詰めにした何台もの路線バスなどがその典型だろう。

学園都市では学生の風紀維持のために完全下校時刻というものが定められ、それを過ぎると多くの公共交通機関が停止する。

故に遊びたい盛りな学生達が考えることはほぼ似通り、それがこの帰宅ラッシュという名の戦場を生み出すのである。

そう言った意味でも、山城が移動にオートバイを選択したことは正解だったと言えるよう。

流石にZIP形式も真つ青な圧縮が成された状態での移動は山城も望んでいないのだ。

学生鮪詰め路線バスや一般車の間を縫うように第一学区を走り続けた山城は、やがて右も左も高層ビルという景色から抜け出す。

そして、その景色と入れ替わるように眼前に姿を現したのは閑静な高級住宅街。

この周辺一帯の住宅街は、第一学区の行政機関の中でもそれなりの地位に勤める人々が暮らしている区画だ。

ただでさえ第一学区と縁が無さそうな山城だが、“ここ”はそれに輪をかけて無縁なはずの場所である。

しかし、彼は迷うこと無く、道選びで住宅街の一角へとモンスタ―400を走らせる。

まるで何度も訪れているかのように。

「おっと、ここだここだ……にしても、相変わらずでかいな」

それからしばらく高級住宅街を走ったところで、目当ての建物を見つけた山城はモンスタ―400を停止させた。

その建物は高級住宅地であるこの場所でも、一際大きな存在感を放つ一件の住宅。

いや、むしろ邸宅や屋敷という表現が正しいだろう。

確実に建設費用は億単位を叩き出していると思えるような立派な邸宅である。

「……来たは良いが、門は開いてないな。電話して開けてもらうか」

邸宅を眺めながら、一人ごちた山城が携帯電話を取り出そうとした矢先、唐突に道路に面した邸宅のガレージの扉がガラガラと開い



た。

どうやらここから入れということらしい。

そう認識した山城は、モンスター400を開いたガレージへと滑り込ませた。

半地下式のガレージの中には、ベンツやロールスロイスといったこれまた素晴らしい値段の高級外車が車体を休めており、山城は万が一にもそれらを傷付けて仕舞わないように 尤も山城なら、傷付けてしまっても能力で直せる。だが、だからと言って進んで傷付ける程、彼は酔狂では無い 注意しながら、モンスター400を停車させる。

そして、暑苦しいフルフェイスヘルメットを脱ぎながら、山城はモンスター400から降りてスタンドを立てた。

「良く来てくれたな」

脱いだヘルメットをモンスター400のハンドル部分に引っ掛けていた山城の背中に、唐突に声がかけられた。

しかし、山城は突然の声にも別段驚く様子も無く、前を向いたまま、ヘルメットをハンドル部分に固定する作業を続ける。

その声が聞き慣れたものであったからだ。

「雲川先輩の呼び出しを断ると後が怖いですからね。それに …」

しっかりと施錠までし終えたところで、山城はようやく声の主である老人の方を振り返る。

「… 貝積かいづみさんには、恩がありますからね」

「相変わらず義理堅いんだな、君は」

その山城の言葉に学園都市統括理事会の一員である貝積継敏は、  
苦笑することで応えた。

\* \* \*

学園都市統括理事会とは、十二人の役員で構成される学園都市運営の最上級機関である。

学園都市の司法や行政、軍事等の一切を掌握しており、この上にいる統括理事長、アレイスター・クロウリーを除けば、間違いなく学園都市で最大の権力を持つ集団と言えよう。

そして、それらを勘合すれば、その一員である貝積継敏がどのような存在かは分かるだろう。

「どうかね、学校生活は？」

「楽しんでますよ。今は試験も身体検査システムスキャンも終わって、後は夏休みまでの秒読みです」

「なるほどな。やはり夏休みは楽しみか？」

「それはもちろん」

だが、それが山城扶桑と彼とを結ぶ線に……しかも、友好的な部類なものになり得るかと言うと、恐らく疑問が残るだろう。

では、山城と貝積とを結ぶ線の正体は、一体何なのだろうか。

「まあ、今の生活を謳歌しているようで安心したよ」

「本当に感謝しています」

「研究に付き合ってもらったせめてもの償いだよ。私に出来たのはこれくらいだったからな」

山城扶桑と貝積継敏を結ぶ線。

それは原石研究に全ての端を発する。

山城がこちらの世界で生まれ育った東北地方より学園都市に上京を行なつてから半年の間、学園都市第七位の超能力者<sup>レベル5</sup>、削板軍覇<sup>そぎいたくんは</sup>と並ぶ世界最大級の原石である彼が研究対象として、研究所を巡り歩く生活を送つたこと。

そして、研究分野としての原石研究が、研究対象が欺瞞情報をそれとなく流す山城と純粹に扱にくい削板という研究側にとっては涙目であるう組み合わせであつた故に遅々として進まず、やがては下火となつたことは以前に述べたはずだ。

しかし、実際のところ、原石研究が下火となり、山城達が開放されるまでは紆余曲折が存在する。

原石研究の下火が一気に加速した主因に当時、原石研究を主導していた五百島<sup>いほしま</sup>先進能力研究所 以下、五百島研と呼称する が原石研究から撤退を行なつたことが挙げられる。

撤退の背景には、遅々として進まず、断片情報から将来性も微妙だと分かりつつあつた原石研究の研究優先順位を学園都市上層部が下げ、それに伴う研究費や補助金の削減が大きく関係していた。

これを受けた五百島研の研究陣が、これ以上の研究が利にならな  
いと判断するのに大した時間は掛からなかった。

この原石研究の屋台骨であった五百島研撤退による余波は様々な混乱を生むが、その中の一つに山城や削板の処遇が存在した。

今までは五百島研が研究対象である彼らの身分を保証していたのだが、撤退決定でそれが無くなったため、彼らの処遇が一時的に宙に浮いたのである。

その結果が何を生んだかと言うと、関連研究機関による貴重な研究対象である山城や削板の確保競争であった。

巨大研究機関である五百島研と違う、原石研究にのみ力を注いでいたような大多数の中小研究機関が、山城や削板の確保での再起を試みたのだ。

これは学園都市に来て、まだ半年にも満たない山城にとって、未曾有の危機と言えた。

原作で語られた範囲に対する対策や準備すら満足に出来ていない中、得体の知れない研究機関に自身の身柄が渡れば最後、良くても餓殺し。

最悪の場合、そのままさらなる暗部への快速急行に乘せられたも同然の事態に直結してしまう。

しかし、有効な対策や準備を行っていない以上、下手に情報操作で介入するわけにも行かないため、事態を見守ること以外に山城が打てる方策は無かった。

だが、最終的に山城に無事に開放された。

山城と削板の新たな保証人となった貝積能力解析研究機構……すなわち、貝積継敏の手によって。

（あの時は本当に助かったんだよな……本当に感謝しても感謝し切れない）

目の前を歩く老人の背中を見ながら、山城は内心呟いた。

\* \* \*

案内された先にあつた妙な厚さがある扉を開けると、そこはドーム状の部屋になっていた。

部屋の真ん中には、幾つかの高級そうな革張りの椅子と洒落たサイドテーブル。

そして、その前方で存在を自己主張しているのは、優に三メートルを超えているだろう学園都市謹製の超高密度ディスプレイ。

さらにはその超高密度ディスプレイの自己主張をかき消してしまうような存在感を放つ周囲の壁面三六〇度を覆うスピーカー群。

先程の扉の妙な厚さは、念入りに扉にまで設置されたこのスピーカーが原因であつた。

しかし、そのいわゆるホームシアターと呼ばれる部屋の中には、山城をこの場に呼び付けた人物の姿は見当たらない。

まだ到着していない、ということだろうか。

「雲川先輩はまだ来てないんですか？」

貝積邸のホームシアター内を目当ての人物を探して、ぐるりと見回した山城は、隣に立つように入室して来た貝積に問い掛ける。

「いや、彼女はもう……」

「ここに来ているのだけだ」

それに答えようとした貝積の言葉を中継ぎするように、部屋の一角から声が拳がった。

こちらに背を向けるように置かれた革張りの椅子。

そこに陣取っていたらしい声の主が手がひらひらと上げた後、気だるそうに身を起こした。

「あー…失礼、雲川先輩。見えていませんでした」

「淑女を待たせて、剩れ気がつかないなんて関心しないのだけだ」

椅子から身を起こした貝積継敏のブレインを務める天才少女、雲川芹亜は椅子ごと自身を回転させ、山城達の方へと向き直る。

その様子に山城は肩を竦め、精一杯皮肉るように言葉を投げ掛けた。

「……淑女は人を顎で使うために呼びつけたりするんですか？」

「有能な人材を使いこなすことが、真の淑女たらしめる一歩だと私は思っな」

だが、山城の精一杯の皮肉は、実にあっさりとして雲川に躲される。やはりそう簡単に舌戦で勝たせてくれる御方では無いらしい。

「買ってもらえるのは嬉しいですが、無料では売りませんよ？」

「その辺は抜かりないのだけだ」

気を取り直して、暗にタダ働きは御免だと言う山城に対し、雲川はまたくるりと椅子を回す。

そして、サイドテーブルの上に置かれていた小型冷蔵庫を開けると、中から白い小さな箱を取り出した。

山城は訝しげに雲川が手にした小さな箱を眺めるが、側面に書かれていた文字に息を飲んだ。

「第七学区の学舎の園の中でも屈指の人気を誇る甘味専門店敷島堂の高級カスタード・プディング。男が手に入れるには至難の一品だ」

突如、白い小さな箱に後光が差した気がした。

第七学区、学舎の園。

そこは学園都市でも有数のお嬢様学校が立ち並ぶ区画。

……であると同時に学生のみならず、教師や警備員、アンチスキル果ては路線バスの運転手までが女性という徹底された男子禁制区画でもある。

尤も男が全く入れないワケでは無いが、余程が無ければまず入れない事実に変わりは無い。

そんな区画に店を構える甘味専門店敷島堂の高級カスタード・プディングは、上記の理由から生まれる希少価値により中々入手出来ないため、普段なら甘味に目がない山城を釣り上げるには十分過ぎる威力を持つ品であった。

だが、しかし…

「……あのですね、先輩」

「なんだ？」

「毎回毎回、俺が甘い物に釣られると思ったら大間違いですよ？」

… 山城は屈しなかった。

それもそうだろう。

毎回、雲川が持つてくる仕事は山城が顔を引き攣らせるようなものばかりなのだ。

例を挙げるなら、学園都市から流出した技術情報をも情報欠片の塵に等しいものであったが、調べている中華人民解放軍超技術研究局のソフト、ハード両面での破壊任務。

これは主要なサーバーをサイバー攻撃で強襲し、分散されていたバックアップも情報解析で割り出して片っ端から解体。

施設群は空間移動を応用したアウトレンジ攻撃でどう見ても事故にしか思えない方法で爆破し、二度と使えない産業廃棄物の山にしている。

これら一国家の特務機関もしくは特殊部隊級の攻撃を、誰がやったかバレないようにするカモフラージュを含めて、山城一人に押し付けるのだから相当だろう。

……まあ、まだこれは貝積が関係していた依頼だったから許せるものだ。

しかし、KGBの亡霊ことロシア連邦保安庁が保管しているらしい冷戦時代の超能力開発データの奪取、という貝積からの依頼……に見せ掛けた雲川の私事百パーセントな仕事なども時々紛れているのだから堪らない。

長々と話したが、要するに雲川芹亜が山城扶桑を翻弄する存在で、彼女が持つてくる仕事は毎回彼の顔を痙攣させるような無茶振りばかりだということはお分かりだろう。

そのため、今度ばかりは翻弄されて堪るか、と山城が抵抗を行なったのである。



「ふむ。それは残念だな」

「流石にそう何度も同じ手には引っ掛かりません」

「そうか……ところで味の方はどうだ？」

「口当たりが凄くまろやか。甘さそのものは控え目、というよりは上品に纏めた甘さ。流石は敷島堂、期待を良い意味で裏切る一品……あれ？」

「ならば良かった。では、お前が食べ終わったら仕事の話に移るのだけだ」

少しばかり言葉の綾があった。

山城は確かに抵抗した。理性では。

しかしながら、甘味を求める彼の本能は、どうやら理性を置き去りにしていたらしい。

気が付けば山城は蓋の開いたプリンのカップを片手に、スプーンで掬ったプリンを美味しそうに口に運んでいたのだから。

\* \* \*

十数分後。

綺麗に平らげられたプリンのカップが、ホームシアターのサイドテーブルの上に二つ置かれていた。

「……で、今日は何処が相手なんですか？　また国家に喧嘩売るとかじゃないですよね？」

空になった三つ目のカップを先の二つの隣に置きながら、山城は口火を切る。

食べてしまったことは事実だから仕方がない。

既に山城はそう開き直すことにしていた。

「今までよりは難易度が少しだけ高いかもしれないな」

「いや、対国家の部分は否定しないんですか。それと淑女が口に物を入れたまま喋らないでください」

「……なら、食べ終わるまでそちらのご老体に聞いておいて欲しいのだけど」

山城と同じくプリンを食べていた雲川は、山城の突っ込みを受けて、スプーンで貝積を指し示した後、またプリンを食べ始める。

一方、山城と雲川の漫才じみたやり取りを静かに眺めていた貝積であったが、雲川の指名を受ける形で口を開いた。

「最近、外に“原石”について調べ回っている組織が居る」

放たれた原石という単語に山城がピクリと反応する。

「まさか、もう採掘が始まっている、と？」

「生憎そこまではまだ分からない。そして、それを知りたいから、君を呼んだんだ」

なるほど、と山城は言い、それから沈黙する。

自身も原石として扱われている山城は、今回の案件にいろいろと  
思うところがあるらしい。

「それで俺は何を？」

「ラングレイの商会のデータサーバーに侵入して、必要な資料を集  
めて欲しいのだけど」

ビシッ。

プリンを食べ終えた雲川の言葉に、山城の顔がそんな音を発して  
凍り付いた。

「ラングレイ……って、まさか“ザ・カンパニー”じゃないですよ  
ね？」

「“ザ・エージェンシー”とも言う」

「……帰りたい」

ラングレイの商会。

ザ・カンパニーやザ・エージェンシーなどの複数の異名を持つそ  
の組織は、アメリカ合衆国バージニア州ラングレイに本部を置いて  
いることからこう呼ばれている。

そして、それは世界の警察を自称するアメリカ合衆国が誇る対外  
情報機関<sup>C I A</sup>。

すなわちアメリカ中央情報局であった。

「いつものようにちよちよいとやって欲しいのだけど」

「いやいや、簡単に言わないでくださいよ。複数同時演算はかなり面倒なんですから」

山城は抗議するが、それに構う様子の無い雲川は、サイドテーブルの下から無線通信形式のキーボードを取り出し、彼に手渡す。

それに続けて、手際良く三　インチの超高密度ディスプレイの電源を入れ、彼の操作するパソコンの出力画面とする。

さらにはこれを使えばかりに学園都市上空周辺の軌道を周回している各国の様々な衛星のリストを山城に提示。

実に隙の無い、完璧なお膳立てであった。

「……ああ、もう、分かりましたよ」

これで逃走を諦めた山城は　尤も貝積からの正規の依頼であるため、本気で逃げる気は無かったが　椅子に座ったまま打ち込みやすい高さでキーボードを固定するように情報を上書き保存すると放つ雰囲気をがらりと変える。

それは彼がスイッチを切り替えたことを意味していた。

「擬装発信源は……人民解放軍の軍事衛星《紅星三号》にしよう。いつものサイバー攻撃だと勘違いしてくれば万々歳だな」

山城が呟くと、三　インチのディスプレイに《紅星三号》という名の衛星の画像と何やら高速で謎の文字列が流れるウィンドウが複数映し出される。

その光景を見ながら、山城はキーボードを目にも止まらない速さでひたすら打ち込んでいく。

「次にトンネルを確保。イギリス通信衛星《ヴィクター？》にフラ

ンス気象衛星《ミストラル》、ロシア観測衛星《メテオール》、アメリカ通信衛星《アイリス》……」

《紅星二号》のサテライトジャックを終えた山城は、さらに謎の文字列ウィンドウを多重展開。

擬装発信源である《紅星三号》を誤魔化するための通信経由のトンネル衛星を確保するべく、付近の衛星を無差別かつ次々に攻め立てていく。

「相変わらず凄い手際だな」

「これだけ派手にやって相手に気が付かれない……いや、相手に気が付かせない”のは流石なのだけど”」

「表向きは今も通常業務をしているように装ってますからね。重箱の隅をつつくように調べないと歯牙にもかかりません」

貝積と雲川の感想に律儀に答えながら、山城は作業を進める。

一見するとキーボードだけで何やら作業しているように見えるが、実は山城は二つの作業を行っていた。

一つはキーボードによる基礎情報打ち込み。

もう一つは演算によるキーボードで打ち込んだ基礎情報への上書き保存。

この二つの併用する山城であるが故に高度で複雑。かつ効率が良いハッキングが可能になっているとも言える。

そして、その猛威に晒されてしまった衛星は、片っ端から存外呆気無く陥落。“サテライトジャック”されていく。

ここまでの間に山城の手で陥おとされた衛星は既に十数基を数えて

いる。

もし、この諸行が公表されるようなことがあれば、即日世界に喧嘩を売った国際サイバーテロリストの一人に数えられ、各国の情報機関に追われるに違いない。

「さて、と。ラングレイまでの道は開かれましたよ。何をご希望で？」

それから間もなく、巨大なディスプレイの中央で踊る“COMPLETE!!”の文字を背景に山城は雲川と貝積の方を振り返る。

対する雲川は楽しげな笑みを浮かべると、一言…

「スパイリスト所属諜報員一覧」

…と言った。

「……」

よりもよって、そんな一番奥にありそうな面倒極まりない代物を。

本日二度目の顔面硬直を引き起こした山城に、貝積の申し訳無さ半分、憐憫半分の視線が送られていた。

どうやら山城扶桑の今日はまだまだ終わらないようである。

第八話 とある少年の諜報活動（エスピオナーージュ）（後書き）

感想・評価・意見は随時お待ちしております。

第九話（前） とある事件の虚空爆破（グラビトン）（前書き）

山奥に軟禁されること二週間。  
ソロモンよ、私は帰ってきた！

大変お待たせしました。第九話（前）です。  
お待ちになってくれていた方は勿論のこと、特に待っていないと  
いう方も是非お楽しみください。

2010/9/21 11:20 一部修正



## 第九話（前） とある事件の虚空爆破（グラビトン）

学園都市に存在する多くの学校は、夏休みの二週間前には全ての学力試験を終えるように取り決めがされている。

何故、このような取り決めがあるかと言うと、この学力試験後から夏休みまでの二週間という期間が各校に身体検査システムスキャンを実施するための期間として提供されるためだ。

身体検査はその種類の多さや内容の複雑さから、兎角に時間が必要であり、また検査の内容によってはその分野を専門とする開発官デベロッパーが立ち会う必要が生じる。

故に同じ日に一気に全ての学校で身体検査を行なう、というわけには行かず、二週間という長めの期間内に各校が順番に身体検査を行なうという訳だ。

尤も学生達にとってはその辺りの事情は正直なところ、どうでも良かったりする。むしろ、生じる副次効果の方に興味と関心が向かうだろう。

副次効果。それは身体検査後に残る期間が全て、短縮授業ないし午前授業になる点だ。

これは先の理由で既に学力試験が終わっているため、夏休み前に下手に単元を進めるよりは……という考えに則った処置である。

何だかんだで遊びたい盛りの学生達にとっては、嬉しい話と言える。

そして、今日という七月十八日の昼下がりに。

副次効果を大いに満喫する学生達で溢れる第七学区の街角。

その一角にあるファミリーストランの前に、対照的な表情を浮かべた山城扶桑やましろ ぶそうと上条当麻かみじょう とうまの姿があった。

「ゴチになりました」

「……相変わらず容赦無く食べてくれやがりますね」

片や満足げな表情で腹を擦る山城。

片や紙で出来た現代貨幣社会における戦士達　主に野口さんの散華により、一気に寂しくなった財布を沈痛の面持ちでポケットに仕舞う上条。

……何かこう、ある種の形式美すら感じられる明暗の一例である。

「いやいや、昨日逃げたお詫びに奢る……なんて言われたら、どう考えても食べなきゃ損だろ」

上条の恨み節を右から左に受け流し、山城は言う。

と言うのも、本日の朝に山城宛に上条から送られてきたメールが全ての発端なのだ。

その内容は昨日の一件　脱ぎ女こと木山女史きやまとの遭遇から上条、魂の咆哮のち逃亡までを指す　で、彼を置き去りにする形でバイト先に逃げたお詫びに昼食を奢る、というもの。

山城はそれを承諾し、昼食をご馳走になっただけである。ただし、ほぼ遠慮せず、上条の財布に会心の一撃を与えんばかりに、だが。

尤も良く食べる方の山城であるが、それでも普通は限度は存在する。

だが、上条にとって不幸だったのは、本日はその限度が平時の遙か上に存在したことだろう。

もちろん、これは上条の奢りだからと山城が上限を自身の意思で引き上げた訳ではない。

「それに実は昨日の夜辺りから碌に食べてなくてさ。ナイスでグッドなタイミングだったんだよな」

その理由は単純にして明快。山城扶桑は純粹に飢えていたのだ。しかし、何故飢えていたのだろうか。それを説明するには、多少時間軸を遡らねばならない。

昨日、七月十七日の夕方。

山城扶桑は学園都市統括理事会のメンバーである貝積継敏かいづみつぐとしのブレインを務める少女、雲川芹亜くもかわせりあの呼び出しに従い、夕食を取らずに出勤していた。

その際に行なった仕事はアメリカ中央情報局を相手取ったスパイ大作戦。

相手が相手だけあり、全てが終わったのは日を跨いだ午前一時過ぎであった。

帰り足に何処かで軽い夕食をと思っていた山城だが、運悪く夜間巡回中の警備員アンチスキルの高速警邏車両に呼び止められること二回。

最終的には貝積発行の夜間外出許可証のお蔭で解放されたものの、確認作業に時間を奪われたため、学生寮に辿り着いたのは午前三時過ぎという有様だった。

無論、夜食を買う暇、食べる暇は共に存在していない。

ならば朝食まで我慢しようと思いつくと泣く泣く午前四時ちょっと前に寢床に入った山城。

しかし、翌朝には華麗な寢坊という現実が彼を出迎えてくれた。朝食を食べる暇があったか、と聞くのは野暮なことだろう。

……と言った具合にずるずると山城は、先程まで食事の機会を失し続けていたという訳だ。

そこに運良く 上条にとっては運悪く 舞い込んでいたのが、

上条が支払い持ちの昼食会だったのである。

「つまり、上条さんにとってはバッドでアンラッキーなタイミングだった訳ですね。分かります……不幸だ」

僅かに残った幸せすら吹き飛ばしてしまいそうな勢いの溜め息を吐く上条。

その姿に山城の胸中に、今更ながら罪悪感が湧き上がる。

（流石に六千円は食い過ぎたか……今度はこっちから何か奢るか）

内心そう決意した山城は、取り敢えず上条を励ます作業を開始した。

「えーと……」

花柄のついたピンク色の小さな鞆を肩に掛けた小学校低学年くらいの少女が第七学区を歩いていた。

少女は地図を片手にきよろきよろと辺りを見回す。しかし、彼女が目的としている建物は見当たらない。

「……こまったな」

少女にとって、この辺りは初めて来る場所である。

頼みの綱は手にしている地図一枚。

だが、やはり地図で見るのと実際に見るのでは勝手が違うらしく、少女は既に迷いかけていた。

地図というものは一度でも悪いツボに嵌ってしまつと、何処で道を違たがつたか解らなくなり、余計に混乱してしまう可能性を持つ。

この時の少女は、まさにその一歩手前であつたと言えた。

「あれ？」

しかし、そんな迷子予備軍の少女に一つの幸運が舞い降りる。

地図と風景を照らし合わせるように周囲を見回していた際に、目の前から歩いてくる二人の人影に気がついたのだ。

一人はつんつんと立った髪の毛が特徴的な半袖ワイシャツに黒いスラックス姿の高校生くらいの少年。

そして、もう一人は灰色の半袖ワイシャツに黒いスラックスという出で立ちの同じく高校生くらいの少年。

「あ！ ジャッジメントのおにいちゃん！」

このうち、少女は灰色半袖ワイシャツの少年に見覚えがあつた。

それは昨日、彼女の鞆を探してくれていた“偽”風紀委員ジャッジメントこと山城扶桑であつた。

「え？」

一方、山城は少女の口から発せられた“風紀委員のお兄ちゃん”

という単語が、自身を指していることに最初は気がつかなかつた。

それもそのはずであり、彼はあくまで昨日限りの“偽”風紀委員

なのである。

今日は“偽”風紀委員モードではないし、腕章を身に付けてもいる訳でもない。

風紀委員に間違われる要因など見当たらなかったからだ。

だが、こちらにパタパタと駆け寄ってくる昨日の少女を見て、山城は風紀委員に間違われた理由を納得した。

「えーと、あの子はどちら様で？ つーか、山城って風紀委員だったのか？」

「あの子は知り合いだ。それと話すとき長くなるから省くが、少なくとも俺は正規の風紀委員じゃない」

だが、山城と違い、状況を飲み込めていない上条は頭に複数の疑問符を踊らせる。

その上条の疑問に手短に答えた山城は、走り寄ってくる少女の視線と同じになるように屈みながら、彼女に声をかけた。

「昨日の鞆の子か。こんにちは」

「きのうはありがとう、おにいちゃん！」

「どういたしまして、っと……お、今日はしっかり持ってるみたいだな」

山城は少女が昨日の鞆を身に着けているのを確認すると、顔を綻ばせながら言う。

それに答えるように、もう絶対に無くさないんだもん、と少女は小さな鞆を大事そうに胸元に掲げた。

その意気なら大丈夫だ、と山城は少女の頭を優しく撫でる。

傍目見れば、仲の良い兄妹に見えたかもしれない。

ちなみに上条には実際にもそのように見えていた。

「そういえば、今日はこんなところでどうしたんだ？」

少女の頭を撫で終えた山城だが、新たに湧いた疑問を口にする。

「あ、えつとね、ふくやさんをさがしてるんだけど……ばしよがよくわからなくて」

「服屋？」

「ここにかいてあるおみせなの」

山城の言葉に少女が手にしていた地図を山城に差し出す。

その地図を山城は受け取ると、目を通し始めた。

隣の上条も気になったのか、山城の持つ地図を横から覗き込む。

地図には学園都市の学区の中でも、航空宇宙開発の拠点となっている最大の第二十三学区と並ぶ面積を持つ第七学区のうち、山城達が今現在居る場所の周辺……第七学区有数の商業区画が図示されていた。

そして、後から手書きで付け足されたらしい赤い丸が地図上に描かれた一つの店舗を囲んでいる。

ここが彼女の目的地のようだ。

「……えーと、《セブンスミスト》？」

二人はほぼ同時に店名を読み上げた。

「なるほど。ここに行きたいのか」

「うん！ テレビでオシャレなひとはそこにいくってやってたの！」

山城の言葉に少女は元気に頷く。

それを確認した山城は、自身の胸をトンと握った拳で叩いた。

「よし、それなら俺達が案内するでしょう。当麻、スマンが付き合ってくれるか？」

「ああ、いいぜ。特に用事も無いからな」

こうして、二人の少年は小さな少女のエスコートをこなうこととなった。

「そつえば、ジャッジメントのおにいちゃんはきょうもおしごと？」

「え？ ああ、えーっと、昨日が特別だったというか何と云うか…  
…ははは」

そんな会話がゲームセンターの店頭にあるクレイニングゲームを興じ



ていた眼鏡の少年の耳に届いた。

携帯音楽プレイヤーのイヤホンを耳に付けていた少年だったが、耳に届いた会話はすぐ近くで行われたらしく、聞き取ることが出来たらしい。

その会話に含まれていた“風紀委員”という単語に少年は反射的に後ろを振り返る。

すると、彼のすぐ後ろを二人の男子高校生と小学生らしき少女と並んで通り過ぎていった。

様子から察するに、腕章は付けていないようだが、風紀委員の少年は半袖の灰色ワイシャツを着た男子高校生の方らしい。

眼鏡の奥にある少年の瞳が、愉悦で細められる。

……今日の狙いはアイツだ、と。

少年は黒い手袋を嵌め、先程まで興じていたクレーンゲームの戦利品……相撲取りのような格好をした蛙の縫いぐるみを取り出し口から取り出す。

それを片手に持ち、少年は直ぐ様に三人を追い掛ける。

折角の獲物を逃がす訳には行かない。

そして、三人を尾行し始めてから間も無く。

少年は三人が消えた建物の前で足を止め、その建物を見上げた。

学園都市では、比較的有名な《セブンスミスト》と呼ばれる大手服飾チェーン店。

その第七学区支店の姿が、少年の目に焼き付けられていた。

(皆、まとめて吹き飛ばしてやる)

逸る気持ちに導かれるままに店内に入ろうとした少年であったが、

その直後、ふと目に入ったある物に再び足を止める。

少年の目が捉えたのは、とある腕章。

三人組らしい少女達の一人。花をあしらった髪飾りを身に付けた少女の腕にある風紀委員を示す腕章であった。

「ククク……」

その少女達が《セブンスミスト》店内に入っていく光景を見送った少年の顔には、笑みが浮かんでいた。

いや、笑い崩れていたが正しいだろうか。

（スゴイツ！スバラシイツ！）

不気味に笑い崩れる少年は胸中で狂喜する。

憎き無能な風紀委員が、のこのこと二人も。

これは神が自分にくれた新しい世界を作る大好機チャンスに違いない。

狂気に酔う少年はそう信じて疑わなかった。

もし、この場に相手に触れずに心を読み取れる高位の読心能力者サイコメトラが居たのなら、彼の思考を読み取った瞬間に警備員アンチスキルに通報していたに違いない。

だが、生憎この場には少年を止めるものは何一つ、誰一人として存在しない。

そして、少年……かいたび はっや介旅初矢は今度こそ逸る気持ちに導かれるままに、少年達と少女達の後を追って《セブンスミスト》店内へと消えていった。

第九話（前） とある事件の虚空爆破（グラビトン）（後書き）

感想・評価・意見は随時お待ちしております。

第九話（中）（前書き）

またまた長らくお待ちいたしました。第九話（中）になります。  
どうぞ、お楽しみください。

## 第九話（中）

《セブンスミスト》とは、豊富な品揃えとお手頃価格を武器に学園都市でも最大手に上り詰めた複合服飾販売店の名称である。

お洒落はしたいが、常に懐と相談せざるを得ない学生達に対し、品揃えと価格の両面で応えるこの《セブンスミスト》の人気は高い。そのため、支店の一つである第七学区支店は今日も学生達で賑わいを見せていた。

そして、その賑わう店内の一角。

友人の初春飾利と佐天涙子と共にここを訪れていた御坂美琴は、視線を釘付けにされたまま惚けたように立っていた。

(……)

洋服店の店内で視線を釘付けにするものと言えば、順当に考えれば服であろう。

現にトリップ一歩手前にしか見えないキラキラと輝く美琴の瞳は、展示された一つの寝間着に向けられている。

夏らしい半袖。生地の色はピンク。

柄は大小散りばめられたカラフルな花柄。

裾にはヒラヒラとしたフリル付き。

一言で表すなら、まさに“少女趣味の塊”。

それが学園都市が誇る超能力者（レベル5）の第三位たる《超電磁砲》、御坂美琴の心を射止めた寝間着の一般的な視点からの評価であった。

だが、同時にそういうものに目がない人間にとっては実に魅力的

な品と言える。

美琴の場合は、間違いなく後者に当たるだろう。

「ねえねえ、これすっごく可愛い……」

しかし、大多数は一般的な視点……つまり、前者の見解を持つに  
違いない。

これは初春と佐天という美琴の友人達にも当て嵌まった。

「うわー…見てよ初春、このパジャマ。こんな子供っぽい今時着  
る人居ないよねー」

「小学生の時くらいまではこういうの着てましたけど、流石に今は  
……」

故に嬉々と隣に立つ友人達に同意を求めようとした美琴の言葉は、  
佐天と初春が順に発した評価の言葉に遮られる。

その評価は発した本人達の意図しないところで、美琴の心を貫く  
強力な徹甲弾へと姿を変えた。

二発の徹甲弾は美琴の心を続け様に穿ち、撃ち抜かれた美琴は顔  
を引き攣らせながら、寝間着に向けていた人差し指を力無く下ろす。

「そ、そうよね！ 中学生にもなってコレは無いわよね！ うん！  
無い無い！」

「「？」」

どうやら美琴は遅時きながらに自らの迂闊さに気がついたらしい。  
彼女の隠れた 隠しきれているかはかなり微妙だが 少女趣  
味。

それは学生寮の同じ部屋で暮らすルームメイトで御坂美琴至上主義者な白井黒子（しらいくろこ）ですら、若干引くという筋金入りの代物である。

ならば、それ以外の人間がその事実を知った時の反応など想像に難くない。

故に徹甲弾の荒療治で多少冷静になった美琴は、慌てて場を取り繕うことで事態の隠蔽を図ったのだ。

幸いにもこれは功を奏し、初春と佐天の二人は美琴の妙な反応に首を傾げつつも追求することは無かった。

「あ、私ちよつと水着見てきます」

「ああ、水着ならあつちにありましたよ」

「本当？」

少々奇妙な沈黙が続いたのだが、その間にここを訪れた目的を思い出した佐天が美琴に一言断ってから移動を始めた。

そして、この常連であるらしい初春は、佐天の言葉を聞き、彼女の案内へと赴く。

（……いいんだモン。どうせパジャマなんだから、他人に見せる訳じゃないし）

一方、美琴はそんなことを考えながら、奥へと向かった二人の様子をちらりと横目で窺う。

と言うのも、美琴は根本的には諦めていなかったのだ。

何を諦めていなかったのかと言うと、あのファンシーな寝間着を着てみたいという思いを、である。

先程は取り繕うためにああ言ったものの、寝間着が美琴の琴線に触れたという事実が変わりはない。

美琴はもう一度、気取られぬよう横目で二人の方を見た。すると、佐天と初春がやや離れた位置にある水着コーナーで二人仲良く水着を見ている光景が確認できる。

こちらの方を見る気配は無い。ならば、今が好機だ。チャンス

(よし、今のうち……一瞬合わせてみるだけだから！)

内心決意してしまえば、後の彼女の行動は電撃使用エレクトロマスターの名に恥じぬ迅雷の如き速さで行われた。

並べられていたピンクの寝間着の一着をさっと手に取り、近くにある姿見の前にざっと移動する。

傍目見れば拳動不審極まるが、そこに突っ込んではいけない。

美琴にとっては、そんな些細な事よりも自身にこの可愛い寝間着が似合うかどうかの方が重要なのである。

「んー…似合ってるとは思いますが、夏場に暖色のピンクは暑くないか？」

「え？ ……そう言われてみると」

そして、その重要な案件に関する横からの声に美琴は姿見の中の自身を凝視した。

確かに今は夏場である。暑苦しい気分になってしまふ暖色は避けの方が良い気がしないでもない。

しかし、折角見つけた可愛い寝間着を手離すのも惜しい。

だが、やはり暑苦しい気分になるのは避けたい。

そんな葛藤が美琴の中に巻き起こった。

「ほら、こっちのを試してみたらどうだ？ 色合的に涼しげだと



思ひぞ」

その美琴の葛藤に切り込むような言葉と共に、美琴の手に一着の寝間着が手渡される。

葛藤していた美琴は特に気にせずそれを受け取り、同じように姿見で自身と合わせてみた。

「あ、これ可愛い……」

結果、彼女の琴線は再び揺れることとなる。

手渡されたのは白を基調に、水色の肉球を模した絵柄で飾った寝間着であった。

夏場に似合う涼しさを醸し出す白と水色の色合い。

加えて、柄である大小の肉球プリントの可愛さは美琴のツボをしっかりと抑えている。

先程の寝間着とはアプローチの仕方こそ違うものの、美琴のストライクゾーンを捉える逸品と言えた。

「これにしようかな」

「即決して良いのか？」

「気に入ったから良いのよ。私が着るパジャマなんだし……ッ  
!?!」

そこで漸く美琴は“気がついた”。

次の瞬間には、瞬間湯沸し器になったかのように一気に顔が真っ赤に染まる。

その顔の紅潮が完熟トマトといえる状態まで達した直後、美琴はその場からまるで猫のように勢い良く飛び退いた。

「な、ななな、何でアンタがここに居んのよ！」

ズビシツ！という擬音が聞こえてきそうな勢いで、美琴はある方向に人差し指を突き付ける。

ちなみに羞恥に染まった恨めしそうな視線もセツトだ。

「いや、用事があって来てたんだが……」

そして、その人差し指を突き付けた方向。

そこには美琴の猫じみた反応に若干驚きの顔を見せている山城やましろ扶桑ふそうの姿があった。

「よ、用事って、このフロアは女物の……」

「ジャツジメントのおにいちゃん！」

次なる言葉を繰り出そうとした美琴であったが、山城の方に誰かが駆け寄ってくるのが見えた。

その人物は小学生低学年くらいの少女。

美琴はその少女に見覚えがあった。

「あ、トキワダイのおねえちゃんだ！」

「ああ、鞆の……もしかして、用事って、この子？」

昨日の偽風紀委員ジャツジメントの件で知り合った少女の思わぬ登場に驚きの声をあげた美琴は、隣に立つ山城に確認を行なう。

対する山城の答えは肯定であった。

「まあ、そんなところかな」

「あのね、おにいちゃんたちにつれてきてもらったんだ。わたしもテレビのヒトみたいにな、おようぶくでオシャレするんだもん！」

「そうなんだ。今でも十分お洒落で可愛いわよ」

山城の言葉の後に、少女はにこにここと無垢な笑みを浮かべながら言う。

その様子に美琴は思わず顔を綻ばせ、少女の頭を撫でた。

「ところで、連れてって……他にも誰か居るの？」

「ん？ ああ、それはだな ……」

「山城、ここに居たのか」

「… 丁度良いタイミングで登場したコイツだ」

美琴の問いに山城が答えようとした矢先、くだん件の人物……かみじょうとつま上条当麻が姿を現したため、山城は片手で彼を示す。

上条は山城が誰を相手に話しているのか首を傾げながら歩み寄ってきたが、美琴の姿を確認するや否や顔を引き攣らせた。

「げっ、ビリビリ中学生」

「アンタか……ビリビリ言うなって言ってるでしょうが」

普段の美琴なら上条の失言が耳に届き次第、脊髄反射とばかりに電撃を見舞っていただろう。

しかし、今回は少女が近くに居たため、彼女はしっかりと自制した。

尤も百獣の王も全力で逃げ出しそうな怒気を電撃の代わりに上条へ放ってはいたが。

「い、今の失言は私が全面的に悪いです。はい」

流石の鈍感上条でも放たれる凄まじい怒気は感じ取れたらしく、渾身の謝罪を実施する。

だが、自制したが故に電撃という形で手っ取り早く鬱憤を発散出来なかった美琴の怒気は治まらない。じっとりとした視線を上条に送るだけだ。

結果、一番効果的と思われた謝罪の選択肢を使用した上条は残る行動コマンドを試す余裕も作れず、おろおろとする他は無い。

「ねえねえ、おにいちゃん。あっちみたい！」

そのままずつとおろおろしていると思われた上条であったが、唐突に彼のワイシャツの裾が少女の言葉と共に引つ張られた。これが少女の意図しないところで上条への助け舟となる。

「え？ ……おお、分かった。それじゃ山城、俺は先に行ってるぞ」

渡りに船とばかりにその助け舟にしがみ付いた上条は山城に先に行く旨を伝えた後、少女の手を引き、そそくさと奥の方へと歩き出す。

見事な逃げ足……もとい、戦術的撤退だ。

そんな上条を美琴は半目で睨み付けるように見送る。

「じゃあね、おねえちゃん！ バイバイ！」

「ん、バイバイ」

だが、そんな美琴も手を振る少女には優しげな視線を向け、小さく手を振り返した。

「うーん……不幸って、失言率も上がるもんなのかな」

一連のやり取りを横から見ている山城は感心したようなそつでなような表情で呟く。

「何を妙なこと言ってるのよ、アンタは」

山城の呟きが聞こえていたらしい美琴が、山城の方を振り返る。

上条に対しての怒りを引き摺っているのか、それとも先程の山城本人とのやり取りの方を根に持っているのか、やや言葉に棘が残っているように思える。

「まあ、そんなことは良いわ。それよりもさっきの事は黙ってなさいよ。良・い・わ・ね・?」

どうやら後者の方であったようだ。顔が少しだけ赤い。

ただし、羞恥の赤だけではなく、上条との不完全燃焼分も混じった怒りの赤も多少混じっているらしく、パチパチと極めて不穏な音が美琴の周りから聞こえてくる。

「わ、分かった分かった。俺は何も見てないし、何も言わない」

流石の威圧感に山城は穩便に済ませることを選択する。

故に彼は後退りつつ、美琴の要請　と書いて脅しと読む　を

受け入れた。

「えーと、それじゃ俺も二人を追い掛けないと」

そして、より後ろに後退っていた右足を基点に回れ右をして、山城は上条と少女の立ち去った方向に駆け出す。

こちらにも上条に負けず劣らずの逃げ足……否、戦術的撤退術である。

あっという間にその姿は見えなくなってしまった。

「……ハア」

それを見送った後、美琴は小さく溜め息を吐く。

どうもアイツ等が相手だと、調子を狂わされることが多い。

しかも、それぞれで質が違うのだから対処に困る。

そんなことを考えながら、上条が来た際に咄嗟に後ろ手にして隠していた寝間着に視線を落とす。

どさくさに紛れて山城が手渡してきた白地に水色の肉球プリントの寝間着だ。

(どうしよう、これ)

悔しいことだが、やはり可愛い。

だが、山城が選んだものだと考えるとやはり悔しい。

しかし、それでも可愛いことには変わりはない。

買うべきか、買わざるべきか。

結局、その美琴の葛藤は初春と佐天が戻ってくるまで続けられることとなった。

「あれ？ 当麻、あの子はどうした？」

その頃、美琴から無事に逃げ果せ<sup>おち</sup>、上条と合流した山城は疑問の声を発していた。

と言うのも、合流した上条の隣に少女の姿が無かったのだ。

「ちょっとトイレに行ったよ」

「！………そうか」

上条の話を聞き、山城が僅かに顔色を変える。

彼の記憶の片隅にある原作知識が、頭の中で警鐘を鳴らしていた。このまま少女を一人にしてはいけない、と。

「どうかしたのか？」

「実は俺もトイレに行きたくてさ。ちょっと行ってくるから、行き違いであの子が戻ってきたら頼むよ」

手短かに上条に告げると、山城は踵を返した。今ならまだ間に合うはずである。

……あの少女を巻き込ませる訳にはいかない。

山城はそんな思いを抱きながら、その足を速めた。

妙な形のアルミニウムの破片。

中途半端に折れたアルミニウム製のスプーン。

爆発で焼け焦げた縫いぐるみの残骸。

「……ハア」

それらが置かれているのと同じ机の上に腰掛けていた白井黒子は、深い溜め息を吐く。

風紀委員第一七七支部が僅かに確保できた連続虚空爆破事件の証拠物件達。

だが、精々材質がアルミニウムであったり、中にアルミニウム片が仕掛けてあったという共通点しか無く、読心能力者が調べても何も感知出来なかったため、その証拠としての能力は芳しくない。

結果として、捜査進展状況はまるで牛歩。これでは本当に溜め息しか出ない。

「もしかして、手口は同じだけど同一犯じゃない……とか」

「まさか」

黒子と同じく証拠物件を前に考え込んでいた固法美偉が閃いたかのように推理を口にするものの、黒子はそれをばっさり切り捨て



る。

「……言ってみただけ。あまりにも関連性が見えないから」

尤も言った本人もあまり良い推理とは思っていなかったようだ。

と言うのも、既に爆発の威力は大能力者<sup>レベル4</sup>の半ばに近い。

そんな強度<sup>レベル</sup>の能力を持ち、さらには書庫<sup>バンク</sup>から漏れているような人物が、複数も居ては堪らないだろう。

「急ぎませんと、また次の犠牲者が出るかもしれませんわ」

「せめて手掛かりを見つけないと……同僚が九人も負傷しているし」

固法の言葉に黒子は内心頷く。

確かに現状では、捜査そのものが雲を掴むような状態なのだ。

何らかの行動パターンや犯人の目的に繋がるような手掛かりは必要である。

しかし、その手掛かりが得られぬまま、この場で頭を捻っているのも事実。

そして、連続虚空爆破事件に巻き込まれ、負傷した風紀委員も九人を超えているのだ。

捜査は進まず、人的被害は増えている。

いい加減、胸中に湧き上がってくる焦りの気持ちを抑えることが難しくなっていた。

(とはいえ、やはり捜査に焦りは禁物ですの)

だが、黒子はそう思い直し、手にしていたマグカップを傾け、中の紅茶ごと焦る気持ちを含み込む。

……そこで黒子はたと気が付いた。

「……九人？」

ぼつりと呟く。

連続虚空爆破事件が始まったのは、ここ一週間の話だ。

最初こそ悪戯のような規模であったが、さらにここ数日で急速に殺傷能力を帯びてきている。

そのため、避難誘導に駆け付けた風紀委員の被害者が増えてきていた。

理屈としては分からないでもない。

だが、それにしても。

それにしても、である。

「ん？　どうかした？」

「幾らなんでも多すぎませんか？」

あまりにも“多い”のだ。

風紀委員の被害者の数が。

黒子の言葉が場に水を打ったかのような沈黙を齎す。

しかし、その沈黙の裏でバラバラであったはずのピースが組み上がったような感覚が二人には感じられた。

「！　まさか、ターゲットは！」

そして、その答えに二人が辿り着いた時、机上に置かれていたノートパソコンが激しい警報音を室内に撒き散らした。

ここ数日で嫌と言うほど聞き慣れてしまった警報音に、二人は半ば条件反射的にノートパソコンの画面に目を向ける。

「衛星が重力子の加速を確認！」

「えっ!?!」

警報音と共に画面に表示された情報。

それは学園都市が保有する監視衛星の一つが観測した重力子の異常加速……すなわち、虚空爆破による爆発の前兆であった。

「観測された場所は何処なんですか!?!」

「第七学区の洋服店……《セブンスミスト》の店内よ! すぐに警<sup>アン</sup>備員<sup>チスキル</sup>に出勤を要請するわ!」

黒子の問いに答えながら、固法は次々に更新される情報ウィンドウから必要な情報だけを選び出していく。

どうやら観測されたのは比較的初期の加速であり、爆発直前の終末の加速では無いようだ。

しかし、加速が進めば、やがては限界に達する。

その前に手を打たねばならない。

「分かりましたわ! 私は取り敢えず、初春を呼び戻しますの!」

懐から携帯電話を取り出しながら、黒子は言った。

現在、第一七七支部内には彼女と固法しか居ない。人手の確保は急務である。

アドレス帳から初春の電話番号を選ぶと、黒子は電話を掛ける。そして、数コールの後、初春がその呼び出しに応えた。

『はい。もしも……』

「初春！ 虚空爆破事件の続報ですの！」

焦りからか意図せぬ大声が出たが、黒子はそれに構わず、話を続ける。

「学園都市の監視衛星が、重力子の爆発的加速を確認しましたの！」

『か、観測地点は……』

「今、近くの警備員を急行させるよう手配していますの！ 貴方は速やかにこちらに戻りなさい！」

『ですから！ 観測地点を！』

黒子の一方的な言葉の雨を前に一度質問を遮られた初春だが、語気を強め、再度黒子に問い掛けた。

「第七学区の洋服店、《セブンスミスト》ですの！」

『……《セブンスミスト》？』

黒子の答えに電話口の向こうの初春は、確認するように単語を呟いた。

第七学区。洋服店。《セブンスミスト》。

何れも先程まで見聞きしていた単語ばかりだ。  
だが、それもそうであろう。

『丁度良いです！ 私、今そこに居ます！ すぐに避難誘導を開始  
します！』

彼女が居たのは、まさにその現場セブンスミストなのだ。

“好都合”。何も知らぬ初春はそう感じただろう。

「初春！？ もしもし？ もしもし！？」

しかし、“知っている”黒子にとって、電話口の初春が放った言葉は“最悪”のものであった。

黒子は慌てて携帯電話に呼び掛けるが、初春は既に通話を切ってしまったらしく、黒子の耳に返ってくるのはツーツー、という虚しい電子音だけだ。

「何ですって……」

「初春さん、どうかしたの？」

啞然と通話の切れた携帯電話を凝視する黒子。

その様子にただならぬものを感じた固法が黒子に問い掛ける。

「……初春が《セブンスミスト》に居るらしいんですの」

「ええっ！ ちょ、ちょっと、それって、まさか！」

黒子と同じく“知っている”固法は焦りの色を顔に浮かべる。

先程、二人が導き出した連続虚空爆破事件の一つの関連性と予測。それが黒子と固法の焦燥に繋がっていた。

「あの予測が正しければ、恐らく次のターゲットは……」

すなわち、避難誘導に駆け付けるであろう“ 犯行現場周辺の風紀委員”を狙った犯行、という予測。

そして、この予測が当たっているのなら、今回の標的は《セブンスミス》に居る風紀委員……初春飾利である可能性が高い。

最早、状況は別の意味でも一刻を争うものになりつつあった。

「固法先輩、私は《セブンスミス》に向かいますわ！」

「分かったわ。他の部署への連絡は私の方から……！ 白井さん、ちょっと待って！」

固法の了解を得たため、文字通り飛んで《セブンスミス》に向かうべく、レポート空間移動の演算を開始しようとした黒子を固法は呼び止めた。

「監視衛星からの続報よ。重力子の加速が鈍化……いえ、停止したらしいわ」

「えっ！ まさか爆発してしまったんですの!？」

「それとは違うみたい。爆発の時に見られる重力子の拡散は無いのよ」

一体どうということなのだ、と黒子は黙考する。

爆発はしていないが、重力子の加速は治まった。  
今まではない事例。  
それが黒子の困惑を誘った。

「犯人側に何か予期せぬ事が起こった可能性もあるわ。……兎に角、今のうちに《セブンスミス》に向かって頂戴」

「了解ですの」

しかし、どちらにせよ、現場には向かわねばならないだろう。  
一度でも重力子の加速が観測されたのは事実。犯人が周囲にまだ残っている可能性があるのだ。

黒子はそう思い直すと、それまでの思考を止め、代わりに空間移動の演算を再開した。

第九話（中）（後書き）

感想・評価・意見は随時お待ちしております。



## 第九話（後）（前書き）

前回以上に間を空けてしまいました。  
お待たせしてしまい、申し訳ありません。

それでは、どうか完成した第九話（後）をお楽しみください。

## 第九話（後）

ピツ、と初春ういはる飾利は携帯電話の終話ボタンを押した。

その表情は既に普段の柔和な女子中学生のものではなく、学園都市の治安維持を担う一翼、風紀委員ジャッジメントのものへと変化している。

全ては先程までの電話相手、白井黒子しじくろこから、彼女に齎もたらされた知らせが原因だ。

「落ち着いて聞いてください。犯人の次の標的が分かりました」

携帯電話を仕舞いながら、背後でこちらの様子を窺っていた二人の友人……佐天涙子さてんるいこや御坂美琴みさか みことの方を振り返った初春は、風紀委員としての使命感から来る芯の通った声色で現在の状況を告げる。

初春に齎された知らせ。

それは近頃、学園都市を騒がせている連続虚空爆破事件クラヒトンの兆候、重力子の異常加速の情報であった。

警備員上層部アンチスキルが一連の犯行に対し、爆発の予備動作の一つであるこの異常加速を察知する目的で、学園都市保有の監視衛星を投入した話を彼女は合同対策会議の場で聞いていた。

能力者という特異な存在を内含する学園都市は、監視衛星一つを取っても様々な観測機器が搭載されている。

その中に重力子の観測機器が含まれていたのは僥倖だろう。

お蔭で監視衛星投入からここ数日は、風紀委員や警備員が爆発前に現場に急行し、避難誘導を行なうことが可能になっているのだ。

そして、今回も漏れ無く兆候は観測された。

観測地点は第七学区の複合服飾販売店アパレルショップ《セブンスミスト》。

初春には聞き覚えのある店名だ。

「……この店です」

だが、それもそのはずだろう。

彼女は今まさにその店内に居るのだから。

「御坂さん、すみませんが避難誘導に協力してください」

矢継ぎ早に初春は言う。

異常加速が観測されたと言うことは、同時に爆発まで猶予が然程無いと言うことでもある。

このような場合、人手はなるべく多い方がよい。それも万が一の場合に自分の身を守れる高位の能力者が望ましいだろう。

初春が協力を要請した御坂美琴は、まさに条件に合致した存在と言えた。

「わ、分かったわ」

最初こそ驚きの表情を浮かべて硬直していた美琴も、持ち前の頭の回転の速さで状況を瞬時に理解していた。

この状況で否という選択肢は彼女の中には存在しない。

「佐天さんは避難を」

「あ……うん。初春も、気を付けてね」

美琴の協力を取り付けた初春は、次に佐天の方を向き、手短に伝える。

何か言いたげな表情をしていた佐天であったが、僅かな沈黙を挟み、初春の言葉に従う。

「じゃあ、店員さんに状況を伝えないと行けないので、御坂さんも一緒に」

「了解」

これで後顧の憂いは無くなった。

初春は次なる行動をするべく駆け出し、美琴がそれに続く。二人の姿はあっという間に店の奥へと消えていった。

「……私はお呼びじゃない、か」

そんな二人の後姿を見送った佐天は、ほんの僅かに溜め息を吐くと店外へ足を向けた。

私にも何か手伝えれると思っただけだな。

佐天の寂しげな呟きは、直後に流れた電気系統の故障を謳う店内放送に掻き消された。

「ちょっと待ってくれ」

背後から聞こえてきた声に、非常階段を下っていた介旅初矢は身体を硬直させた。

今、彼が居るのは《セブンスミスト》の階段室。そこに設置され

ている非常階段の踊り場だ。

より使い易いエスカレーターやエレベーターが完備された《セブンスミスト》では、あまり利用されることが無く、人通りも滅多に無い空間である。

そこで突然、背後から声をかけられれば、驚いても仕方が無いと言えた。

「ぼ、僕のことですか？」

だが、介旅の反応は単に突然声をかけられて驚いた、というものにしては、些ちかか不自然なものであった。

具体的に言うなら、まるで自身の疚しい行為が誰かに露見したのでは無いか、と恐れているような、そんな反応だ。

「そうそう、ちょっと落とし物の返却にな」

恐る恐ると振り返った介旅の目が彼を呼び止めた人物の姿を捉える。

灰色の半袖ワイシャツに黒いネクタイ、同色のスラックスという出で立ちの同年代と思われる少年。

介旅はその人物に見覚えがあった。

それはこの店に入る切っ掛けともなった風紀委員らしき少年だったのだ。

「これ、アンタのだろ？」

階段上に屹立する風紀委員らしき少年、山城扶桑やましろう ふうそうはそんな台詞を介旅に投げかけた。

「……落とし物？」

「これだよ。これ」

一体何のことだ、と言いたげな表情の介旅に、山城は手にしていた縫いぐるみを示す。

廻しを巻いた相撲取りのような格好をした、一体どんな客層を狙ったかが全く不明な縫いぐるみ。

しかし、その縫いぐるみも介旅には見覚えがあった。

何故なら、それはほんの数分前までそれは彼の手元にあり、“仕込み”の後に手放したものだ。だからだ。

「あ、ああ、それですか？ あの女の子から受け取ったんですね？」

少し前、介旅は山城の手にある縫いぐるみを一人の少女に手渡していた。

落し物だから風紀委員に渡してほしい。そのような真つ赤な嘘を添えて。

「それは落し物みたいなんで、風紀委員の人に渡してくれるようにあの子に頼んだんです」

あくまで怪しまれないように、自然を装って対応する。

どうやら、目の前の風紀委員（まじ）は何か勘違いをして、自身を追ってきたらしいと介旅は判断した。

ならば、さっさと誤魔化し、立ち去ってしまえばそれまでである。

「そうなのか？」

「ええ、そうですよ」

山城が確認するように介旅に問い返す。  
それは何処か訝しむような語調だったが、勘違いを続けているの  
だろうと介旅は決め付けた。

「……分かった。“それなら落とし主が取りに来るかは別にして、  
これは預かっておこう”」

「早く落とし主が見つかるように願ってますよ。……では、僕はこ  
れで。何かお店でトラブルがあったみたいです」

誤魔化し切れた。内心で介旅はほくそ笑む。

一瞬ひやりとしたが、やはり風紀委員は皆、誰も彼も肝心要の部  
分で無能になるらしい。

胸中の唾いが表に出ないよう、介旅は平静を装いながら踵を返し、  
階段を下ろうとする。

キーン。

その背中に金属製の何かを指で弾いたような音が届いた。

「まあ、でも、“こっちの物騒な落とし物は返すよ”」

次の瞬間、目を大きく見開いた介旅は、弾かれたように振り返る。  
だが、山城を捉えるはずだった彼の視界は先に別のものを捉えた。

くるくると回転しながら迫る、銀色の丸みを帯びた皿状の見慣れ  
た金属片。

「う、うわあああああッ！」

迫ってくる銀色の金属片が、アルミニウム製のスプーンの欠片と

認識した刹那、介旅は悲鳴を上げながら頭を抱え込み、その場に蹲つすくまった。

傍目見れば、スプーンの欠片相手に何をしているのだ、と思うかもしれない。

尤も、そう思った人間の果たして何割が、そのスプーンの欠片が重力子の加速と拡散による強力な破壊を撒き散らす爆弾だと知っていて尚、同じことを言えたのかは定かではないが。

カキン、と蹲った介旅の頭上を飛び越えたスプーンの破片が、床にぶつかる澄んだ金属音が響いた。

最早、介旅には破滅の音にしか聞こえない。

無造作に放り投げられた繊細で強力な爆弾が、勢いそのままに地面とぶつかればどうなるか。それは答えるまでも無いことだ。

「重力子の加速情報は止めてある。それはもう種も仕掛けも無い単なる折れたスプーンだよ、爆弾魔さん」

しかし、介旅が同時に襲ってくるかと恐れた閃光や轟音を伴った破壊は、いつまで経っても襲ってはこなかった。

代わりに襲ってきたのは、俄かには信じがたい答え。

それはいつの間にか踊り場まで下りていた山城が、スプーンの欠片を拾い上げながら放ったものであった。

「……止めた？ 馬鹿な！ 僕の最大出力だぞ！」

思わず身を起こして吼える介旅。

簡単に言ってくれるが、あの爆弾はある道具により、今や大能力者級ル4となった介旅の《量子変速シンクロトロン》で作り出したものである。

仮に正面から解除しようとするなら、少なくとも同程度か、それ以上の能力行使が必要となるのだ。



それを解除したなどと、そうそう信じられるはずが無かった。

「ほう、爆弾魔の部分は否定しないんだな？」

「え？ あ、いや……」

だが、その叫びは同時に墓穴へと繋がる。

最早誤魔化し様もない、言質という名の決定的な墓穴に。

介旅は再び色を失う。

先程吼えた威勢は何処へやら。だらだらと湧き出す嫌な汗が、自身の身体を蒼白に塗っている気さえする。

泳ぐ視線が状況を打開する妙案を探すが、そんなものが都合良く転がっているはずも……

(！)

…… あった。

蹲った拍子に床に転がっていた介旅の肩掛けバッグ。

そのファスナーの隙間から覗いていたアルミニウム製のスプーンを、介旅の目が捉えた。

ここで改めて確認しておくが、介旅初矢の能力は本来、相手と接近している状況には向いていない。

どうしてかと言うと、手順や行程はともかくとして、介旅の能力が最終的に引き起こす現象は“単なる爆発”だからだ。

爆発の規模やタイミングは調整できるが、爆発の範囲内に介旅が居れば、彼自身にも被害が及ぶのである。

しかしながら、完全に追い詰められている介旅にとって、そんな

欠点に目が向かう筈も無い。

気が動転していることも拍車を掛け、闇夜に提灯と言わんばかりに、迷わずそれに飛びついた。

その灯りが死地へ誘うウィルオウイスプだとは微塵も思わないままに。

介旅は即座にフアスナーの隙間から飛び出していたスプーンを右手で引き抜き、能力を込めた。

重力子が干渉に心えて一気に加速を始め、不安定な重力場を生み出す。

そうして、不安定な重力場が臨界を迎える直前 …

「……ッ！ この馬鹿野郎！！」

… 咄嗟に駆け寄った山城がスプーンをもぎ取り、その存在する座標を上書き保存した。

凄まじい閃光と轟音が学園都市の一角に轟いた。

突然の閉店で仕方が無しに《セブンスミスト》を出て、周辺で途方に暮れていた人々にもその凄まじい爆発は目撃される。

場所は先刻まで自分達が居た《セブンスミスト》……の遙か上空。

視力が良く、かつ事前に良く眼を凝らしていたなら、爆発の直前に中空に銀色の何かが出現したのが見えたかもしれない。

だが、もちろんそんな稀有な人間は居らず、ほぼ全ての人間には何も無い空間がいきなり爆発したかのように見えただろう。

黒く揺蕩う煙たゆただけが爆発の名残として中空に残り、喧騒に包まれる人垣を見下ろしていた。

頭上からの轟音を聞きながら、何とか間に合ったか、と山城は安堵した。

まさか路地裏のように開けていないこんな狭い空間で接近している状況でも、自爆覚悟で能力行使をしてくるとは流石に考えていなかったのだ。

それに対して、山城が咄嗟に取った行動はと言うと、座標の上書き保存によるスプーンテレポルトの空間転移であった。

普段何度も使用し、演算の最適化が完了していた空間転移は、あの刹那でも縦軸方向の上書き保存を可能にしていたのである。

結果的に《セブンスミス》上空に出現したスプーンは、山城の狙い通りに落下に転じる前に重力子の加速が臨界を向かえ、エネルギーを周囲に撒き散らしたようだ。

爆発で生じるエネルギーは基本的に上方に向かうため、周囲に対する被害は最小限だろう。

山城は溜め息を一つ吐くと、床に崩れ落ちたまま、くつくつと肩を揺らす介旅を注視する。

その傍らに鞆は無い。二次攻撃を防ぐために山城が遠くに蹴飛ば

していたからだ。

「ははっ、いつもこうだ……何をやっても、力のある奴を前にすれば、僕は屈するしかない」

反抗手段を断たれた介旅はそう言いながら、自身を見据える山城を怨嗟の籠った視線で睨み返す。

「……殺してやるッ！ お前みたいなのが悪いんだ！ 風紀委員も不良共も所詮は同じだ！ 弱い奴に力を振り翳して……力のある奴は皆そうだろうが！」

恨み。嫉み。僻み。

ありとあらゆる負の感情を爆発させ、山城に吠えかかる介旅。

「……じゃあ、お前もその力のある奴等とやらと同類なのか？」

「は？」

その鼻っ面に冷や水が浴びせかけられた。

「力を傘にした無差別爆弾テロ。弱い奴に力を振り翳す連中とどう違うんだ？」

「み、妙な事を言うな！ 僕はお前等とは違う！ 自分の身を自分で守ろうとしたただけだ！」

「自分の身を自分で守るのに、風紀委員を爆殺する必要があるとは思えないな。そして、爆殺するために何も知らない女の子を騙して、爆弾持たせる必要は尚更な」

「違うッ！ 僕は！ 僕は……」

告げるべき二の句を、介旅は持ち合わせていない。

山城の言っていることは、力云々以前の単なる正論なのだ。

それまでであれば、その正論も力がある奴が押し付けてくるものだ。と介旅は言うだろうが、自身の行いを改めて客観的に突きつけられた後に同じことを言い続けるほどの愚か者では無い。

介旅初矢はまだ完全には腐り切ってはいなかった。

「……なあ、常盤台の超電磁砲レールガンは知ってるか？」

介旅の首が僅かに動くのを確認しながら、山城は言葉を続ける。

「アイツはさ。元々は低能力者レベル1だったんだ。だが、その後にはひたすらに前を向き続けて、あの位置まで登ったらしい」

本人から聞いた話だ、と山城は付け加える。

実際、原作知識とは別に山城は一度、この話を美琴本人の口から聞いたことがあった。

「まあ、その身の上はともかくだ。……何というか、要するに超電磁砲ルガンは真っ直ぐなんだ。アイツなら例え、低能力者《レベル1》だったとしても、曲がってる奴の前には立ち塞がっただろうな。……強度がどうでもいいとは言わない。ただ、人間として、もっともつと大事な部分があるってことだ」

その言葉で、介旅は項垂れる。

「こんなことするからには、相応に事情があることは分かる。……」

だけどな、少なくともこの方法は間違ってる。それは分かるよな？」

「……」

小さくだが、介旅の首が縦に動く。

「相談事があるなら、後で聞いてやる。だから、今は償って身奇麗になってこい」

山城がそう言い切ったところで、階下から通報を受けたらしい警備員達が階段を上ってくる足音が響いてきた。

警備員所属の高速警邏車両や特殊輸送車両が《セブンスミスト》の周囲に何台も停車していた。

怪我人も無く、店舗への被害も無いため、過剰とも思えるが、連続虚空爆破事件がなまじ巷を騒がせていただけあり、現場検証は念入りに行なうらしい。

ただ、これだけ警備車両が集結していると自然と衆目が集まり、立ち入り禁止とされている店の周辺には既に野次馬による人だかりが形成されている。

「もう、心配しましたのよ？」

その立ち入り禁止に指定されている店の内部。

風紀委員として空間移動テレポートに次ぐ空間移動で到着した白井黒子しらいくろこは、同僚である初春飾利の無事を確認し、安堵の溜め息を吐いていた。

「ごめんなさい。でも、この通り何とも無いですよ」

初春も申し訳無さげに頭を下げた後、無事だったことを喜ぶように言う。

一連の事件が風紀委員を狙った犯行であり、今回の標的が初春自身であったと彼女が知ったのは、避難誘導を終えて、黒子に改めて連絡を取った際のことだ。

もし、介旅の当初の目論見通りに物事が進んでいれば、初春が今頃どうなっていたかは分からないのである。

実際に初春の無事を目の当たりにするまでは、黒子も人心地がつかなかっただろう。

「あれ、黒子じゃない。今来たの？」

「お姉様！ お姉様も無事だったんですね！ お姉さまーん！」

「ちょ、アンタ何を……！」

「あははは……」

初春の安否を確認し、一安心した黒子はどうやら通常運転に戻ったようだ。

同じく事件の関係者ということで事情聴取を受けてきた美琴の姿を見つけるや否や、騎兵も顔負けの突撃を敢行する黒子。

そして迎撃する美琴に苦笑する初春という、いつもの構図がそこにはあった。

「……つーか、三度も同じこと聞く必要性ってあるのかね。いや、無いな」

と、そこへ反語を口にしながら、事情聴取を終えた山城が戻ってきた。

警備員に風紀委員、さらには店の関係者と三種類の事情聴取フルコースを堪能し終えた山城の顔には、うんざりしています、と書かれているようにすら見える。

「あ、お疲れ様です、山城さん」

未だに小競り合いを演じる二人よりいち早く初春が山城に気がつき、労いの言葉をかける。

「ここ最近で事情聴取には無駄に慣れたのが物悲しいな……ところであの女の子は？」

「あの子なら、さつき警備員の方に送られて帰りましたよ。本人が知らなかったとはいえ、爆弾を持たされてたって聞いた時は焦りましたけど……無事で本当に良かったです」

「無事なら何よりだな。初春も怪我とかは無いよな？」

「それならお蔭様で大丈夫です！」

山城の問いに傷一つ無いことを示すため、初春はくるりとその場で回ってみせる。

「なら、安心したよ。えーと、御坂は……問題無さそうだな。そういえば、佐天も居合わせてたらしいけど大丈夫だったのか？」



ついに放電した美琴と真つ黒子とは行かないが、焦げ茶子程度に焼きあがり、地面に倒れ付す黒子を横目に見ながら言う。

「佐天さんも避難してたので無事です。私が現場検証で遅くなりそうなので、先に帰っていただきましたけど……」

店内に設置されている時計をちらりと見る初春。

時刻は五時を少し過ぎたところ。既に日の光も朱色あけいろになる時間だ。

「確かにもう遅いしな……って、拙っ！ アイツを待たせてるんだっつた！」

山城は初春に続くように時計に視線を移し、直後に慌てて携帯電話を取り出す。

友人、上条当麻かみこしやまを外で待たせていたことを思い出したのだ。

事情聴取は思った以上に長引いており、これ以上待たせる訳には行かないだろう。

「スマン。俺は友達待たせてるから、この辺でお暇いとまするよ」

「え？ ちょっと、山城さん！ まだお礼を……」

「気持ちだけありがたく貰っておくよ！ それじゃ、お先に！」

そう言うが早いか、携帯電話で上条を呼び出しつつ、山城は空間転移を行なって、初春の前から消えた。

あつという間の出来事に、初春はぽかんとする他は無い。

「ハア……ハア……黒子の奴、無駄な手間取らせて……って、どう

したの？ 初春さん」

「ああ、いえ、ちょっと山城さんにお礼を言いそびれてしまって」

黒子相手に乱れた息を整えていた美琴が、初春の様子に気がついて声をかける。

それに対して、初春が事情を話すと、美琴は小さく溜め息を吐いた。

「まあアイツはすーっと居なくなるんだから……私も一言言ってきたかったのに」

自身が巻き込まれていた事件を解決してくれたらしい山城に、美琴も感謝の一つは言っておきたかったようだ。

元々義理堅い美琴であるから、こういう形で何も言う前に立ち去られるのは気分的によろしくないらしい。

「ここ数日だけでもかなりお世話になってますし、何かお礼できる機会があればいいんですけど……」

「機会、ね」

それを聞き、美琴は思案げな顔付きになる。

気がついたら居なくなったり、用事が飛び込んできて立ち去るのが山城だ。

これはお礼を言いたい側にとっては、喜ばしいことではない。

それこそ機会でも無ければ……いや、無いのなら作ってしまえば良いのではないだろうか。

「無いなら作るのも手……か」

「へ？」

「ありがとう、初春さん。お蔭で閃いたわ」

「ええっ？ わ、私ですか？」

美琴の発言の意味が分からず、思わず狼狽える初春。

「別に悪いことじゃないわ。安心して」

地面に沈んだままの焦げ茶子を回収しつつ、美琴は初春に言葉を返す。

既に頭の中では計画の骨子が組み上がっていたが、詰めは帰ってから進めることにしたのだ

（普通は無理だけど……私と黒子の二人掛かりなら多分許可が通るはず。そうと決まれば……）

折角作る機会なのだ。此方の本拠地ホームベースを堪能させてあげるとしよう。

この瞬間、学園都市の一般的な男子学生なら垂涎シヅルするであろう計画が、学園都市が誇る超能力者第三位レキスの中で開始された。

## 第九話（後）（後書き）

この話を投稿した後、暫く作品全体の改訂作業を実施したいと思えます。

詳しくは活動報告で触れたため、そちらを見ていただけると幸いです。

これからもどうぞ、とある転生の上書保存をよろしく願います。

一（前書き）

大変長らくお待たせしました。

まだ改訂未了ですが、先に続きが書き上がったので、どうぞお楽しみください。

学園都市には広告飛行船と呼ばれるものが存在する。

それは上空二〇〇メートル程度の低空を飛び、側面に備えた超大型液晶画面にニュースや宣伝広告を映す全金属製飛行船だ。

全金属製飛行船とは二〇世紀初頭にフェルディナント・フォン・ツェッペリン伯爵が確立した硬式飛行船ツェッペリンとは違い、文字通り外殻も外板も全て軽量合金で造られた飛行船である。

耐久性に優れ、悪天候にも強いという利点があったものの、史実においては戦間期にアメリカ海軍が数隻建造して以降、普及することなく潰えた代物だ。

しかしながら、この世界では学園都市が目をつけ、空への復帰を成し遂げていた。

そして、この広告飛行船にはもう一つ特筆すべき技術的特徴がある。それは完全自律飛行の達成だ。

世界の標準からさらに二〇年は進んだ科学技術に物を言わせて建造された広告飛行船は、各学区上空での周回飛行から第二三学区に位置する飛行船係留施設との往復は、全て自動航法装置と制御機器が行なっているのだ。

要するに完全に無人ということであり、飛ぶだけで飛行船史を塗り替え続けているとさえ言われている。

「それにしても、良い景色を見ながら食べると食べ物より美味しく感じると思うが、アレは正しいな。うん」

だが、明日に夏休みを控えた本日七月一九日の昼下がり。

学園都市上空を飛行する、ある一隻の広告飛行船は“有人”であった。

一応、操舵室を筆頭とする人が乗るための空間は存在する広告飛行船だが、前述したように通常業務中は人は乗っていない。であるはずなのに、有人とは一体どういうことだろうか。

疑問の答えは飛行船の上部にある。

少年が一人、そこに胡座で居座っていた。

コンビニエンスストアで購入したらしい冷やしラーメンを至極美味しそうに啜る、その少年の名はお馴染みの山城扶桑<sup>やましる ふそう</sup>。

終業式と学校関連の用事を済ませ、少々遅めながら昼食を満喫している最中であつた。

「今日の冷やしラーメンと昨日の冷やしラーメンは何か違う気がするが……つまりは景色のお陰ですね。分かります」

ふざけ過ぎると粒機波形高速砲に撃墜されるから止めとくか、と独りごちつつ、山城は飛行船上からの景色を満喫する。

座標情報を上書き保存して飛び乗り、夏の陽光で熱されていた金属外板の温度情報を下げ、リアルタイムで学園都市の監視衛星その他を誤魔化し、さらに熱中症防止の目的で照りつける日差しを偏光逸らすという手間が必要であつたが、それと引き換えにこの景色を楽しめるなら安いものだ、と彼は思う。

故にたとえ能力の無駄遣いと言われようと、反省や後悔をする予定は無い。

「ご馳走様でした」

残さず綺麗に冷やしラーメンを平らげ、両手を合わせる山城。

孤児院で過ごしていた頃に習慣化された食事に対する感謝の儀だが、学園都市に来て早三年が経過した今も彼は律儀に行っていた。

と言うよりも、習慣化され過ぎたため、これをしないと食事を終

えた気分にならないという理由もあったが。

……と、山城が食事を締め括るのを待っていたかのように、スラックスのポケットに入れていた彼の携帯電話が鳴り始めた。

その音の種類が電話の着信音だと認識した山城は、手早くビニール袋に容器や割り箸を手早く突っ込む。

そして、ポケットから取り出し、相手の名前を確認する。

「ん、電話か……って、白井？」

開かれた携帯電話の液晶画面には、白井黒子しろいこくろこという名前が表示されていた。

意外な名前であったため、思わず驚く山城。

しかし、これ以上待たせる訳にも行かないと通話ボタンを押し、携帯電話を耳に当てた。

「はい、もしもし。俺だけど」

『もしもし、白井ですの。少しお時間よろしいでしょうか、山城さん』

「別に構わないぞ。どうしたんだ、突然？」

『……ありがとうございます。実は折り入ってご相談がありますの』

「と言いつつ？」

深刻そうな口調の黒子に、山城は問い返す。

『昨日、山城さんが止めてくださった事件は覚えていらっしやいま



す？』

「ああ、セブンスミストの……えーと、公式には連続虚空爆破事件<sup>クラフトン</sup>って呼ばれてたんだっけか」

『そうですね。あの事件、実際に観測された爆発の規模と書庫<sup>バンク</sup>に登録されていた犯人の強度<sup>レベル</sup>に大きな食い違いがありました……』

「……誤認逮捕はしてないぞ？」

『それは承知しています。何より今回だけではありませんの、書庫のデータと被害状況に食い違いがあるケースは。最初は書庫側のデータミスと疑って確認を急いでいたのですが……実は先程、興味深い話を』

黒子はそこで言葉を切り、一拍置いてから口を開く。

『山城さん、幻想御手<sup>レベルアップ</sup>という品物をご存知ですか？』

もしもこの時、黒子が山城の目の前に居り、彼の表情を注意深く見ていたのなら、眉根が僅かに動いたのを見咎めたかもしれない。だが、携帯電話越しで話す彼女がそれに気がつくことはなかった。

「……聞いたことはあるな」

『！ 詳しく教えていただけませんか？』

改めて確認しておくが、山城扶桑は原作知識を持った転生者である。<sup>レベルアップ</sup>

幻想御手がどんな代物で、どのような経緯で出回ったのかも、ど

のような結果を生んだのかも、もちろん知っている。

結論から言うなら、幻想御手事件は単に阻止して万々歳、という類の事件ではない。

確かに悪い結果も生んだ事件だ。しかし、同時に“単純にそれだけ”ではないのである。

故に悩んだし、最終的に選んだ答えも我ながら傲慢だと山城は自照していた。

「いや、聞いたことはあるけど、実物は見た事が無いんだ。スマン」

『……そうでしたか。いえ、了解しましたの』

山城の解答に黒子が少々落胆したらしい事は、彼女の声色から分かった。

対し、山城の胸中は罪悪感に包まれる。

だが、嘘は言っていない。山城はこちらの世界で実際に実物の幻想御手を見た事は無いのだから。

実は一度、予め実物を入手し、情報解析する事で恢復手段の独自構築を思い付いた事があり、後にミイラ取りがミイラになる危険性から断念、その際に音楽ファイル配信サイトを片っ端から回ったの搜索を試みていた。

しかしながら、同種のサイトは学園都市のインターネット上だけでもごまんと存在しており、ついに特定できなかったのだ。

そのため、嘘は言っていない、という訳だ。

『では、話を戻しますわ。その幻想御手に関して、情報を入手する機会を得ましたの。ですが、ここで少し問題が……いいえ、単刀直入に言います。情報を入手するためにお姉様が覆面捜査を買って出ましたわ。わたくしは二重の意味で不安ですの……』

「……白井、まさかとは思うがそれはアレか？」

『暴走したお姉様でも止められそうなお方を、わたくしは山城さん以外に知りませんの。どうか力を貸していただけませんか？』

予め答えを用意していたらしい黒子の口振りに、左様でございませるか、と山城は溜め息交じりに言葉を吐き出す。

つまるところ、万が一に備えた火消しを担って欲しい、という事だろう。

黒子の言い分、そして人選は間違っではない。

お姉様こと御坂美琴は、学園都市第三位に位置する超能力者である。

もし、何らかの理由で彼女が憤怒して我を失うような事態になれば、周りは凄まじい“災禍”に見舞われるのは火を見るよりも明らかだ。

そういった場合に間に入って、彼女を止められる人物を考えると、黒子の知りうる範囲では山城扶桑以外に白羽の立てようが無い。

大能力者<sup>レベル4</sup> あくまで表向きはだが ながら、美琴と渡り合っているのだ。実績としては十分過ぎるだろう。

もちろん、山城が断ってしまえばそれまでなのであるが、

「まあ、そういう訳なら仕方が無いか。引き受けるよ」

溜め息こそ吐いてはいたが、彼に黒子の要請を断るつもりは無かった。

どちらにせよ、時間になり次第、様子を見に行くつもりであったのだ。

『えっ、本当によろしいんですの？』

「なんだ、断れば良かったのか？ なら、残念だがこの話は無かった事に……」

『い、いえ、とんでもないですわ！ むしろ感謝しても仕切れないんですの！』

「そこまで綺麗に焦られると逆に反応に困るんだが……冗談はさておき、引き受けるから詳しい話を教えてくれ」

打ち合わせを終え、日も暮れた数時間後。

山城扶桑の姿は第七学区の Bennys というファミリーストランの中にあつた。

「細工は流々、仕上げは御覧ごらんうじろつてところか」

そう呟きながら、山城は注文した海底二万哩シーフードリアを食べ進める。

黒子から覆面捜査の計画を聞いた山城は、先んじて入店し、あまり目立たないように奥まった席を確保。ついでとばかりに夕食を食べていた。

昼食が遅い時間だったのにも関わらず、がつつりした品目を平然と食べている辺りは流石である。

お陰で傍目見れば、単に食事に来た高校生にしか見えない。溶け込みの度合いは高いと言えるだろう。

ちなみに先程、念のためにさり気無く偵察を実施したところ、目当ての人物達　　ちなみに原作版の顔ぶれであった　　の在店は確認している。

「ターゲット確認の連絡もしたし、後は二人が来るのを……　　と噂をすれば」

ドリアを全て腑に収め、入り口の様子を伺っていた山城の目が、常盤台の制服を着た二人組の女子中学生の姿を捉えた。美琴と黒子である。

それを確認した山城は見つかっては元も子もないので、即座にテーブル席を囲う衝立の陰に引っ込む。

事前の打ち合わせでは何か問題が起き次第、黒子が携帯電話で山城呼び出し、彼が状況に合わせた対応する方向で合意していた。

原作通りに事が進むとは限らないが、原作の流れで進むと仮定するなら、黒子が山城を呼び出す可能性は高い。

であるのなら、いつでも火中に飛び込める心構えをしておかねばならないだろう。

「幻想御手について知りたいなあ？」

そう心に決め、衝立の向こう側の様子を伺っていた山城の耳にやや大きめの声が聞こえてきた。

「どうやら始まったようだ。」

時間帯が時間帯であるせいか、店内は相応の喧騒に包まれている。

最初こそ声が聞き取れたが、直後から美琴と調査対象の相手方が交えているであろう会話は聞き取れなくなった。

尤も時折、喧騒にも負けないゴンゴンと額をテーブルに何度も叩きつけるような鈍い音　音源は十中八九、美琴の演技を真に受けた黒子が行っているであろう現実逃避行為顔ドラマ　が聞こえてくるので、大体何が起こっているかは把握できていた。

(……)

しかし、その鈍い音も唐突に鳴りを潜める。

それから数分。テーブルの上に置いた山城の携帯電話に動きは無い。

「もしかして、上手く行つたのか？」

ぽつりと山城は口にする。

黒子からの連絡が無い以上、美琴が彼らから情報を聞き出す事に成功したのかもしれない。

そんな淡い期待げんそつを山城は胸に抱くが、

「ええ　　ッ!?　トイレに集団でソロゾロは女の子の特権だと思つてましたが　　ッ!」

という絶叫を残し、脱兎の如くログアウト……もとい退店する友人、上条当麻かみじょうくつままに華麗にぶち殺された。

山城は失念していた。

白井黒子が御坂美琴の演技でショックを受けて、意識を手放し、テーブルに沈む事を。

気絶している人間が連絡を送れるはずも無い。

そして、この忘却の代償は大きかった。

上条の見事な逃走に呆気に取られたような間を置いた後、口々に罵声を発しながら上条を追い掛けて店を出て行く不良御一行。

同じく呆気に取られたが故に取り残され、我に返った直後にカクパルトから打ち出された艦上戦闘機のような勢いで彼らの追跡に移った美琴。

既に初期消火の可能性は潰えていた。

「……じゃあ、食後の運動に行きますか」

それでも、硬直から解けた山城は追う事を選択する。

山城が黒子に頼まれたのは火消しの役目だ。その役目は終わっていない。

このまま放っておけば、さらなる被害が……“人為的”落雷による周辺電気電子機器全滅の危機が待っているのだ。

さらに不幸にも、周辺という括りの中に彼自身が住まう寮も含まれている。

最早、背水の陣に等しい。断固として阻止しなければならないだろう。

お勘定、ここに置いておきます、と近くの店員に呼びかけ、テーブルに置かれた伝票の上に海底二万哩シーフードリアの代金を置いた山城は店員に何か言われる前にファミリーストランを駆け出した。

山城は駆け出た先の大通りで右と左を交互に見るが、早くも彼女の姿は夜の街中に消えていた。これではどちらに向かったのか分からない。

ならば、と山城は咄嗟に近場のビルの屋上に自身の座標情報を書き保存する。

搜索の基本、俯瞰<sup>ふかん</sup>である。

この機転は功を奏し、ファミリーレストランから東の方角で街の灯りとは明らかに異質な青白い電光が煌いたのを確認できた。

「あっちだな」

恐らく、いや、間違いなく美琴が不良達を焼いたのだろう。

「ご愁傷様です、と彼らを弔いつつ、山城はミリタリースニーカーの靴底でビルの屋上を蹴る。

そこからビルより低い隣の建物の屋根、次に街灯、さらに信号機と、次々に飛び移りながら、空中を最短ルートでその方向へと向かう。

やがて、煙を薄く棚引かせた状態で、電極を刺した蛙の足のように身体をヒクヒクさせながら地面に転がる数人の焦げた不良達の姿が見えてきた。

最初はそのまま通り過ぎようとした山城だが、ふとある事に気がつき、彼らの側へと降り立つ。

そして、おもむろに情報解析を実行。

とある品物を所持しているか調べ、持っていた不良達からそれを回収していく。

「御坂の電撃で焼きあがつてるけど……データ吸出しとかで役に立つかもしれないし、一応な」

確保した数台の焼け焦げた小型携帯音楽プレイヤーをポケットに入れ、不良達に向かって手短に合掌。

それを終えるや否や、山城は街灯の上へと自身の座標情報を上書き保存し、再び忍者のような移動を始める。



目指すは、この先にある大きな川。

そこに掛かる無骨なローゼ方式のアーチ鉄橋だ。

学園都市内にもごまんとあるであろう何の変哲も無い橋。

しかし、それは知る人ぞ知る　この世界では山城にしか分からないだろうが　始まりの鉄橋であった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8374/>

---

とある転生の上書保存（オーバーライト）

2011年1月6日07時01分発行